

蛇穴山古墳・宝塔山古墳 総社町屋敷南遺跡

総社公民館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



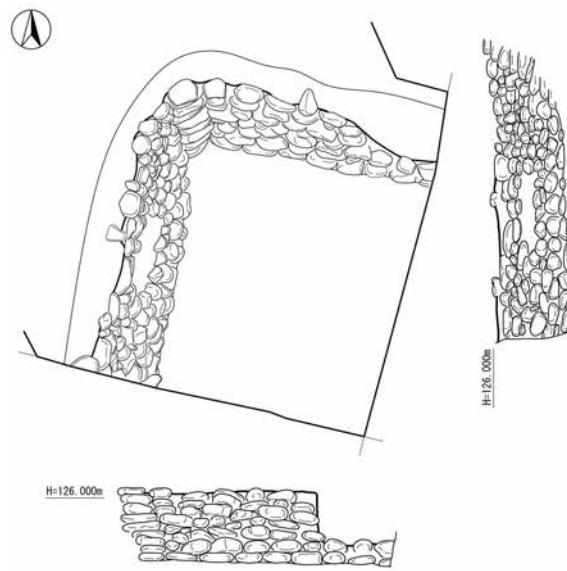
-2010.03-

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

蛇穴山古墳・宝塔山古墳

総社町屋敷南遺跡

総社公民館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



蛇穴山古墳中堤の葺石

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

巻首図版 1



1 総社町屋敷南遺跡と蛇穴山古墳（左下）、宝塔山古墳（中央）、愛宕山古墳（右上）（東から）



2 宝塔山古墳（左）と蛇穴山古墳（右）（南から）



3 宝塔山古墳と周濠（北東から）

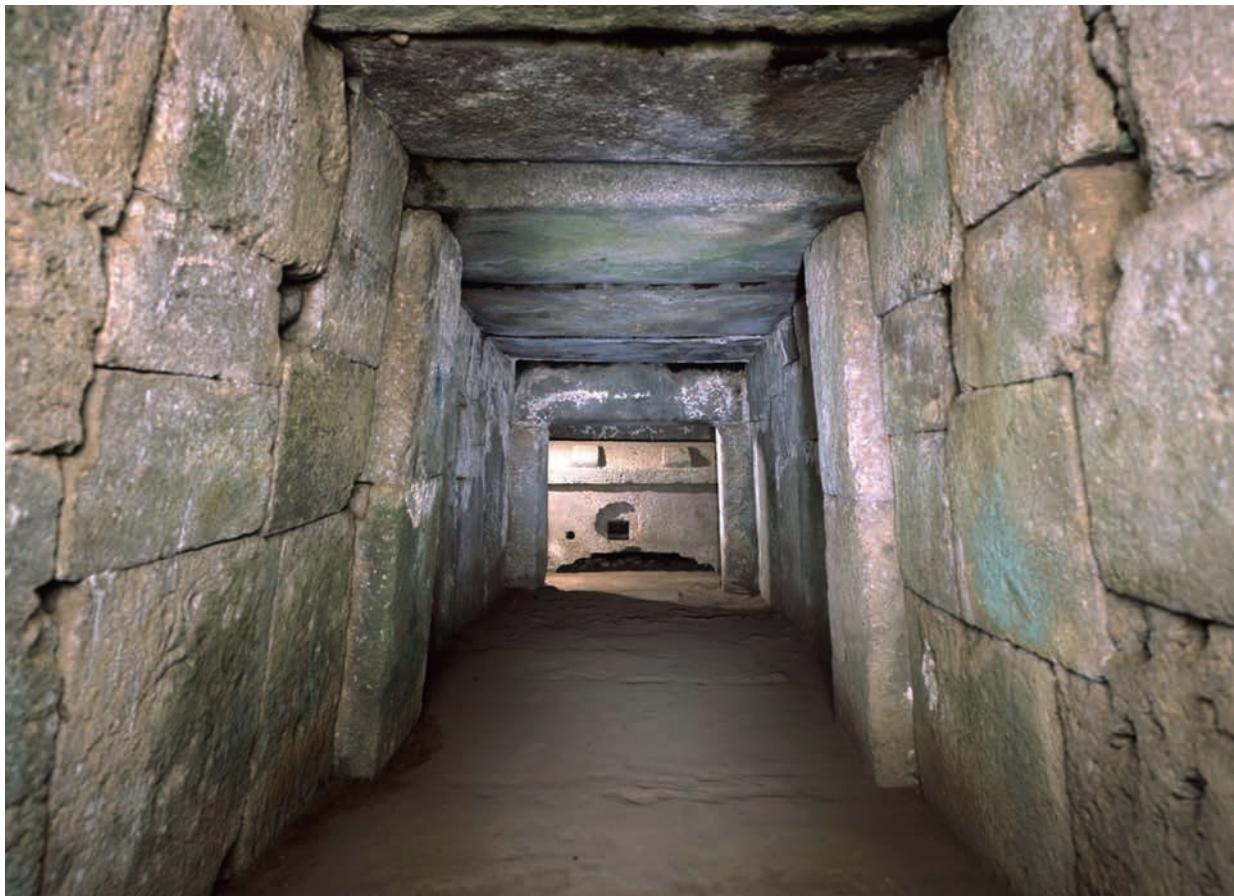


4 宝塔山古墳の墳丘（北西から）



5 宝塔山古墳の墳丘（北東から）

巻首図版 2



6 宝塔山古墳の石室（南から）



7 宝塔山古墳の墳丘（南西から）



8 宝塔山古墳の石室前面部は後世の修復（南から）



9 宝塔山古墳奥室の門柱（南から）



10 宝塔山古墳の家形石棺（南から）



11 蛇穴山古墳石室（南から）



12 石室入り口（西から）



13 玄室内の棺台（南から）



14 石室と墳丘（南から）



15 墳丘と 22 トレンチ（北から）

巻首図版 4



16 蛇穴山古墳 20 トレンチ中堤内側の葺石（南東から）



17 21 トレンチ中堤内側の葺石（東から）



18 21 トレンチ中堤外側の葺石



19 4 トレンチ中堤内側の葺石（東から）



20 13 トレンチ中堤内側の葺石（東から）



21 王山古墳全景（北西から）



22 王山古墳の調査（南東から）



23 王山古墳の調査（南東から）



24 王山古墳の横穴式石室（東から）



25 王山古墳の調査（北から）

巻首図版 6



26 山王庵寺出土の女性像 A (個人蔵)



27 山王廃寺出土の女性像 B (前橋市蔵)

巻首図版 8



28 愛宕山古墳の家形石棺（南から）



29 愛宕山古墳全景（西から）



30 遠見山古墳全景（南東から）



31 総社二子山古墳全景（東から）



32 総社二子山古墳（西から）

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、榛名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始めました。市内のいたる所から、人々の痕跡を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野國の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられる厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、上梓する発掘調査報告書は、平成19年度と平成21年度に実施した総社公民館建設に伴う蛇穴山古墳・宝塔山古墳・総社町屋敷南遺跡の範囲確認調査と発掘調査の成果です。

総社古墳群の最終末期に位置づけられる蛇穴山古墳では、墳丘が二重の堀で囲まれていることが判明し、82mの兆域長となることが判明しました。さらに宝塔山古墳では、周濠の北東部コーナーを検出できたことから兆域長が96mと拡大されることになりました。また、公民館用地の総社町屋敷南遺跡では古墳時代後期の集落を検出することができ、総社古墳群の周辺集落の動態を把握する材料を揃えることができました。

今後、史跡蛇穴山古墳と史跡宝塔山古墳については、今回の調査成果を吟味して追加指定に努めて行きたいと考えております。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、関係機関や各方面のご配慮の結果といえます。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼を申しあげます。

平成22年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長 戸塚 良明

例　　言

- 1 本報告書は、平成19、21年度に実施した総社公民館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査である。平成19年度は範囲確認調査、平成21年度は発掘調査である。なお、昭和50年度の蛇穴山古墳調査成果も再録した。
- 2 平成19年度に実施した範囲確認調査は以下の通りである。

遺跡名 蛇穴山古墳・宝塔山古墳、総社町屋敷南遺跡　記号 19A139
内 容 範囲確認調査（1～19トレンチ）
所在地 蛇穴山古墳…群馬県前橋市総社町総社1586-1 ほか
　　　　宝塔山古墳…群馬県前橋市総社町総社1603-1 ほか
　　　　総社町屋敷南遺跡…群馬県前橋市総社町総社1588-1 ほか
主体者 前橋市教育委員会（文化財保護課）
担当者 副主幹 梅澤克典・主査 木暮良久（文化財保護課）
期 間 第1次範囲確認調査＝平成19年10月29日～10月31日
　　　　第2次範囲確認調査＝平成20年2月6日～2月16日
- 3 平成21年度に実施した発掘調査は以下の通りである。

遺跡名 蛇穴山古墳（20～22トレンチ）・宝塔山古墳・総社町屋敷南遺跡　記号 21A139
内 容 発掘調査、蛇穴山古墳については20～22トレンチの調査
主体者 前橋市埋蔵文化財発掘調査団（文化財保護課内）
担当者 副主幹 山下歳信・主任 福田貫之・主事 清水亮介・文化財整備指導員 右島和夫
期 間 平成21年6月8日～7月23日
- 4 本書の作成は以下の通りである。

編 集 前原 豊
本文執筆 福田（第1章第1節、第4章）、小川卓也（第1章第2節）、
　　　　前原（第2章、第3章、第5章第1節）、桜岡正信（第5章第2節）、
　　　　阿久澤智和（第5章第3節）、右島（第5章第4節）
挿図作成 武井洋子、渡木秋子、峰岸あや子、湯浅たま江、湯浅道子
図版作成 並木史一、船津弘幸
遺構測量 井上測量株式会社・株式会社測設・有限会社丹生サーヴェイ
石室写真 たつみ写真スタジオ　塑像写真 宇貴俊夫
- 5 発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。

石倉稔夫、神山早苗、須田博治、須藤 豊、高澤京子、渡木秋子、中澤光江、庭山皓正、
平林しのぶ、星野和子、矢島 忠、湯浅たま江、湯浅道子
- 6 調査および報告書作成にあたっては下記の機関・諸氏よりご助言・ご指導をいただきました。
ここに御礼を申しあげます。（敬称略）

文化庁記念物課、国立歴史民俗博物館、群馬県教育委員会文化課、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 阿久津宗二、出浦 崇、井上唯雄、石塚久則、梅澤重昭、大澤伸啓、大塚 博、大塚昌彦、女屋和志雄、小根澤雪絵、加部二生、小宮俊久、桜岡正信、佐野良平、設楽博己、清水 巍、白石太一郎、杉山秀宏、住谷佳禹、関口 修、関口淳七、芹澤清八、田中隆明、田中広明、外山和夫、永井智教、中村 渉、林部 均、松島榮治、松田誠一、松田妙子、松田 猛、三浦茂三郎、宮田 育、矢島 浩、山本孝文、横澤真一、若狭 徹

- 7 把手付き須恵器については、群馬県埋蔵文化財調査事業団 桜岡正信氏から玉稿を賜った。
- 8 発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡 例

1 挿図中に使用した北は、原則として座標北を用いた。ただし、昭和50年度の調査は国家座標・公共水準点を用いていない。

2 插図に建設省国土地理院発行の1/200,000地形図（宇都宮、長野）、1/25,000地形図（前橋）を使用した。

3 遺構及び遺構施設の略称は、次のとおりである。

H…土師器使用の住居跡 T…竪穴状遺構 W…溝跡 I…井戸 D…土坑 P…ピット

4 遺構・遺物の実測図の基本的な縮尺は次のとおりである。ただし、図の配置上、ほかの縮尺を使用した方が適切な場合は、他の縮尺を適宜使用した。

遺構 全体図…1/800 トレンチ図 1/80、1/100

住居跡…1/60 竪…1/30

遺物 土器…1/3・1/4 陶磁器…1/3

5 セクション図の黒塗はAs-B、As-Kkの軽石・火山灰層を表す。

6 火山降下物の略称と年代は次の通りである。

As-Kk（浅間柏川テフラ：供給火山・浅間山、1128年降下）

As-B（浅間Bテフラ：供給火山・浅間山、1108年降下）

Hr-FP（榛名二ツ岳伊香保テフラ：供給火山・榛名山、6世紀中葉降下）

Hr-FA（榛名二ツ岳渋川テフラ：供給火山・榛名山、6世紀初頭降下）

As-C（浅間Cテフラ：供給火山・浅間山、3世紀後半から4世紀初頭）

目 次

はじめに

第1章 発掘調査の概要（平成21年度） 1

　　第1節 調査に至る経緯と調査方針（福田） 1

　　第2節 遺跡の立地と歴史的環境（小川） 1

　　第3節 基本層序（前原） 8

第2章 範囲確認調査の概要（平成19年度） 10

　　第1節 平成19年度第1次調査の概要（前原） 10

　　第2節 平成19年度第2次調査の概要（前原） 11

第3章 蛇穴山古墳と宝塔山古墳の調査 16

　　第1節 昭和50年度A～Fトレンチ（前原） 16

　　第2節 平成19年度1～19トレンチ（前原） 20

　　第3節 平成21年度20～22トレンチ（前原） 32

第4章 総社町屋敷南遺跡の調査 33

　　第1節 遺構（福田） 33

　　第2節 遺物（福田） 44

第5章 成果と課題 47

　　第1節 蛇穴山古墳・宝塔山古墳について（前原） 47

　　第2節 蛇穴山古墳外周溝出土の須恵器について（桜岡） 64

　　第3節 総社町屋敷南遺跡の古墳時代後期の集落について（阿久澤） 74

　　第4節 東国における総社古墳群造営の歴史的意義（右島） 77

卷首図版目次

- 口絵 1 宝塔山古墳と調査区
2 宝塔山古墳
3 蛇穴山古墳
4 蛇穴山古墳の中堤葺石

- 口絵 5 王山古墳
6 山王廃寺女性像A（個人蔵）
7 山王廃寺女性像B（前橋市蔵）
8 総社古墳群

付表目次

Tab. 1 総社町屋敷南遺跡出土遺物観察表45

Tab. 2 蛇穴山古墳と宝塔山古墳の調査経過63

挿図目次

- Fig. 1 遺跡位置図（1/200,000）2
2 周辺の遺跡（1/25,000）4
3 調査周辺図（1/2,500）5
4 総社古墳群7
5 基本層序9
6 トレンチ設定図12
7 蛇穴山A・Bトレンチ（昭50）17
8 蛇穴山C～Fトレンチ（昭50）18
9 蛇穴山1・2トレンチ（平19）19
10 蛇穴山4・7トレンチ（平19）21
11 蛇穴山8～10トレンチ（平19）22
12 蛇穴山11トレンチ（平19）24
13 蛇穴山12・13トレンチ（平19）25
14 蛇穴山20トレンチ（平21）26
15 蛇穴山21・22トレンチ（平21）27
16 宝塔山古墳18トレンチ（平19）28
17 宝塔山古墳23区（平21）30
18 町屋敷南遺跡全体図（平21）34
19 H-1号住居跡36
20 H-2号住居跡37
21 H-2号住居跡38
22 H-3号住居跡40

- Fig.23 H-4号住居跡41
24 住居・蛇穴山古墳出土遺物43
25 井戸・溝出土遺物45
26 蛇穴山・宝塔山古墳復元図48
27 蛇穴山古墳の葺石（1）53
28 蛇穴山古墳の葺石（2）54
29 砂礫使用の葺石裏込め57
30 蛇穴山・宝塔山古墳の石室59
31 須恵器把手付瓶集成図（1）65
32 須恵器把手付瓶集成図（2）67
33 須恵器把手付瓶集成図（3）68
34 須恵器把手付瓶集成図（4）70
35 須恵器把手付瓶集成図（5）71
36 総社町屋敷南遺跡周辺の古墳時代後期の集落75
37 総社古墳群の変遷78
38 総社二子山・觀音山古墳に類する角閃石安山岩石室の分布79
39 群馬県古墳編年図80
40 黄金塚古墳の墳丘と石室81
41 宝塔山古墳石室（左）と黄金塚古墳石室（右）の比較82

写真図版目次

- PL. 1 蛇穴山Aトレンチ
2 蛇穴山B～Fトレンチ
3 蛇穴山1～3・4・6トレンチ
4 蛇穴山3・4・7トレンチ
5 蛇穴山8～11トレンチ
6 蛇穴山11～13トレンチ
7 蛇穴山13・14・16～18トレンチ

- PL. 8 蛇穴山20・21トレンチ
9 蛇穴山21・22トレンチ
10 宝塔山古墳と総社町屋敷南遺跡
11 総社町屋敷南遺跡の遺構
12 出土遺物
13 出土遺物

第1章 発掘調査の概要（平成21年度）

第1節 調査に至る経緯と調査方針

(1) 調査に至る経緯

平成21（2009）年5月20日付けで前橋市長高木政夫（生涯学習課管理係）より前橋市総社公民館新築移転工事に伴う埋蔵文化財確認調査依頼が前橋市教育委員会に提出された。前橋市教育委員会ではこれを受け、内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長戸塚良明（以下「調査団」という。）に対して調査実施について協議を行い、調査団はこれを受託した。平成21（2009）年6月8日、調査依頼者である前橋市長 高木政夫と前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 戸塚良明との間で、発掘調査の委託契約を締結し、6月15日に現地での発掘調査を開始するに至った。

なお、発掘調査に先行した範囲確認調査は、前橋市教育委員会生涯学習課からの依頼に基づいて2回に分けて実施した。

第1次試掘調査として平成19（2007）年10月29日から31日までの3日間実施した。第2次調査は、体育館とプールが撤去された後の平成20（2008）年2月6日から16日までの11日間に渡って実施された。

(2) 調査方針

委託調査実施は、総社公民館新築工事予定期で、調査面積は1,583m²である。グリッド設定にあたっては、至近の3級基準点（世界測地系）

001・3-1の

X=45406.865m、Y=-71166.457m

002・3-2の

X=45448.034m、Y=-71276.581m

を基本に切りの良い数値を使用し4mピッチで設定した。グリッドの呼称は、経線をX、緯線をYとして、北西隅を基点に番付して呼

称とした。調査区の公共座標は以下のとおりである。

測点

世界測地系（第IX系）

X40・Y20グリッド

X=45,480.000、Y=-71,200.000

発掘調査は遺構確認面まで重機（0.45バックホー）で表土掘削を行った。遺構の確認・掘削は発掘作業員により移植ゴテ・鋤簾などで慎重に行った。遺構調査に関しては土層の堆積状況を確認するために周濠は壁面、土坑・ピット等は長軸方向にベルトを設定し観察を行った。

遺構図化については電子平板を用いて平面図・断面図の測量・編集を行い、断面図については直接、実測して作成した。遺構の記録写真については35mmモノクロ・カラーリバーサル・デジタルカメラの3種類を用いて担当者が撮影、遺跡全体に対してはラジコンヘリコプターによる空中撮影を実施した。

第2節 遺跡の立地と歴史的環境

(1) 遺跡の立地

総社古墳群は、前橋市西部の総社地区を中心とした利根川西岸に、南北約4kmの範囲に分布する古墳群である。榛名山東南麓に広がる相馬ヶ原扇状地の扇端が前橋台地に移行する付近に当たる。北西から南東方向に向かって緩やかに傾斜しており、牛王頭川や、八幡川、染谷川、牛池川といった榛名山麓を水源とする多くの中小河川も同方向に並走して、台地を細長く画している。また、前橋台地は、約2~2.4万年前の浅間山の噴火により、利根川が赤城山と榛名山の間から関東平野に流れ出して形成された緩傾斜の台地であり、その中央を現利根川が貫流している。現



Fig. 1 遺跡位置図 (1/200,000)

利根川の流路は中世後期以降のもので、旧利根川は現在の広瀬川流域に広がる広瀬川低地帯を流下していたと考えられる。

(2) 歴史的環境

古墳群が所在する総社地区から元総社地区にかけては、古代上野国の政治・経済・文化の中心地として歴史上重要な役割を果たした地域であり、本市の歴史を語る上で欠くことのできない遺跡が多数所在する。本事業の主体となる古墳時代を中心として、各時代の様相を概観する。

縄文時代：高崎市国分町～北原町の上野国分僧寺・尼寺中間地域（⑨）では、前期～晚期の遺物が出土し、加曾利E式期の集落が検出されている。また元総社蒼海遺跡群（⑩）でも諸磕b式期および加曾利E式期の集落が調査されており、前期および中期をピークとした集落展開がなされたものと考えられる。また、本市では類例の少ない大洞B C～C 2式期の住居跡も牛池川沿いの場所で確認されており、該期の集落の様子を知る上で重要な資料である。

弥生時代：調査事例は少なく、上野国分僧寺・尼寺中間地域で後期の集落や方形周溝墓が確認されているほか、下東西遺跡（⑪）で後期の集落を検出している。また、元総社明神遺跡（⑫）では流路内から中期に遡る土器が出土している。

古墳時代：当地域が地理・歴史的に重要な位置を占めるに至った時期であり、大きな画期といえる。前期の様相は不明瞭ながら、5世紀後半以降相次いで大型墳を築いた総社古墳群は地域の首長墓と考えられる。その端緒を開くのは遠見山古墳（④）である。

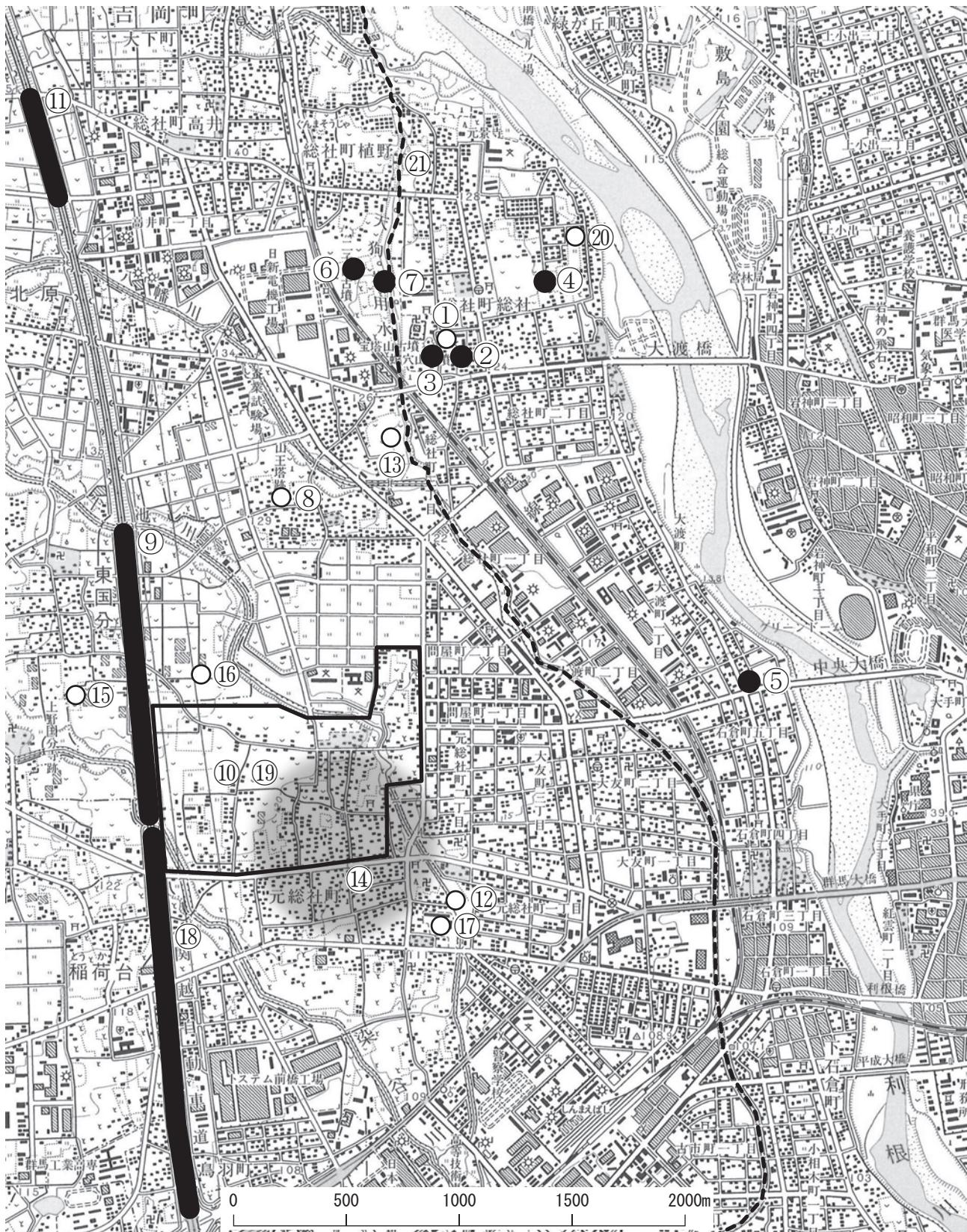
遠見山古墳は前橋市総社町総社字給人城川に所在し、古墳群中北東の現利根川寄りの場所に位置する。東西方向に主軸を持ち、現況での墳丘長70mほどの前方後円墳である。周囲は南～西側を畠で囲まれるもの、後円部

のある東側は住宅地となっている。宅地開発等に伴って過去2回発掘調査が行われ、周濠下層にHr-FAの堆積が確認されている。

遠見山古墳に続くのは、古墳群の最南部である前橋市大渡町に所在する王山古墳（⑤）である。6世紀初頭の築造と考えられ、昭和47・49年に区画整理事業に伴う全面調査が行われた。南北方向に主軸を持ち、前方部を北に向ける。墳丘全体に施した葺石の遺存状態も良好で、墳丘上からは盾形・大刀形埴輪が出土している。また、主体部は南東方向に開口する横穴式石室をいち早く採用しており、細長い石室には赤彩が施されている。現在は公園として整備され、昭和59年に市史跡に指定されている。後続するのは総社二子山古墳となるが、王山古墳との時間的なヒアタスから、その間に王山古墳の北方に所在した前方後円墳の王河原山古墳を充てる考えが提示されている（右島1985）。

総社二子山古墳（⑥）は古墳群でも北部に位置し、前橋市総社町植野に所在する。明治8年には陵墓に治定され（翌年解除）、昭和2年に国史跡に指定されている。古墳群中最大規模の前方後円墳であり、東西方向に主軸を持ち、南側に開口した石室は後円部と前方部の2カ所に築かれる。角閃石安山岩を用いた加工石材による後円部石室は県内の該期古墳でも最大級である。また、前方部石室は、規模は後円部石室に劣るが、輝石安山岩の自然石を使用している。石室内から出土したとされる頭椎大刀の絵図が残されており、同時期の築造とみられる綿貫觀音山古墳出土の大刀との類似性が注目される。前方部石室からは、頭椎大刀のほかには、耳管や勾玉、刀子、六鈴釧、脚付須恵器壺などが出土したとされ、現在、東京国立博物館に所蔵されている。古墳の築造は6世紀後半と考えられる。本古墳をもって前方後円墳の築造は終わり、以降は大型方墳へと移行する。

愛宕山古墳（⑦）は、総社二子山古墳南東



- ①総社町屋敷南遺跡 ②蛇穴山古墳 ③宝塔山古墳 ④遠見山古墳 ⑤王山古墳 ⑥総社二子山古墳
 ⑦愛宕山古墳 ⑧山王廃寺 ⑨上野国分僧寺・尼寺中間地域 ⑩元総社蒼海遺跡群 ⑪下東西遺跡
 ⑫元総社明神遺跡 ⑬大屋敷遺跡 ⑭上野国府 ⑮上野国分僧寺 ⑯上野国分尼寺
 ⑰元総社小学校校庭遺跡 ⑱鳥羽遺跡 ⑲蒼海城 ⑳総社城 ㉑天狗岩用水

Fig. 2 周辺の遺跡 (1/25,000)

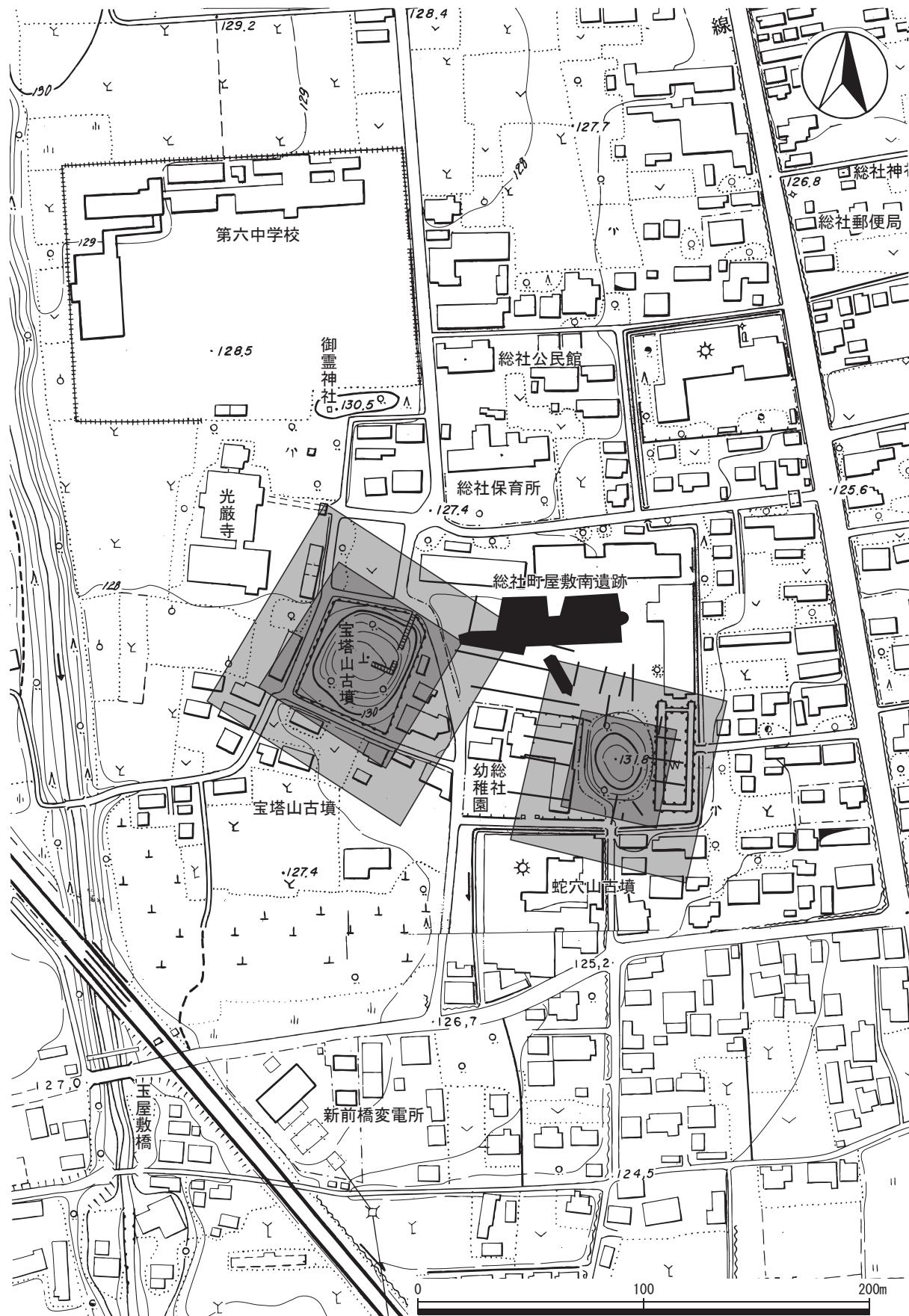


Fig. 3 調査周辺図 (1 /2,500)

の至近の場所に築かれる。墳丘規模は一辺56mの方墳で県内該期の古墳では最大規模である。墳丘東側を江戸時代初期に開削された天狗岩用水に削られるものの墳丘の遺存状態は良好で、現況測量成果から2段築成と考えられる。墳丘南側に開口した自然石積みの巨大な石室を持ち、石室奥には凝灰岩製の剖抜式家形石棺を置く。7世紀前半の築造と考えられる。

続く7世紀中葉には、愛宕山古墳の南方に宝塔山古墳（③）が築かれる。墳丘規模66mの巨大な方墳である。今回の総社町屋敷南遺跡（①）の調査で周濠を確認し、周濠を含めた兆域は一辺102mと推定される。墳頂部には、江戸時代初期に総社藩を治めた秋元氏の歴代墓地が安置されている。南向きに開口した石室は截石切組積の巧みな石室で、石室内には漆喰が塗布される。玄室には剖抜式家形石棺が置かれ、石棺の脚部には格狭間が施されるなど仏教の影響が看取される。墳丘規模も含めて県内の他の古墳と比較しても隔絶したつくりを誇り、昭和19年に国史跡に指定されている。

総社古墳群最後の大型墳は宝塔山古墳に隣接する蛇穴山古墳（②）である。墳丘規模は一辺約44mとやや縮小するものの、周濠外側に葺石を施した中堤を巡らせ、その外側に外周溝を巡らせており、兆域としては一辆が82mを測る。南に開口した石室も、玄室奥壁、側壁、天井石を巨大な一石で石材を巧みに組み合わせ、石室壁面には宝塔山古墳同様漆喰を塗布する。昭和49年に国史跡に指定されている。

これらの方墳は、大型な墳丘規模および形状、家形石棺の安置、漆喰の塗布など、県内の該期古墳とは一線を画したつくりを持っている。また、石材の加工技術としては古墳群南西に所在する山王廃寺との共通性が指摘されており、山王廃寺の創建年代と併せ、被葬者と中央政権との強いつながりが想定されて

いる（尾崎1966、右島1985、津金沢1983）。

宝塔山古墳、蛇穴山古墳と併行して造営事業が進められた山王廃寺（⑧）は、古墳群の南西約1kmの至近に位置している。山王廃寺は、大正年間に塔心礎が発見され、周囲に石製鷲尾や根巻石などが存在するなど、昭和3年には国史跡に指定されている。昭和～平成の調査から、7世紀後半創建と推定され、一辆80mほどの回廊に囲まれた法起寺式の伽藍配置を持つ白鳳寺院であったことが明らかになっている。また、昭和56年の調査で出土した「放光寺銘瓦」から、山上碑や『上野国交替実録帳』に見られる「放光寺」と推定される。平成9～11年の調査では塑像が大量に出土するなど、その歴史的価値が広く認識され、平成19年には名称変更および指定範囲の拡大が行われている。

集落遺跡や生産遺跡としては、上野国分僧寺・尼寺中間地域や元総社明神遺跡、元総社蒼海遺跡群、大屋敷遺跡（⑬）などで集落や水田跡が検出されている。

奈良・平安時代：古墳時代終末期の盛況から引き続き、当地域は古代上野国を中心地として繁栄した。上野国府（⑭）や上野国分僧寺（⑮）、国分尼寺（⑯）が置かれ、政治や経済、文化の中心地として賑わった。国分僧寺は昭和15年に国史跡に指定されて、群馬県教育委員会による調査から、その威容が明らかになっている。上野国府跡は、前橋市教育委員会による調査が行われており、元総社小学校校庭遺跡（⑰）や元総社蒼海遺跡群で、大型掘立柱建物跡の検出が相次いでおり、近く様相が明らかになると考えられる。

集落跡は元総社蒼海遺跡群や上野国分僧寺・尼寺中間地域、鳥羽遺跡（⑱）などで確認されており、多数の集落跡が調査されている。

中世：永享元年（1429）に、上野国守護代の長尾氏が上野国府跡に築いた蒼海城（⑲）は、県内でも最古級の城郭跡と位置づけら



Fig. 4 総社古墳群

れ、堀跡などが確認されている。

近世：近世初頭に入封されて総社藩を治めた秋元長朝は、総社城（②〇）を築くとともに城下町の整備に着手した。また、地域の生産力向上を目的として、現利根川から直接取水した天狗岩用水（②一）を開削した。この用水路は、伊奈忠次による「代官堀」へと引き継がれ、五千石用水とともに周辺地域を潤すことに成功し、現在までその恩恵を受けている。なお、遠見山古墳は、総社城の物見台として利用されたことからその名が付けられたとされ、「総社城絵図」（前橋市立図書館所蔵）にも描かれている。

第3節 基本層序

調査地は総社小学校校庭を中心であったため、造成により表土層が除去されていたので、総社町の山王廃寺調査地や元総社蒼海遺跡群、上野国府跡調査区を参考し、8トレンチの墳丘下の自然層序を合成して基本層序模式図を作成した。

模式図で示すとおりで、基本的にI～VI層が堆積していたわけであるが、校庭の造成によりI～V層まではすでに除去され、遺構確認面のほとんどがVI層の総社砂層であった。

これらの層中にはいわゆる指標テフラが含まれ、II層にAs-B軽石（1,108年、浅間山供給）、III層にはHr-FP軽石（6世紀中葉、榛名山二ツ岳供給）、Hr-FA層（5世紀末から6世紀初頭、榛名山二ツ岳供給）、As-C（4世紀初頭、浅間山供給）が認められ、As-CはV層に主体的に含まれる。

As-B純堆積層（II層）は、今回調査では宝塔山古墳の周濠内から火山灰、軽石が検出されるほか、現耕作土やI層中にも混入した状況で確認された。

III層は古墳後期～奈良・平安時代の遺物包含層であり、総社町屋敷南遺跡の集落も本来この層中にあったわけである。ただ、この層

の形成要因は様々であったとみられ、形成時期も古墳後期～奈良・平安時代と幅をもつことから、調査区によって遺物の包含状況や混入物に差異がみられる。

IV層はHr-FA層である。墳丘下などに残っているのみである。沖積地にはHr-FPF1として土石流として厚く堆積する場合が多い。

V層はAs-C軽石を多量に含む黒色土で、古墳時代前期に形成されたと考えられ、国府や山王廃寺を含む奈良・平安時代の遺構調査時の指標（地山）となる層である。

VI層は、VII層（総社砂層）への漸移層で、上部の黒色土から下にいくにつれ黄褐色土（場所により褐色粘質土）へと漸移する。

VII層は総社砂層と呼ばれる基盤層であるが場所により様相が異なり、ロームに近い色調・土質で、ほかの調査区では明褐色もしくは白色に近い明褐灰色を呈す粘質土である。後者は、堆積時に水の影響を強く受けたものと思われる。

総社砂層については、総社・元総社地区の前橋泥炭層上位には砂層が見られることから、早田勉によって総社砂層と命名された。早田によれば、総社砂層は厚さ5mを超えるとされ、浅間総社テフラ降下後の縄文時代早期から前期もしくは後期までに場所ごとに堆積したものとされる。早田（2003）は、総社砂層の直下に草津白根熊倉テフラの存在から、総社・元総社地区とその周辺に広く認められる総社砂層は、約5000年前頃に堆積を開始したと一部改訂を行った。

各トレンチの土層堆積状況は柱状図のとおりである。

I層…As-B軽石が混入する耕作土・表土層で、混入量の多寡により、a（新）・b（旧）に分けられる。Ia層…灰黄褐色砂質土現在の表土・耕作土。Ib層…灰黄褐色砂質土旧表土・耕作土。いわゆるAs-B混土層。

II 層…As-B 純層

III 層…暗褐色土。As-C、Hr-FPなどの軽石粒を5~10%程度含む。場所により粘性が変化する。(奈良・平安時代の遺物包含層)。

IV 層…墳丘下ではHr-FAなどの堆積がみられる。

V 層…黒褐色土。As-Cを10~30%程度含む。場所により粘性が変化する。この層上面で、古墳後期~奈良・平安時代の遺構が確認しやすくなる。

VI 層…総社砂層への漸移層。上部黒色土から下に行くにつれ、黄褐色土(場所により褐色粘質土)へ漸移する。

VII 層…総社砂層。場所により色調・土質が異なり、黄褐色土でロームに近いところと、明褐色もしくは白色に近い色調を呈す粘質土のところがある。

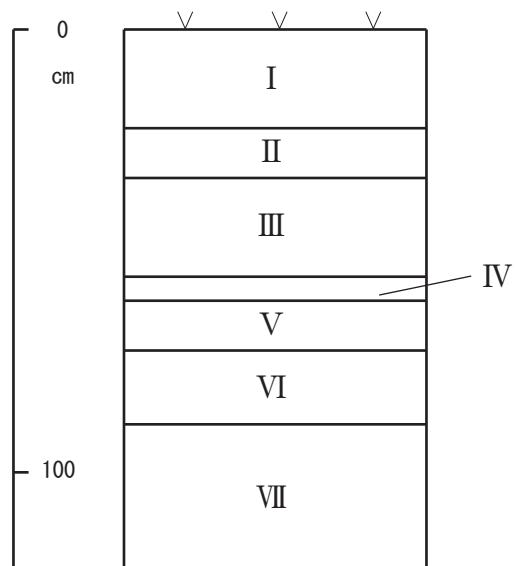


Fig. 5 基本層序

第2章 範囲確認調査の概要（平成19年度）

第1節 平成19年度第1次調査の概要

1 概 要

依頼者	前橋市教育委員会生涯学習課	り記録に留めた。また、写真撮影を行って記録資料とした。
開発面積	合計9,766m ² (幼稚園跡地1,384m ² 、小学校跡地8,382m ²)	
依頼地	幼稚園跡地 総社町総社1586-1, 1587-1 小学校跡地 総社町総社1584-3, 1585-1, 1587-3・4, 1588-1, 1603-1	
依頼目的	総社公民館建設に伴い総社小学校解体工事後の跡地内の埋蔵文化財範囲確認調査。蛇穴山古墳および宝塔山古墳範囲およびその他の埋蔵文化財の有無を確認するため。	
調査期間	平成19年10月29日～31日	
調査面積	95m ²	
遺跡の種類	古墳・包蔵地	
主体者	前橋市教育委員会文化財保護課	
担当者	副主幹 梅澤克典 主査 木暮良久 主任 真下 晃 主任 近藤雅順 主事 池田史人 嘱託員 綿貫綾子	
調査参加		

2 調査経過

総社小学校跡地に隣接する史跡蛇穴山古墳の周濠等の外周施設を確認するため、0.45m³のバックホーを使用して、トレンチ掘削して遺構の検出作業を行った。トレンチ名称は、便宜的に掘削した順番により、1～6トレンチを付した。各トレンチおよび検出した遺構は、縮尺1/100の平面図を作成して位置を押さえ、必要に応じて縮尺1/10の平面図によ

3 検出遺構

- 1トレンチ 近世堀跡、周濠、外周溝、中堤、中堤内外面に葺石
- 2トレンチ 近世堀跡、周濠、外周溝
- 3トレンチ 周濠、中堤、中堤内面に葺石
- 4トレンチ 近世堀跡、周濠、中堤、葺石
- 5トレンチ 外周溝
- 6トレンチ 中堤

4 所 見

- ① 3・4トレンチで検出した石積みは、蛇穴山古墳中堤の壁面に積まれた葺石である。特に3トレンチは周濠北西隅に施された葺石であり、古墳が整然とした設計で築成されたことが推定できる。
- ② 3および4トレンチの葺石を結ぶラインは、蛇穴山古墳周濠西側の外郭線になると考えられる。また3トレンチで直角に曲げたラインは周濠北側の外郭線になると予想される。なお、このラインは、昭和50年調査の際の蛇穴山古墳墳丘測量図から想定される墳丘想定線にほぼ並行する。
- ③ 1・2・4トレンチで検出した堀跡は出土遺物から近世以降の所産と考えられる。この時期に、蛇穴山古墳周濠は大きく掘り込まれて改変されたと考えられ、周濠北側の外郭線は、この時に失われてしまっている。
- ④ 1トレンチでは外周溝と中堤を検出した。中堤の外側には葺石が存在する。また、2トレンチで検出した外周溝には葺石が施されていないが、覆土中から葺石と同様なサイズの河原石が多量に出土しているため、1トレンチと同様に葺石が並んでいた可能性が高い。さらに1・2・5トレン

チで検出した外周溝が一直線上に並ぶ。

- ⑤ 以上のことから、蛇穴山古墳は周濠外側に葺石を施した中堤を伴っていた可能性がある。現在はその上半は削平され失われてしまつたが、外堤は現状よりも高く築成されと判断できる。4トレンチで外周溝が確認できなかつたのは、西が高く東が低い地形であったため、校庭造成時に削平をされたものと考えられる。

5 問題点

- ① 3トレンチと4トレンチの間隔が狭いため、葺石を結ぶラインを延長した周濠西側外郭線は、誤差が生じやすい。北側の外郭予想線も同様である。
- ② 西側で外周溝が確認できていない。地形などの理由も考えられるが、中堤外側の線を確定するためには、西側でも外周溝や葺石を確認する必要がある。
- ③ 昭和50年調査の墳丘図に、測量基点や座標が明確でなかつたため墳丘想定線が不確かである。今回の試掘により想定された周濠および外周溝のラインが、墳丘想定線とほぼ平行することが確認できたが、図面と現地が合致しているか確認する必要がある。

6 課題

- ① 正確な墳丘図および石室平面図の作成。現状の測量図に正確な国家座標を持たせ、位置関係を明らかにする。
- ② 西側および東側の確認調査。旧総社幼稚園建物および体育館、プールの撤去後に改めて確認調査を行い、今回の試掘調査結果の裏付けや修正を行う。
- ③ 墳丘範囲の確定。史跡指定範囲内の確認調査の必要。
- ④ 調査の結果、蛇穴山古墳の指定範囲外に周濠が現存していることが確認できた。また、中堤と外周溝が存在することが判明した。中堤の内外に葺石が存在する。

第2節 平成19年度第2次調査の概要

1 概要

依頼者	前橋市教育委員会生涯学習課
開発面積	9,766m ² (幼稚園跡地1,384m ² 、小学校跡地8,382m ²)
依頼地	総子町総社1586-1、1587-1 総社町総社1584-3、1585-1、1587-3・4、1588-1、1603-1
依頼目的	総社公民館建設に伴い総社小学校解体工事後の跡地内の埋蔵文化財範囲確認調査。蛇穴山古墳および宝塔山古墳範囲およびその他の埋蔵文化財の有無を確認するため。
調査期間	平成20年2月6日～16日
調査面積	348m ²
遺跡の種類	古墳・包蔵地
主体者	前橋市教育委員会文化財保護課
担当者	副主幹 梅澤克典 主査 木暮良久
調査補助	主任 真下 晃 主事 池田史人 主事 清水亮介

2 調査結果

旧総社小学校および旧総社幼稚園敷地内において、隣接する史跡・蛇穴山古墳および史跡宝塔山古墳の周濠等の外周施設を確認し、古墳範囲を確定するため。また住居跡等の埋蔵文化財の存在を確認するため、0.45m³のバックホーを使用して14本のトレンチを設定して遺構の検出作業を行つた。

トレンチ名称は、平成19年10月に実施した第1次試掘調査のトレンチ番号に次いで、7トレンチから19トレンチと呼称した。各トレンチおよび検出した遺構は1/100平面図を作成して国家座標系により位置を押さえ、また写真撮影も行って記録資料とした。

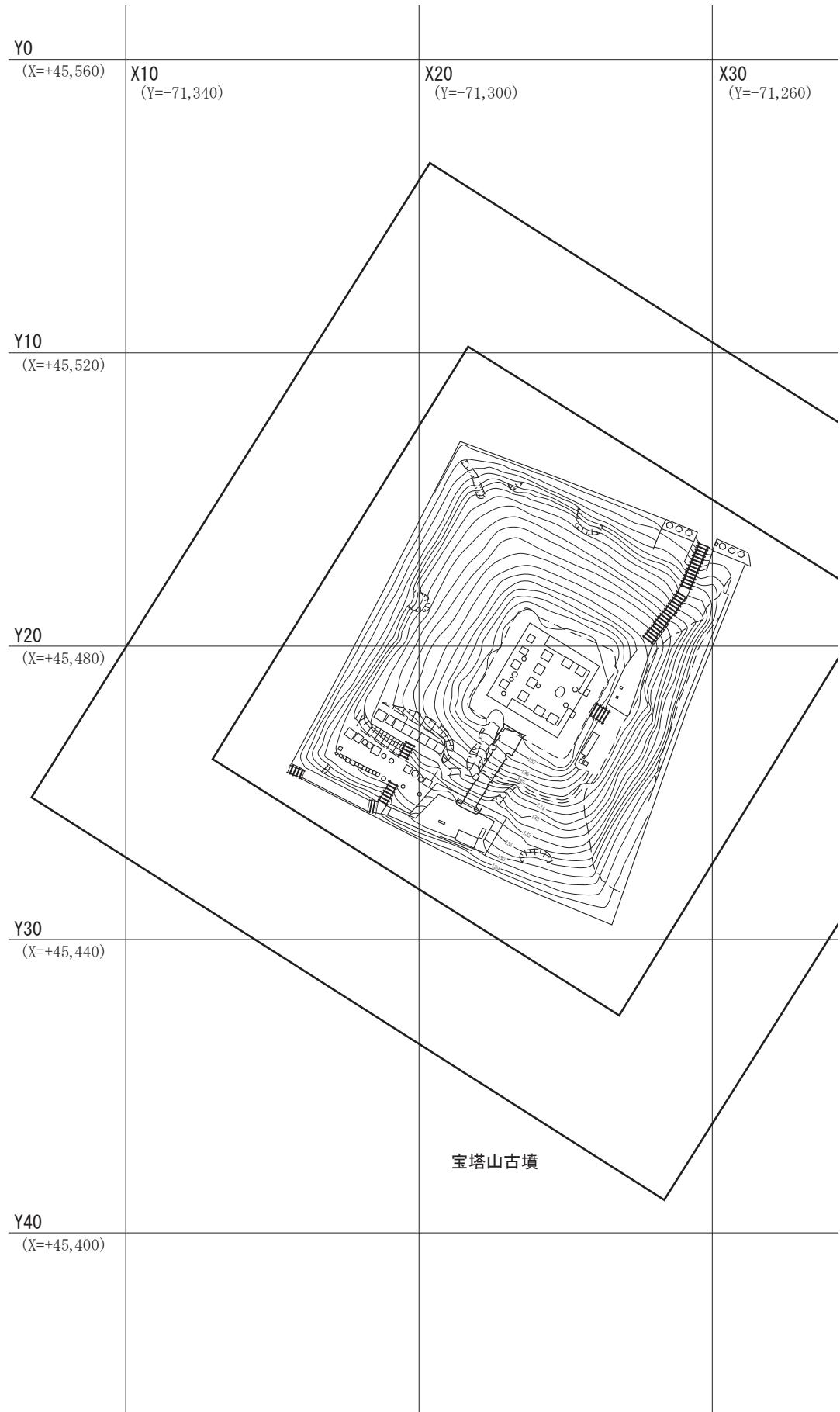
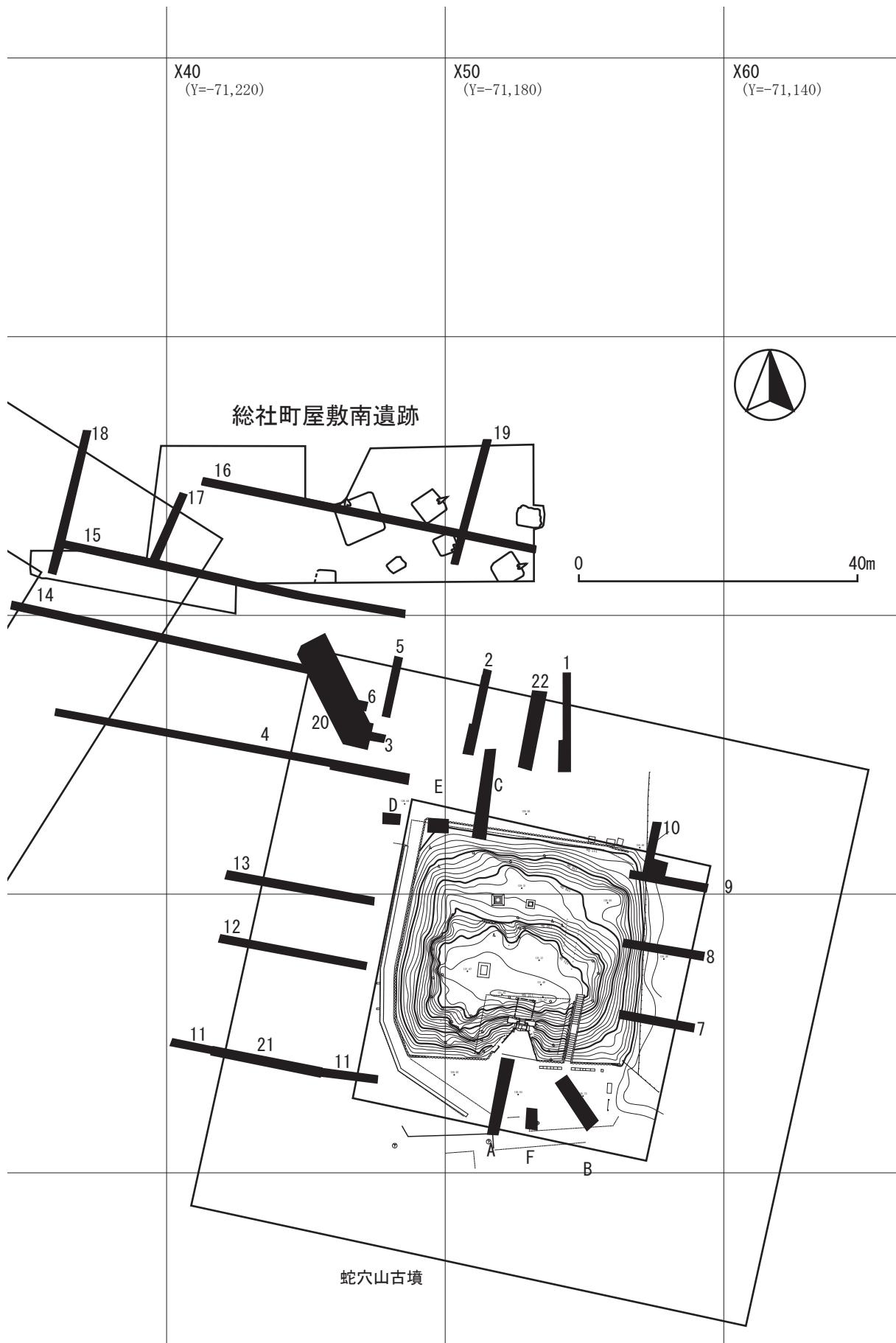


Fig. 6 トレンチ設定図



3 検出遺構

今回の試掘調査は、前回の調査により想定された蛇穴山古墳の外周構造および古墳範囲を確定するため、東側の旧総社小学校プール跡地の蛇穴山古墳墳丘東側ラインの検出、西側の旧総社幼稚園跡地内における蛇穴山古墳周濠・中堤・外周溝の検出、旧総社小学校校庭部分では、宝塔山古墳の外周施設の確認、その他の埋蔵文化財の確認のためトレンチを掘削して遺構の検出作業を行った。

① 蛇穴山古墳

旧総社小学校プール跡地に設定した7および8トレンチから、蛇穴山古墳墳丘東側裾部の葺石と考えられる石列を2段検出した。裾部に2段築成の基壇が想定できる。9および10トレンチでは、墳丘北側裾部の根石列を検出し、7・8トレンチの内側の葺石列に対応すると考えられる。外側の葺石列は近世の周濠改変により失われてしまっている。葺石(根石)列の外側には夥しい量の玉石を主体とする層が堆積しており、墳丘に使用していた可能性が考えられる。

旧総社幼稚園跡地に設定した11トレンチ東側で墳丘南西隅付近の裾部を検出した。また、11~13トレンチで蛇穴山古墳西側の中堤および外周溝を検出し、中堤の内・外面には葺石が施されていることを確認した。周濠は近世の掘跡の掘削で改変されており、12トレンチでは、中堤内側まで掘削がおよんでいた。

② 宝塔山古墳の周濠

4・14・15・16・17トレンチで宝塔山古墳の周濠北東隅付近の立ち上がりを検出した。周濠内には堀底近くまで浅間B軽石の堆積が認められる。周濠外側の立ち上がりには葺石等の施設は認められず、また中堤・外周溝等は認められていない。

③ 住居跡

16・19トレンチから、古墳時代の竪穴式住居跡2軒を検出した。

4 蛇穴山古墳

周濠外側に中堤を設けさらに外側に外周溝が巡り、2重の堀跡を有する方墳が想定される。また、墳丘下部には二段葺石が存在し、川原石により化粧が施されていることが予想される。一辺が82mの整然と規格された大型の方墳と考えられる。

- ① 墳丘と周濠のほか、中堤と外周溝が新たに検出された。中堤・外周溝とも北と西から検出されていることから、南・東面にも存在することが考えられる。
- ② 古墳の大きさを外周溝で復元すると東西・南北とも82mとなる。
- ③ 外周溝は、上幅3~3.2m、深さ0.2~0.5mである。中堤の外側にも葺石が存在する。
- ④ 中堤は、上幅5.1~5.2m、下幅6.1~6.4mである。上面は削平を受けている。
- ⑤ 中堤の葺石は0.5~0.2mの河原石である。いずれも扁平な河原石の側面を水平に意識しながら積んでいる。ただし、コーナー部は大型の河原石を用いている。
- ⑥ 周濠は東西、南北とも幅11m前後、深さ1.1~1.3mである。
- ⑦ 墳丘裾部には葺石と多量の玉石が検出された。玉石の存在は古墳基壇面の化粧仕上げと考えられる。さらに、墳丘斜面に玉石層が0.5~0.8m厚さで認められた。多量な玉石層の存在から墳丘斜面上にも玉石を用いたと考えられる。
- ⑧ 墳丘規模は東西・南北とも43mと推定され、方位はN-13°-Eに振れている。

5 宝塔山古墳

検出した周濠から復元した古墳の規模は一辺96mと推定できる。周濠外側には中堤や外周溝は存在しない。

- ① 周濠外側の立ち上がりを5ヶ所で確認できた。東側に3ヶ所、北方向に2ヶ所に確認でき、北東コーナーの一部を検出した。

周濠を復元すると幅18mを想定でき、深さは0.5~0.7mである。周濠を含めた古墳の規模は96mを測る。

- ② 中堤や外周溝に相当する部分の確認作業を行ったが、後世の掘削が著しいため、その有無について検証できなかった。しかし、痕跡も見えなかつたことから可能性は低いと考えられる。周濠底面近くにAs-Bテフラ火山灰と軽石層の純層が厚く堆積していた。
- ③ 墳丘復元規模は50mとされていたが、調査の結果60mとなる。方位はN-34°-Eに振れ、蛇穴山古墳より東に振れている。

6 住居跡

校庭部分から古墳時代竪穴住居跡2軒を検出した。このことから、蛇穴山・宝塔山古墳の周辺に、古墳以外にも当該期の遺構が存在することが予想される。

7 今後の開発利用について

旧総社小学校および旧総社幼稚園跡地内には、宝塔山古墳・蛇穴山古墳の周濠が広がっている。したがって土地利用計画を立てる際には、両古墳の現状保存を第一に考慮する必要がある。また古墳以外の部分についても、建物等の建築が計画される場合は、発掘調査等による埋蔵文化財の保存措置が必要と考えられる。

第3章 蛇穴山古墳と宝塔山古墳の調査

第1節 昭和50年度A～Fトレント

Aトレント (Fig. 7、PL. 1)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 昭和50年度 **グリッド** X51～52、Y35～38 **概要** 石室前庭部にほぼ主軸方向に設定された南北10m、幅1.5mのトレント 墳丘部 1層の攪乱層が厚く覆っていた。2a～2f層まで浅間B輕石を含むが大小の円礫が混在することから、後世の攪乱を受けたものと判断できる。1段目に相当する葺石列をトレント西側で2段の石積、東側で3段の石積を検出した。7トレントおよび8トレントの葺石と同様な施工であれば第2段目の葺石の上に前庭部、石室が設置されたものと思われる。

出土遺物 昭和50年度報告書に出土遺物の記載なし。

Bトレント (Fig. 7、PL. 2)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 昭和50年度 **グリッド** X54～55、Y36～38 **概要** 墳丘南辺裾部に斜め方向に設定された8m、幅2mのトレント 墳丘部 1層の攪乱層が厚く覆っていた。2a・2b層には玉石状の小円礫が充填された状況で堆積している。昭和50年度に発行された報告書では上段葺石と下段葺石と上下2段構成をとる見解であった。しかし、下段葺石と思われたもののさらに下部に、大きめの円礫が列状に検出されていることが写真から判断できた。この石列が真正な下段葺石といえると判断した。したがって報告書の下段葺石はその状態から掘り下げ不足であり、葺石ではなく崩落した礫群と判断した。今回、修正した平面図と断面図を掲載しておいた。ここで今までの上段葺石が墳丘第2段葺石、今回図示した下段の葺石が第1段葺石と考えた。しかし、第1段葺石と第2段葺石の間隔が狭いこと、多量の小円礫が存在することは今後、再調査を望むものである。

出土遺物 報告書に出土遺物の記

載なし。

Cトレント (Fig. 8、PL. 2)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 昭和50年度 **グリッド** X51、Y24～27 **概要** 墳丘北辺裾部から中堤にかけて設定された南北13m、幅1.5～2mのトレント 墳丘部 1層の校庭整地層が厚く覆っていた。2a～2f層まで浅間B輕石を含むが大小の円礫が混在することから、後世の掘削を受けたものと判断できる。第1段に相当する葺石列が検出された。基本的には互目を通して積んでいる。石積みは5段程度確認できる。石材は側面長軸を面として積み上げられている。大きさは25cm大の円礫が中心となる。角度は30°とやや緩やかに立ち上がっている。上半部に小円礫が混じるが、その用途について気になるところである。

出土遺物 報告書に出土遺物の記載なし。

Dトレント (Fig. 2、PL. 2)

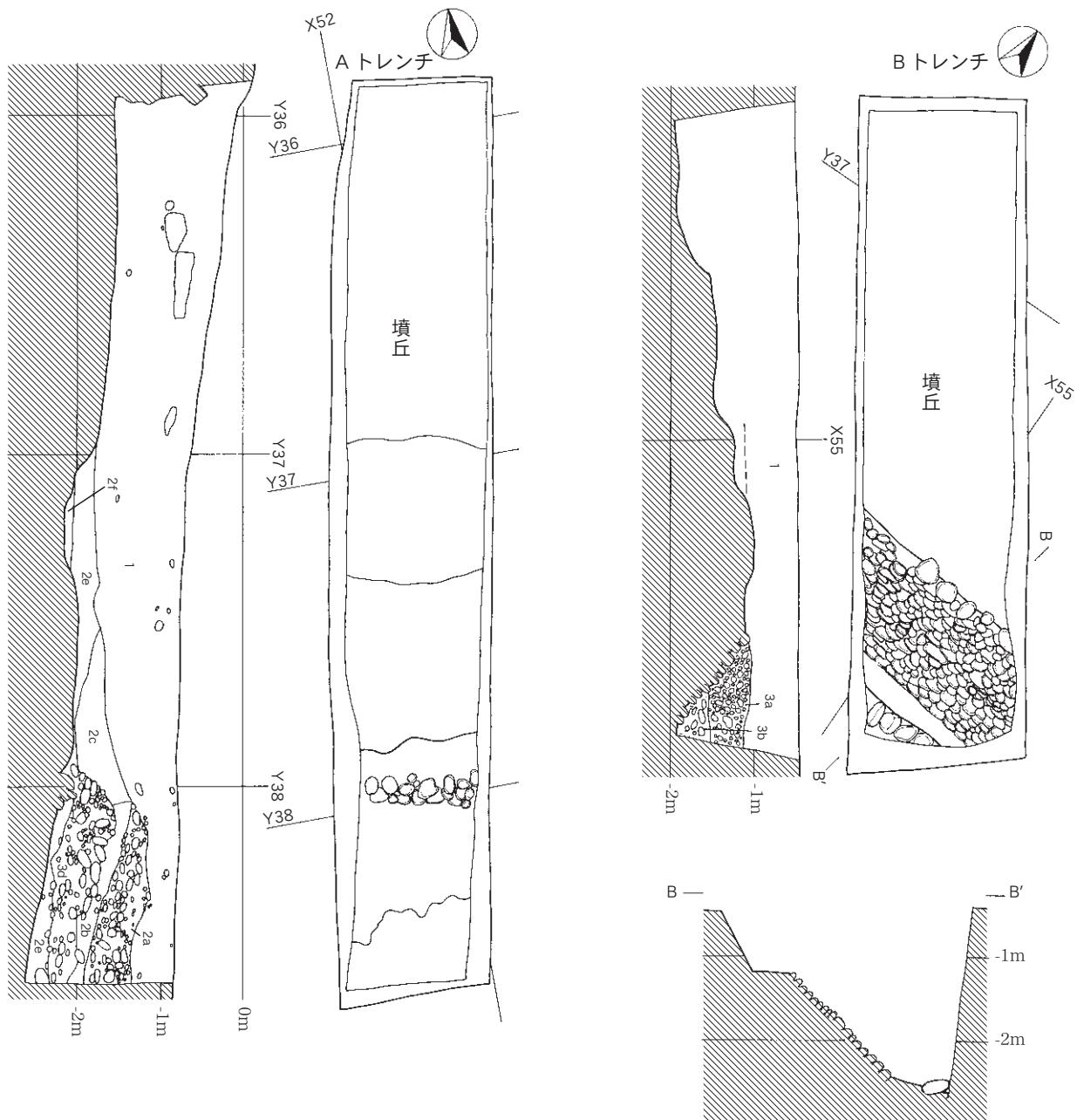
対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 昭和50年度 **グリッド** X51～52、Y35～38 **概要** 周濠内に設定されたトレント。東西2.3m、南北1.3m。周濠 1層は校庭整地の客土。2層は「ノロ土」、砂の互層で形成。また、4、13、20トレントから周濠の深さは1mを超えないものと思われる。2mを超えることは、後世の掘削行為による。昭和50年度の報文にも底面直上から陶器片が出土が記載されている。

出土遺物 底面直上から陶器。

Eトレント (Fig. 8、PL. 2)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 昭和50年度 **グリッド** X51～52、Y35～38 **概要** Cトレントの西側4mに設置された墳丘裾部を解明するためのトレント。東西2.7m、幅2mの範囲から1段目の葺石が検出された。

墳丘部 蔷石列の検出と昭和50年度報告書ではとられているが、まだ若干、精査の必要がある



A トレンチ

- 1 層 墓土層。
- 2 a 層 As-B層と礫層。
- 2 b 層 As-B層は少ない。
- 2 c 層 As-B層は少々。褐色土を含む。
- 2 d 層 As-B層と礫。
- 2 e 層 褐色土でバサバサしている。As-C層を含む黒色土も入る。
- 2 f 層 As-B層が入る。

B トレンチ

- 1 層 表土層。
- 3 a 層 直径3~5cmの玉石層。
- 3 b 層 直径10cm大の玉石層。

0 1 : 80 3m

Fig. 7 蛇穴山A・Bトレンチ (昭50)

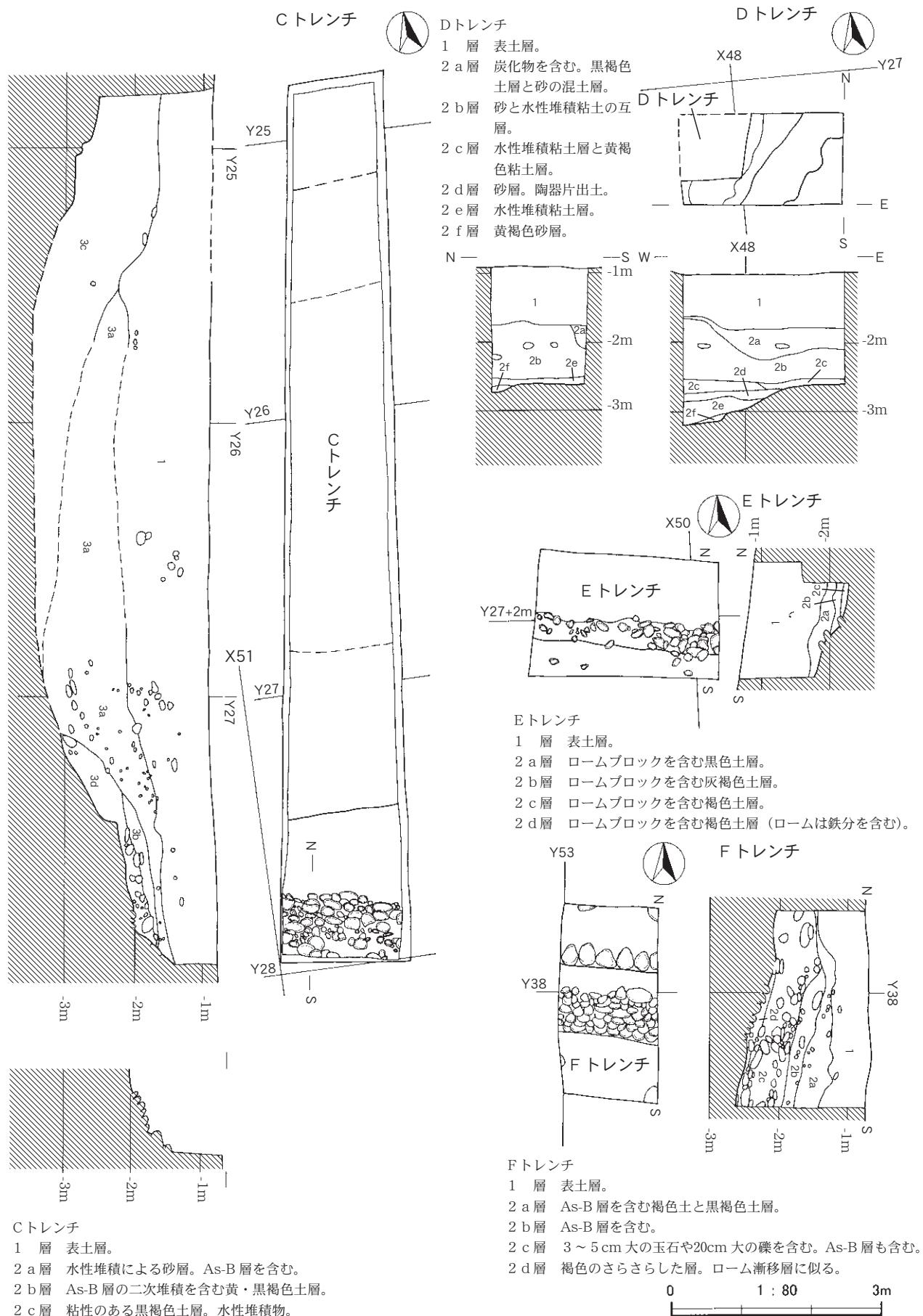


Fig. 8 蛇穴山C ~ F トレンチ (昭50)



- 1トレンチ
 1 層 表土層。
 2 a層～2 g層 後世の溝。時期不詳。
 3 a層 As-B層。軽石層。
 3 b層 黒色粗砂層。As-C 軽石粒30%含む。地山黄褐色土粒が少量混在。
 3 c層 黒褐色粗砂層。As-C 軽石粒20%含む。
 3 d層 暗褐色粗砂層。As-C 軽石粒10%含む。
 3 e層 暗褐色粗砂層。As-C 軽石粒5 %含む。
 3 f層 黒褐色粗砂層。総社砂層の黄褐色土粒と黒色土、暗褐色土を含む。
- 2トレンチ
 1 層 表土層。
 2 a層～2 g層 後世の溝。時期不詳。
 3 a層 As-B層。軽石層。
 3 b層 黒色粗砂層。As-C 軽石粒30%含む。地山黄褐色土粒が少量混在。

0 1 : 80 3m

Fig. 9 蛇穴山1・2トレンチ (平19)

あるものと思われる。しかし、これらの扁平な20cm大の円礫の存在から第1段目の葺石列をこの近辺に想定できる。 出土遺物 報告書に出土遺物の記載なし。

Fトレンチ (Fig. 8、PL. 2)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 昭和50年度 **グリッド** X51~52、Y35~38 **概要** 石室前面のAトレンチとBトレンチに挟まれた南北2.8m、幅1.6mのトレンチである。 **墳丘部** 第1段目の葺石に相当する。天井部には大型の円礫が並べられる。それに近接し、周囲には扁平な円礫がやや水平気味におかれため、敷石の感があるが詳細は不明である。 **出土遺物** 報告書に出土遺物の記載なし。

第2節 平成19年度1~19トレンチ

1トレンチ (Fig. 9、PL. 3)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X54、Y22~26 **概要** 墳丘から北10mに設定したトレンチ。南北14m、幅は南側で2m、北側では1m幅となる。 **周濠** 近代に堆積したと思われる層で埋没し、すでに中堤の立ち上がりは掘削を受けており確認できなかった。 **中堤** 周濠が削平を受けていたため幅2m程度、現存していなかった。 **中堤内側葺石** 破壊を受け存在していない。 **中堤外側葺石** 10~30cm大の円礫を使用し、互目積による5~6段の葺石。 **外周溝** 上幅で3.05m、下幅で1.5mを測る。深さは0.6mである。 **出土遺物** 特になし。

2トレンチ (Fig. 9、PL. 3)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X50~51、Y21~25 **概要** 1トレンチの西に設定された外縁部の調査トレンチ。南北13m、幅1.5mで途中から1m幅となる。 **周濠** すでに破壊をうけており確認できなかった。 **中堤** 南半部は掘削を受けており、北半が4mほど現存していた。北側での中堤は約6mと推定される。 **中堤葺**

石 内面は破壊をうけていたため存在しない。外面は北西コーナーに向かって旧地形が高いいため大きく削りとられ、存在していないものと思われる。 **外周溝** 上幅3m、下幅1.5m、深さ0.5mである。 **出土遺物** なし。

3トレンチ (Fig. 6、PL. 3)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X46~47、Y23~24 **概要** 中堤内側のコーナー部を検出するために設定した調査区。東西6m、南北2.5mを調査。ほぼ中央から北西コーナーの葺石列を検出した。調査は途中で終えて本調査に継続することとし、平成21年度調査20トレンチに継承した。 **出土遺物** なし。 **備考** 3トレンチは20トレンチへ継承調査。

4トレンチ (Fig. 10、PL. 3)

対象遺跡 蛇穴山古墳・宝塔山古墳 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X35~48、Y23~26 **概要** 東西51.5m、幅1.5mのトレンチ **蛇穴山古墳中堤** 2~5トレンチが存在する中堤北西部は区画溝の検出ができなかった。おそらく北西から南東にかけて緩やかな傾斜を有するため、旧元総社小学校の校庭造成のため削平されたことが想定される。 **宝塔山古墳周濠** 東辺の中央よりやや北寄りの立ち上がりを確認した。確認面はⅢ層面である総社砂層であり、最大の深さは0.78mを測る。 **出土遺物** なし。

5トレンチ (Fig. 6)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X47~48、Y21~23 **概要** 北西部の中堤と外周溝を確認するために、幅1m、長さ8.5mのトレンチ **中堤** 外周溝から3.5mの部分を検出。 **中堤外側葺石** 検出できなかった。 **外周溝** 残りが悪くほとんど検出できなかった。中堤から長さ1.5mの範囲に外周溝の底面の痕跡が検出された。 **出土遺物** なし。

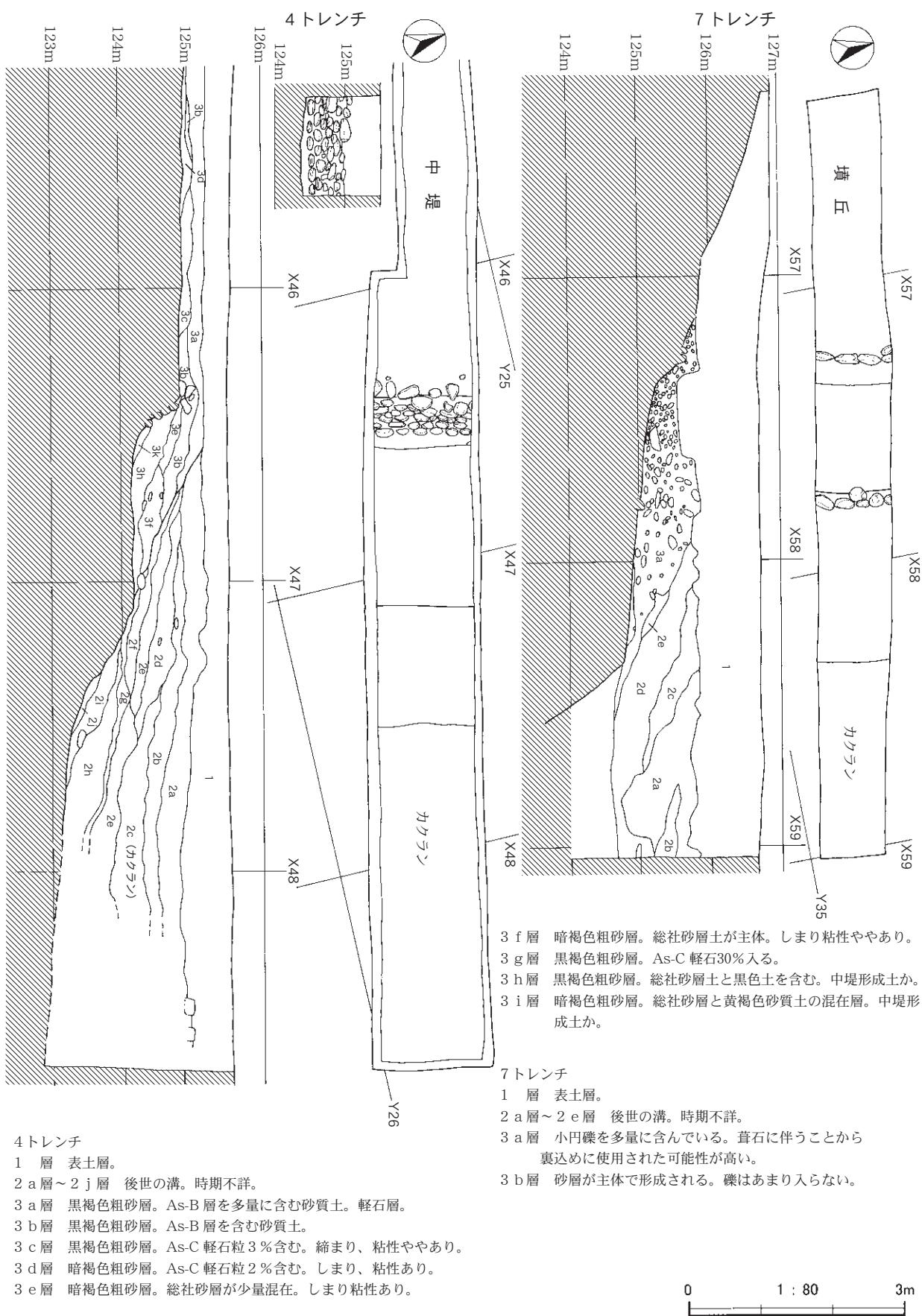


Fig. 10 蛇穴山 4・7 トレンチ (平19)

8トレンチ

【墳丘斜面】

1 層 表土層。

2 a層～2 e層 後世の溝。時期不詳。

3 a層 小円礫を多量に含む。葺石に伴うことから

葺石構築の際に裏込めに使用された可能性が高い。

【墳丘盛土】

1 層 表土層。

4 a層～4 h層。8層に分層される。1層の厚さは10cm程度。

As-C 混土層、粘土混合層が交互に堆積。版築状。

5 a層～5 i層。【石室構築基盤層か】

9層に分層される。1層の厚さは5cm程度。

As-C 混土層、褐色土混土層が 交互に堆積。版築。

6 a層～6 f層。6層に分層される。1層の厚さは15cmと厚い。

As-C 混土層、総社砂層混土層が交互に堆積。版築状。

【地山層】

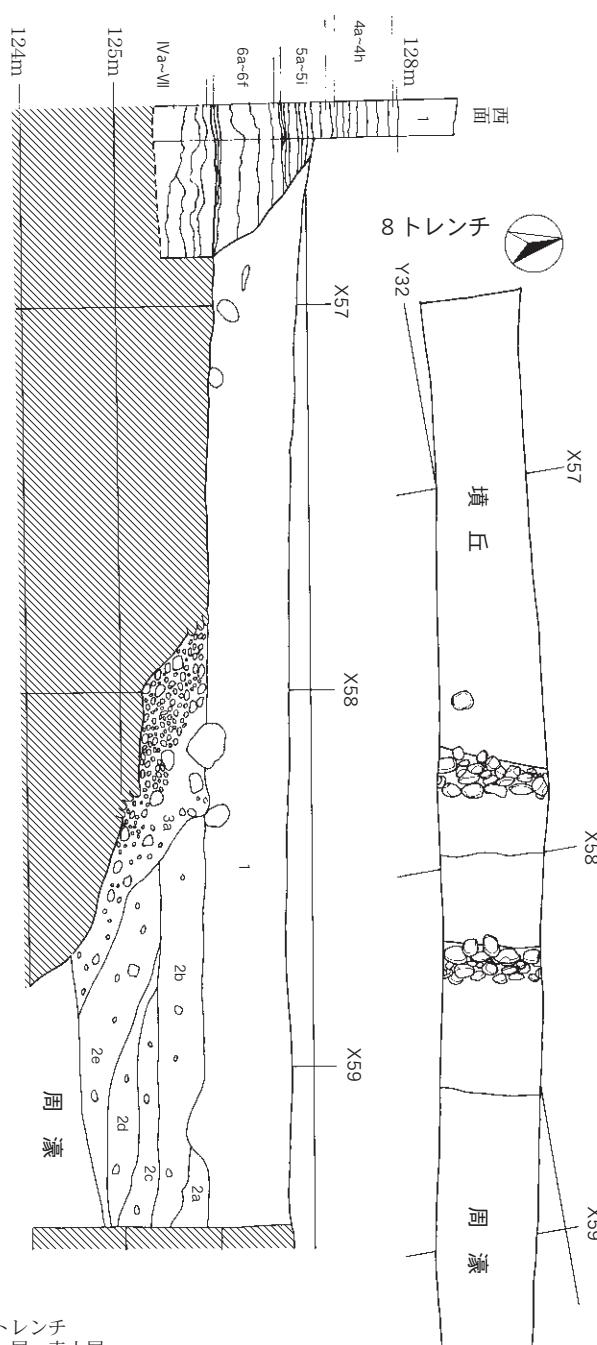
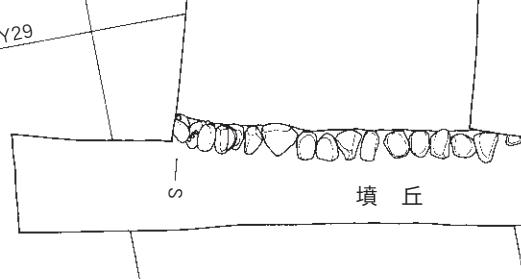
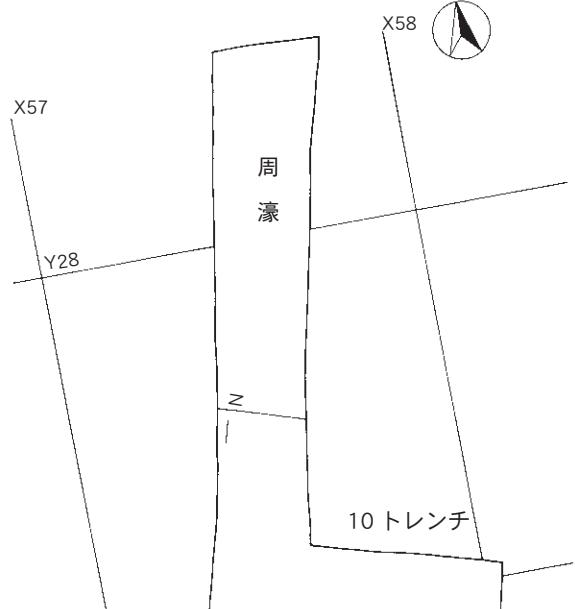
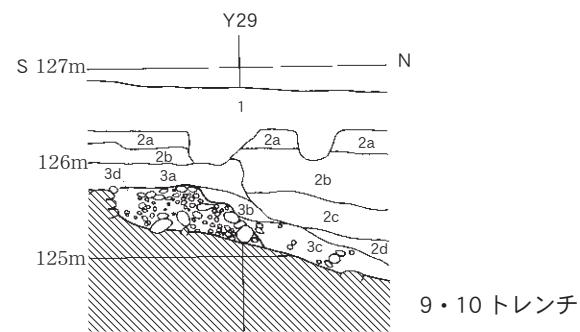
IV a層 Hr-FA 層を含む

IV b層 Hr-FA 層をやや含む。

V 層 As-C 混土層。

VI 層 総社砂層への漸移層。褐色細砂層。

VII 層 総社砂層。黄褐色微砂層。



9トレンチ

1 層 表土層。

2 a層～2 d層 後世の溝。時期不詳。

3 a層 黒色粗砂層。やや砂質の層。

3 b層 黒色粗砂層。やや砂質。地山黃褐色土粒が少量混在。

3 c層 黑褐色粗砂層。やや礫が多く含まれる。

3 d層 暗褐色粗砂層。小円礫を多量に含む。葺石に伴うことから裏込めに使われた可能性が高い。

X59

9トレンチ

Y30

0 1 : 80 3m

Fig. 11 蛇穴山 8～10トレンチ (平19)

6トレンチ (Fig. 6、PL. 3)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X46・47、Y22・23 **概要** 中堤上に東西3m、幅1mで設定されたトレンチ。 **中堤** 中堤のほぼ中央であったため、地山面を検出した。 **出土遺物** なし。

7トレンチ (Fig. 10、PL. 4)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X56~58、Y34 **概要** 旧元総社小学校のプールがあった場所であるため、遺構の残存する可能性は低いと思われたが、思っていたより遺構が残されていた。 **墳丘** 墳丘からは葺石の基部が検出された。 葦石は上下2段あり、根石の距離は2m離れ、0.6mの高低差がある。

なお、上段葺石と下段葺石の間に小円礫の層が存在する。3a層であるが、裏込めとして用いたと考えられる。 **下段葺石** 基部のみ検出。扁平な20~30cm大の円礫を横方向に使用。やや間隔をあけて設置されている。1個のみ2段目が出土しているが、これをみると互目積みを意識している。 **上段葺石** 基部のみ検出。下段と同様な円礫を使用。 **出土遺物** なし。

8トレンチ (Fig. 11、PL. 5)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X56~58、Y31・32 **概要** 旧元総社小学校のプールがあった場所であるため、遺構の残存する可能性は低いと思われたが、思っていたより墳丘は残されていた。 **墳丘** 墳丘からは葺石の基部が検出された。 葦石は上下2段あり、根石の距離は1.9m離れ、0.7mの高低差がある。なお、上段葺石と下段葺石の間に小円礫の層が存在する。3a層であるが、裏込めとして用いられたと考えられる。 **下段葺石** 4~5段検出。扁平な20~40cm大の円礫を横方向に使用。やや間隔をあけて、互目積で設置されている。 **上段葺石** 4~5段検出。下段と同様な円礫を使用し、横方向に積む。基本的には互目積。 **出土遺物** なし。

9・10トレンチ (Fig. 11、PL. 5)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X56~59、Y27~29 **概要** 墳丘北東コーナー部に入れたトレンチ。 9トレンチを長さ11m、幅1mで設置し、掘削を行ったところ根石列がトレンチ方向に検出された。直交する方向で10トレンチを南北7.5m入れた。根石部分を2×2mほど拡張した。 **墳丘** 墳丘からは葺石の基部が検出された。葺石は7・8トレンチの下段葺石に相当するものと思われる。 **下段葺石** 長径30cm大の扁平な円礫を小口方向に用いている。西の部分で3段葺石が残るが、互目積となる。なお3a層は小円礫と砂利を交える層である。 **出土遺物** なし。

11トレンチ (=21トレンチ) (Fig. 10・15、PL. 5・9)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 11トレンチ…平成19年度・21トレンチ…平成21年度 **グリッド** X41~44、Y35・36 **概要** 墳丘の南西部から周濠、中堤、外周溝にかけて設置したトレンチ。平成19年度に11トレンチとして調査した範囲を平成21年度に21トレンチとして再調査を行った。東西30m、幅1~1.3m。 **墳丘** 墳丘裾と思われる部分から30cmを超える扁平な円礫や小円礫、砂利が堆積する。 **周濠** 上幅11.4mである。ただし、そのほとんどは後世の掘削を受けている。今回この掘削について調査を行っていない。なお、中堤の葺石基底石から0.8mまで底面は残存していたが、その東は削平を受けていた。それから深さを考えると1.2m前後と思われる。 **中堤** 上幅5m、下幅6.5m、高さは内側で1.2m、外側で0.5mであった。上面には盛り土が検出されず、地山が残されていた。 **中堤内側葺石** 葦石は20~30cm大の円礫を10~11段ほど互目積している。 **中堤外側葺石** 葦石で構成される。20~30cm大の円礫を用いるが、石の用い方は不揃いである。3~5段が残される。 **外周溝** 上幅3.2m、下幅2.3m、深さ0.5mである。 **出土遺物** なし。



Fig. 12 蛇穴山11レンチ (平19)

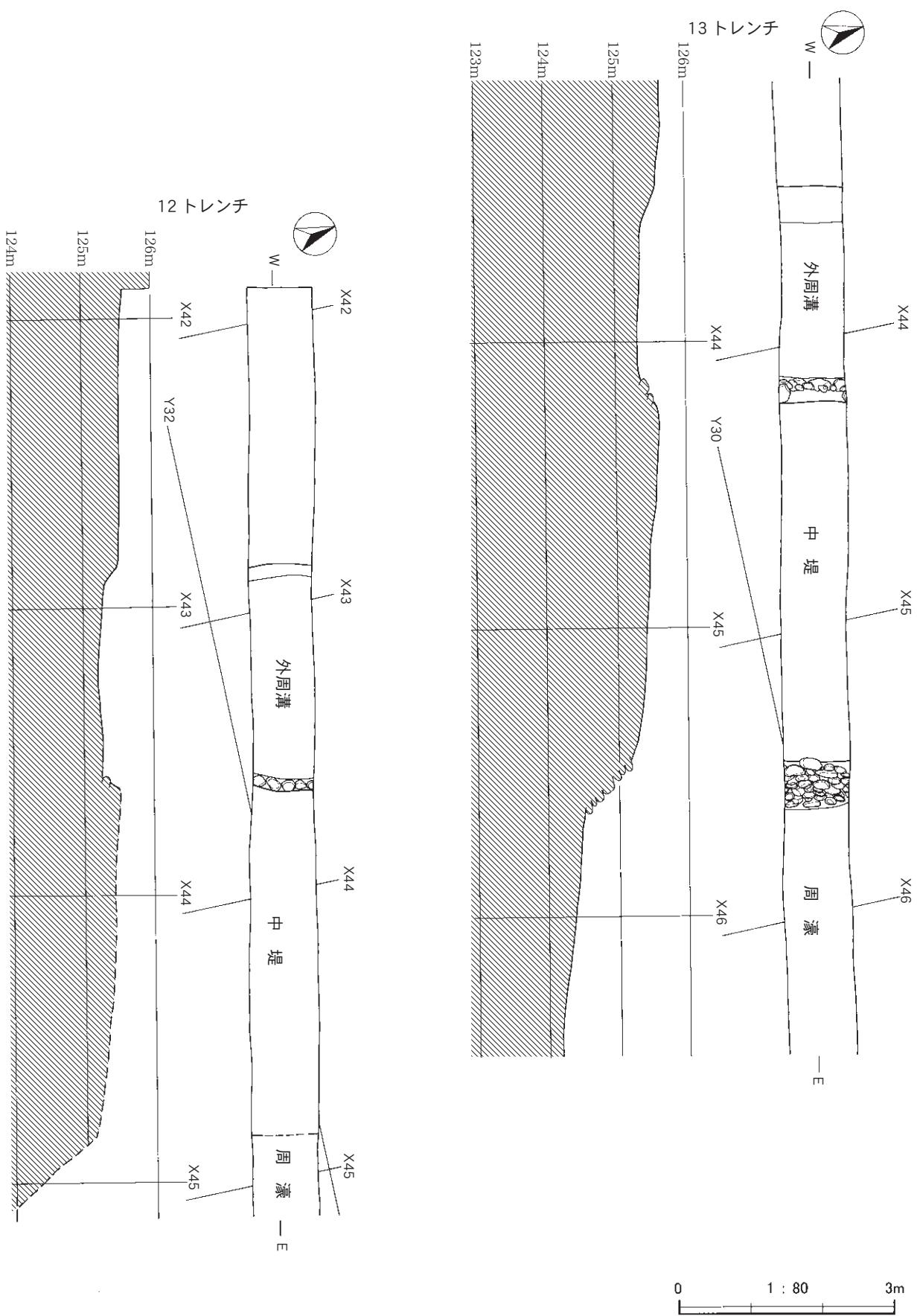


Fig. 13 蛇穴山12・13トレンチ (平19)

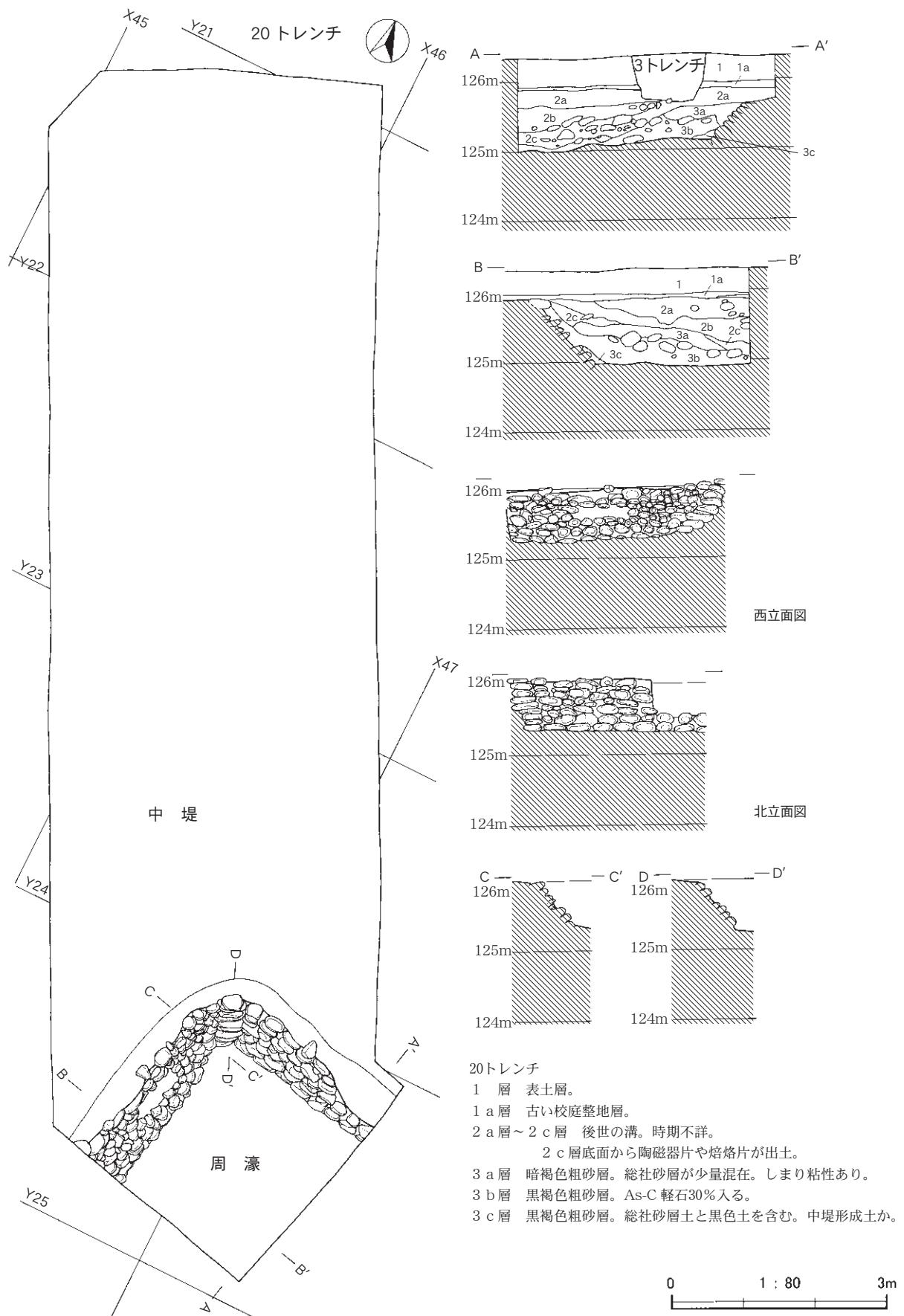


Fig. 14 蛇穴山20トレンチ (平21)

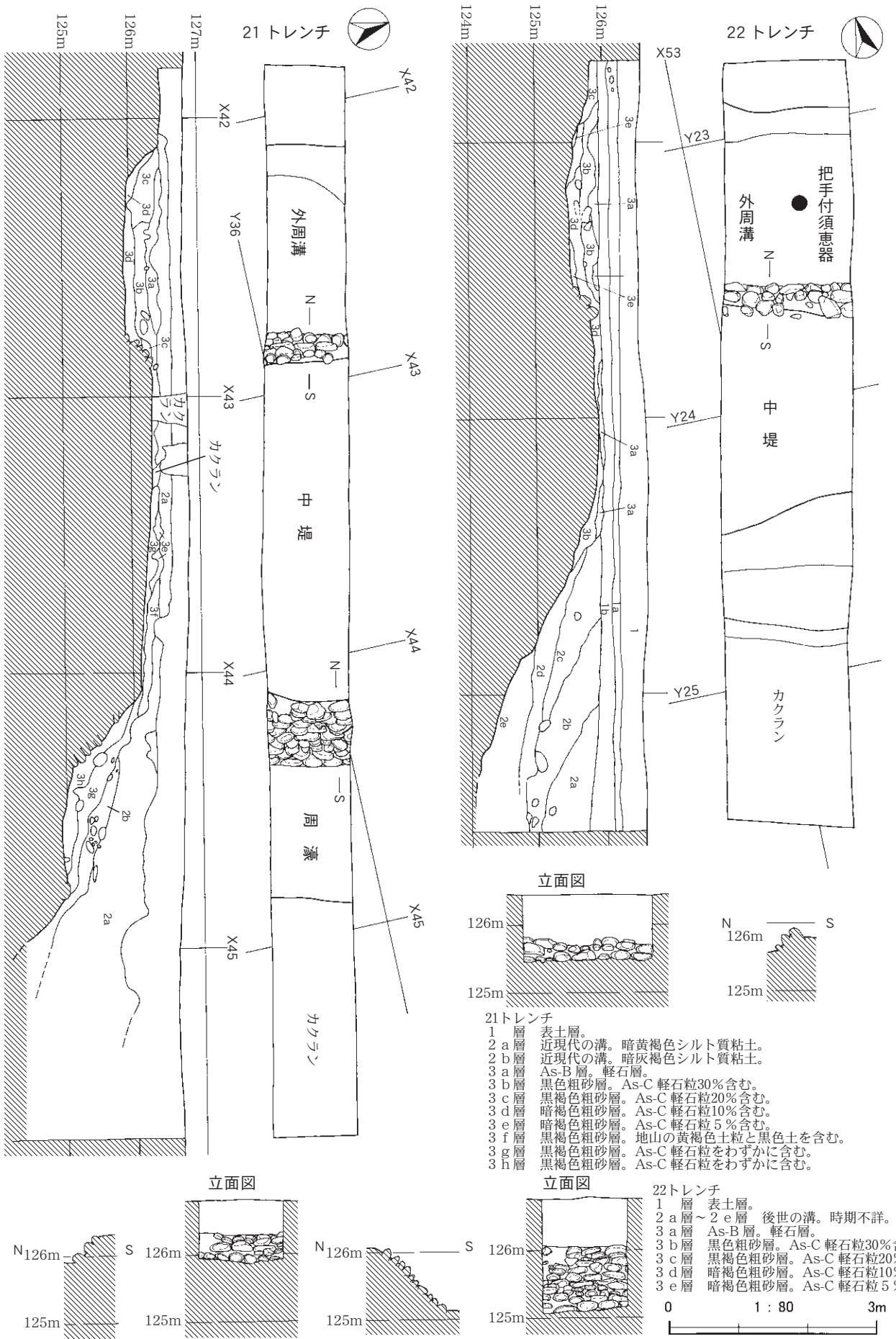


Fig. 15 蛇穴山21・22レンチ (平21)

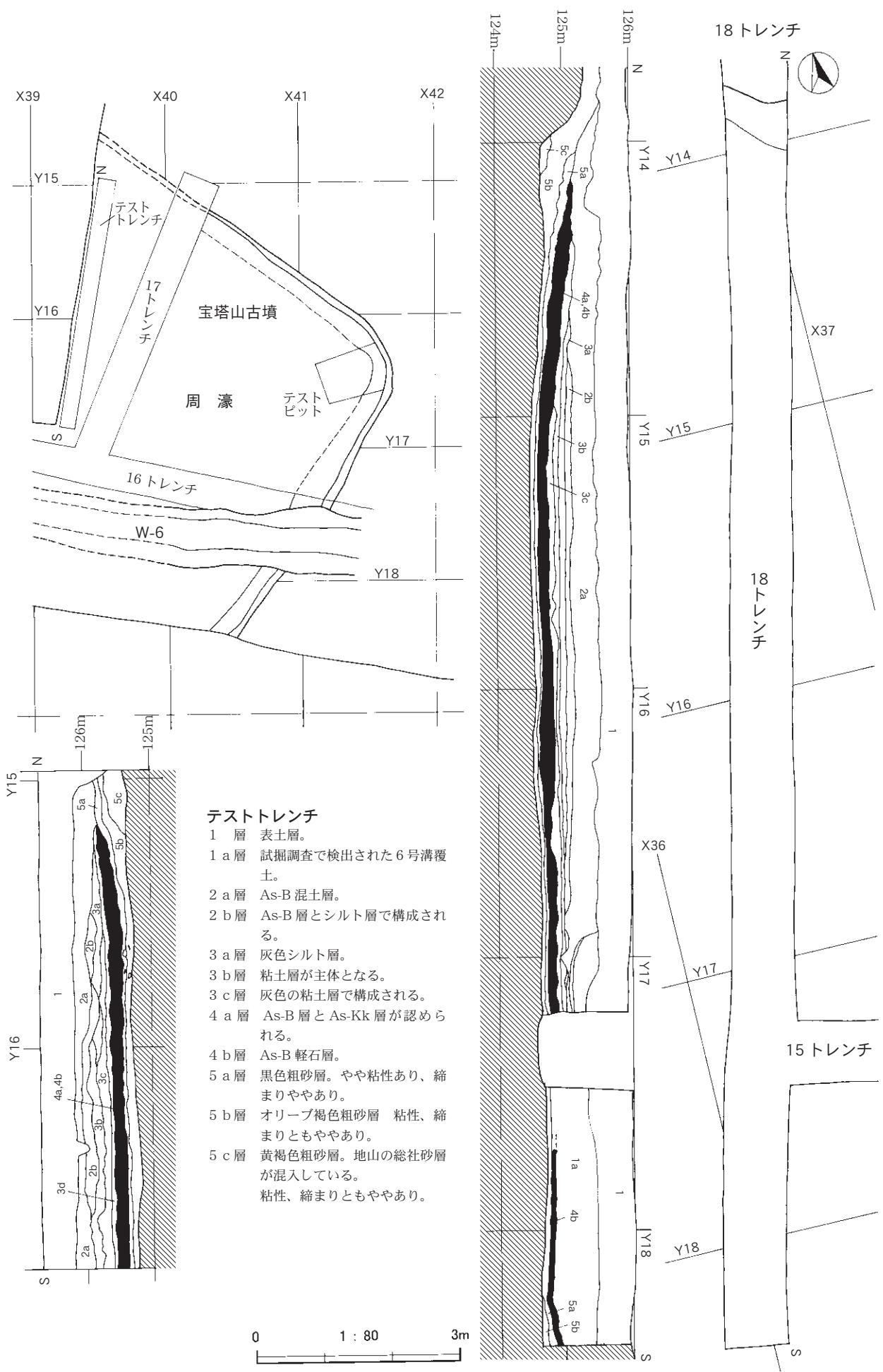


Fig. 16 宝塔山古墳18トレンチ (平19)

12トレンチ (Fig. 13、PL. 6)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X41~44、Y35・36 **概要** 西側ほぼ中央の周濠、中堤、外周溝にかけて設置したトレンチ。周濠ほとんどが削平を受け、周濠の調査は断念した。中堤ほとんど残っていなかった。中堤外側葺石 蓐石の基部のみ1段残っていた。20cm大の円礫で構成される。外周溝 上幅3.3m、下幅2.9m、高さは0.3mであった。出土遺物なし。

13トレンチ (Fig. 13、PL. 6・7)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X41~44、Y35・36 **概要** 西側のほぼ中央部の周濠、中堤、外周溝にかけて設置したトレンチ。周濠 深さは1.1m前後である、墳丘裾部は後世の掘削を受けていた。中堤 上幅5m、下幅6.2m、高さは1.1mである。上面には盛り土は検出されず、Ⅲ層の総社砂層である。中堤内側葺石 10~30cm大の円礫が互目積に積まれた葺石。8段残っていた。中堤外側葺石 15~30cm大の円礫による葺石。2~4段が残される。外周溝 上幅3.1m、下幅2.2m、深さ0.25m 出土遺物 なし。

14トレンチ (Fig. 6、PL. 7)

対象遺跡 蛇穴山古墳、宝塔山古墳 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X34~45、Y19~22 **概要** 幅1m、全長42.7mの東西に長いトレンチ。西端から宝塔山古墳の周濠、東端から蛇穴山古墳の外周溝の検出を想定して設定。蛇穴山古墳周濠 蛇穴山古墳の北西部は本来地形が高いところあったため、校庭の造成によって早い段階で外周溝は削られてしまったものと考えられる。宝塔山古墳周濠 周濠を21.5mにわたって検出。ただし、X34~35グリッドでは攪乱が一部入る。周濠内には浅間B軽石層が厚さ10cmで堆積。確認面はⅢ層の総社砂層面である。確認面Ⅲ層からの周濠の深さは最大で59cmである。出土遺物 なし。

15トレンチ (Fig. 6)

対象遺跡 宝塔山古墳 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X35~48、Y17~19 **概要** 幅1mで東西方向に49mと長いトレンチ。宝塔山古墳周濠 西端から約20mの長さで周濠を検出。確認面はⅢ層の総社砂層。深さは確認面から50cm前後。浅間B軽石層が底面近くの4a・4b層として厚さ20cmで堆積。平成21年度調査のFig. 17のセクション図は宝塔山古墳墳丘と平行したセクション図のため土層観察に適していない位置であるが、X35から36グリッドは底面の高さが上昇していることから墳丘立ち上がり部となる可能性がある。さらに18トレンチのセクション図でも底面上昇はみられないものの、浅間B軽石層が上昇することが観察できる。墳丘立ち上がり部が近接する証である。出土遺物 なし。

16トレンチ (Fig. 6、PL. 7)

対象遺跡 総社町屋敷南遺跡 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X41~53、Y14~17 **概要** 幅1m、長さ49mの東西に長いトレンチ。平蛇穴山古墳、宝塔山古墳の周濠はここまでのがっていないことが判明。古墳時代の住居跡2軒検出。出土遺物 なし。

17トレンチ (Fig. 6、PL. 7)

対象遺跡 宝塔山古墳 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X39~40、Y15~17 **概要** 東西方向に設定した15トレンチから北へ10m、幅1mで延びるトレンチ。宝塔山古墳周濠 周濠は7.7mにわたって検出され、深さ50cm前後である。出土遺物 なし。

18トレンチ (Fig. 6、PL. 7)

対象遺跡 宝塔山古墳 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X35~37、Y13~18 **概要** 宝塔山古墳の北東部の周濠解明のためのトレンチ。15トレンチから直交して南北方向に20.5m延びる。宝塔山古墳周濠 宝塔山古墳の周濠は7.7mにわたり検出。確認面からの深さは67cmと深い。出土遺物 なし。



宝塔山古墳23区

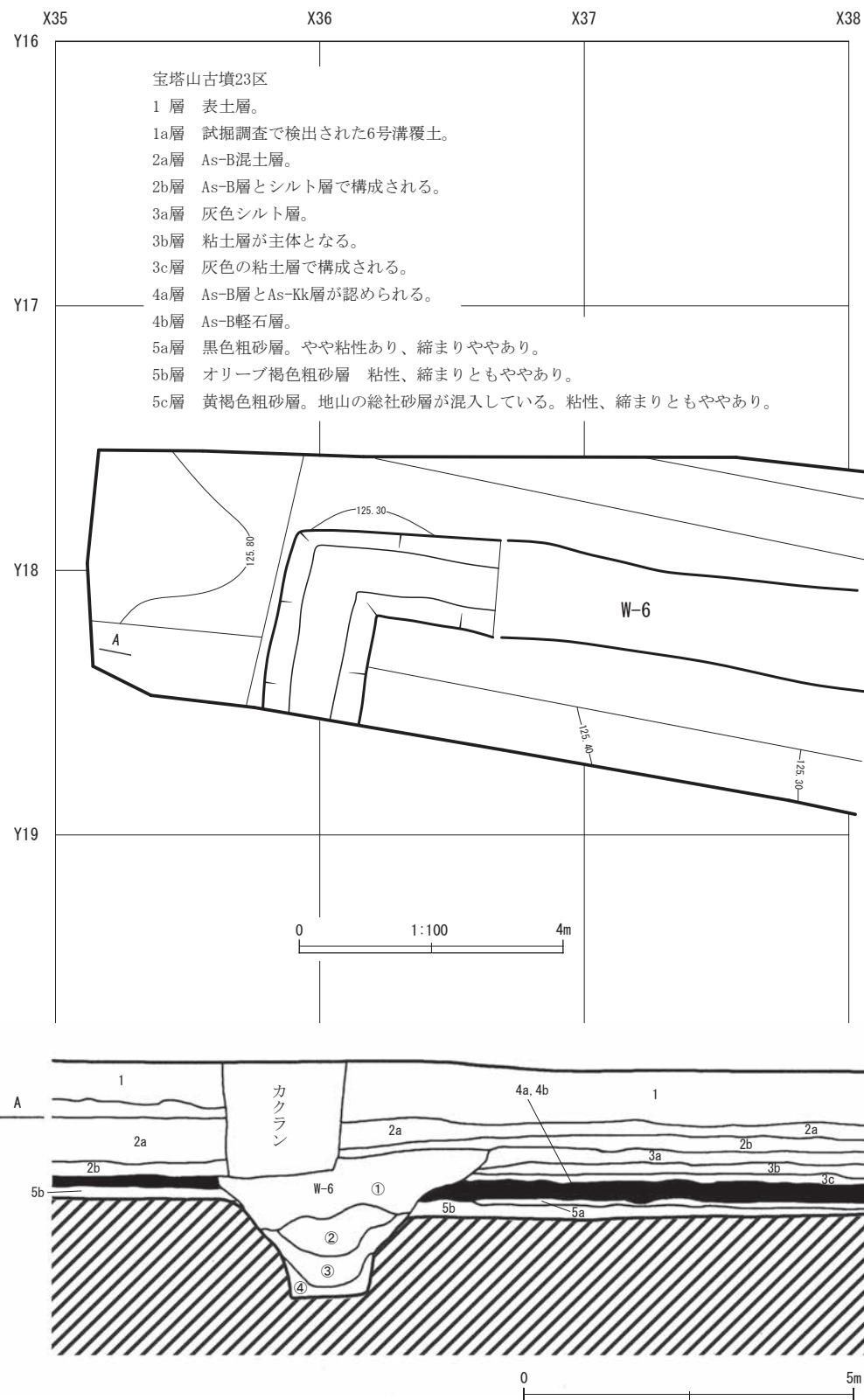
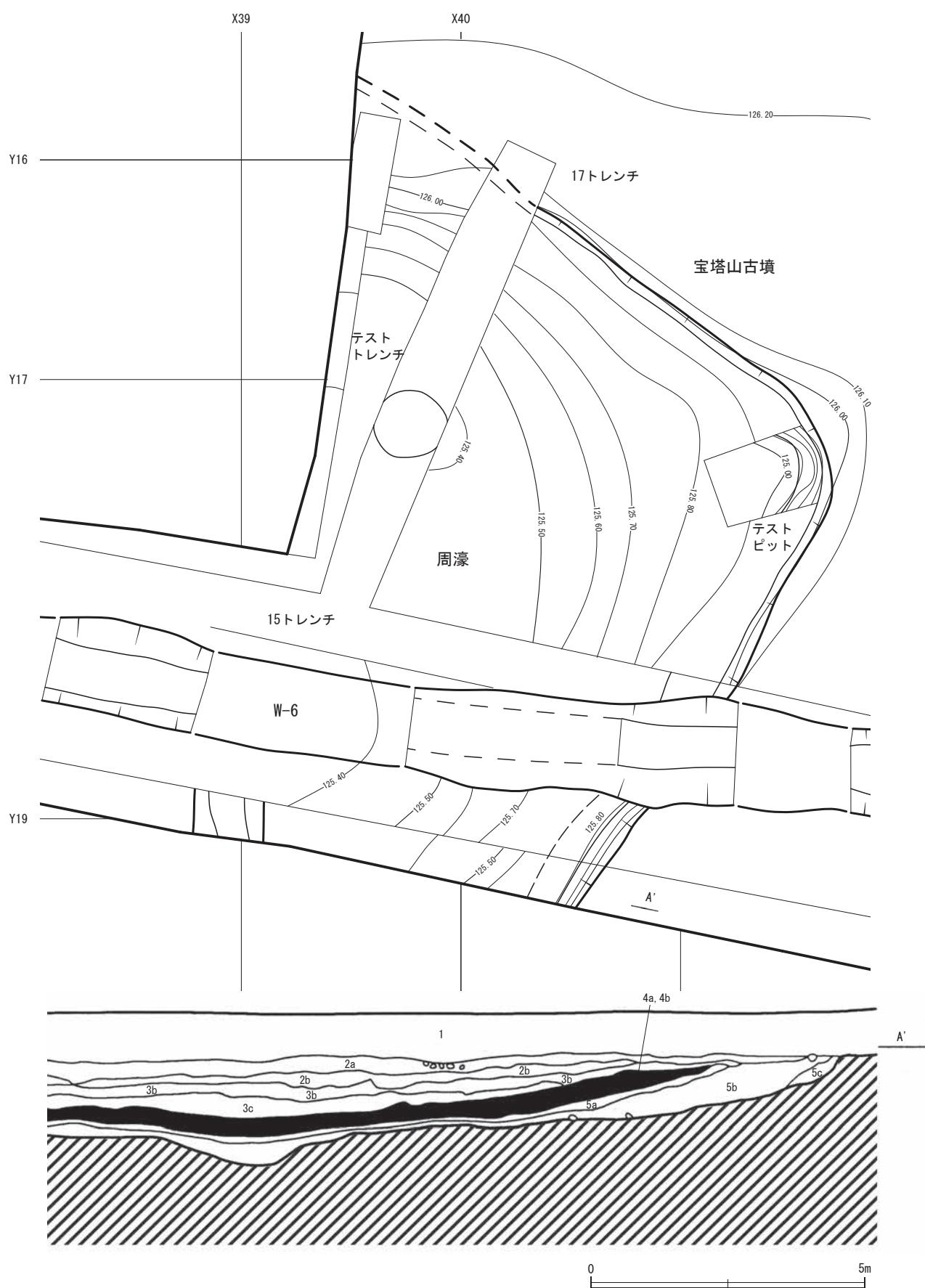


Fig. 17 宝塔山古墳23区 (平21)



19トレンチ (Fig. 6)

対象遺跡 総社町屋敷南遺跡 **調査年度** 平成19年度 **グリッド** X50・51、Y13～18 **概要** 16トレンチと直交して設置した幅1m、長さ18.5mのトレンチ。H-1号住居跡の竈を検出。**出土遺物** なし。

第3節 平成21年度20～22トレンチ

20トレンチ（3トレンチ）(Fig. 14、PL. 8)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 20トレンチ…平成21年度（3トレンチ…平成19年度）
グリッド X44～47、Y21～24 **概要** 中堤の北西コーナーに設置したトレンチ。3トレンチとして調査した範囲を拡大して20トレンチとして改称し、調査を行った。東西17m、南北4.5m。**中堤** Ⅲ層の総社砂層で検出。上面は校庭造成によって削平をうけたためⅢ層の総社砂層面である。中堤内面の高さは0.6～0.7mである。**中堤内側葺石** コーナーの角度は90度で屈折する。葺石は7～9段が残される。角度は50度から55度を測る。**周濠** ほぼ平坦な底面で構成。**出土遺物** なし。

21トレンチ（11トレンチ）(Fig. 15、PL. 9)

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 21トレンチ…平成21年度（11トレンチ…平成19年度）
グリッド X40～47、Y35・36 **概要** 墳丘の南西部から周濠、中堤、外周溝にかけて設置したトレンチ。平成19年度に11トレンチとして調査した範囲を平成21年度に21トレンチとして再調査を行った。その際には南側を若干広げた。東西30m、幅1～1.3m。**墳丘** 東端の墳丘部には30cm大の扁平円礫やその他小円礫、砂利が堆積する。葺石を構成したものであるが小円礫や砂利の用途が不明。**周濠** 幅は、10m前後であるが中堤底面から2mの部分までは残存していたが、その東

は削平を受けていた。**中堤** 上幅5m、下幅6.5m、高さは内側で1.2m、外側で0.5mであった。確認面はⅢ層総社砂層であった。**中堤内面葺石** 20～30cm大の円礫で構成される。10～11段で傾斜角度は45度前後である。**中堤外周溝** 上幅3.2m、下幅2.3m、深さ0.5mである。**出土遺物** なし。

22トレンチ（Fig. 15、PL. 9）

対象遺跡 蛇穴山古墳 **調査年度** 平成21年度 **グリッド** X52・53、Y22～25 **概要** 1トレンチの西側約4mに設定されたトレンチ。濠、中堤、外周溝にかけて設置したトレンチ。南北4.3m、幅1.8m。**周濠** 後世の掘削によって残存していなかった。**中堤** 本来5.0m近くある中堤も1.5mほどしか残っていなかった。**中堤内面葺石** 後世の破壊。**中堤外周溝** 3～4段確認できた。10～30cm大の円礫使用。**外周溝** 上幅3.0m、下幅2.2m、深さ0.45mであった。**出土遺物** なし。

宝塔山古墳23区 (Fig. 15、PL. 9)

対象遺跡 宝塔山古墳 **調査年度** 平成21年度 **グリッド** X35～41・Y15～19 **概要** 総社町屋敷南遺跡調査区の西側に位置する。平成19年度調査の15、17、18トレンチを統合する形でコーナー部分を解明するために設定された調査区。コーナー部分には1×2mのテストピットが入れられ、底面まで検出した。**重複関係** W-6によって切られている。**周濠** 周濠の平均的な深さは0.8m程度であるが、テストピット部分は1.0mと若干深くなっている。覆土には床面から0.2mほど上部に4a層(As-B層・As-Kk層の火山灰)と4b層(As-B層軽石)が厚さ0.2m程度の厚さで堆積していた。**出土遺物** なし。

第4章 総社町屋敷南遺跡の調査

第1節 遺構

住居跡

H-1号住居跡 (Fig. 19, PL. 10)

位置 X49・50、Y19・20にあり、北方にH-3号住居跡、南東方向にH-3号住居跡が隣接する。 **主軸方向** N-58°-E **規模・形状** 長軸長2.92m、短軸長2.78mの方形を呈し、現壁高は15~25cm。 **床面** ほぼ平坦で、目だった堅緻面は確認できなかった。 **周溝** 東壁中央部から南東隅まで連続し、幅14~25cm、深さ2~6cm。 **柱穴** 検出されなかった。 **竈** 南東コーナーに構築され、主軸N-125°-Eを呈する。灰白色粘土を構築材とし、袖先端部の右袖に川原石、左袖に切り出した粘土を設けている。この左袖の粘土は被熱により硬化している。焚き口は袖石より20cm前後住居跡内に入り込む。全長84cm、焚口幅24cmを測り、煙道部は燃焼部から舌状に短く15cm程突出する。 **貯蔵穴** 竈右袖脇、南壁下の中央付近に検出された。東西に長い不正形を呈し、長軸長55cm、短軸長40cm、深さ18cm。 **出土遺物** 貯蔵穴の東上面と東壁中央の周溝等に出土し、土師器甕(3)と土師器壺(1・2)の3点を図示。 **時期** 出土した土器から、6世紀第3四半期。 **備考** 覆土上面は炭化材を含む新しい掘り込みが部分的には床面まで達している。

H-2号住居跡 (Fig. 33・34, PL. 10)

位置 X46・47、Y15~17にあり、東方にH-3号住居跡、南東方向にH-1号住居跡が隣接する。 **主軸方向** N-63°-E **規模・形状** 長軸長6.2m、短軸長6.1mのほぼ正方形を呈し、現壁高さ4~26cm。 **重複** 本遺構の中央やや東に南北に走行するW-1号

溝、この溝から直角に西方に向けてW-4・5号溝が走行し、何れも床面を掘り込んでいる。 **床面** 残存する部分はほぼ平坦であるが、目立った堅緻面は検出されなかった。 **周溝** 東辺の東竈以北を除いてほぼ連続する。幅15~25cm、深さ2~8cm。 **柱穴** 主柱穴の4本が検出され、P₁は隅丸方形を呈し、W-4号溝に上部を破壊されている。規模は45×36cm、深さ41cm。P₂は85×65cmの楕円形、深さ60cm。P₃は貯蔵穴に隣接する。やや歪んだ53×48cmの楕円形、深さ60cm。P₄はW-1号溝の底面から検出され、80×35cmの楕円形、深さ41cm。柱間はP₁-P₂=3.9m、P₂-P₃=3.7m、P₃-P₄=3.8m、P₄-P₁=3.8mであり、各々の柱間は3.8m前後。主柱穴の他に大小の柱穴状掘り込みが検出されたが、大半が本遺構より新しい。 **竈** 東壁(東竈)と北壁(北竈)の2カ所に構築され、東竈を廃棄した後に北竈が構築されたことが貯蔵穴の土層堆積から判明。 **東竈** 東壁の中央やや南寄りに白色粘土(竈に使用されたと考えられる白色粘土が貯蔵穴に混入)により構築されたと考えられるが、袖部は破壊され残存しない。燃焼部から煙道は細長く東壁より75cm程突出する。主軸はN-63°-Eを呈し、全長(100)cm、焚口幅(40)cm前後を測る。 **北竈** 北壁の西寄りに構築され、燃焼部中央に土製の支脚が配されている。煙道部は燃焼部より狭まって北方に突出するが全容は検出できなかった。灰白色粘土で構築された右袖部が残り、先端部の配された袖石?が抜かれた痕跡がある。左袖部は不明。主軸はN-22°-Wを呈し、全長(1.10)m以上、焚口幅(65)cmを測る。 **貯蔵穴** 南東隅に検出され、南北方向に長い楕円形を呈する。長軸長105cm、短軸長85cm、深さ50cmで、上面に床面があることから、北竈の構築

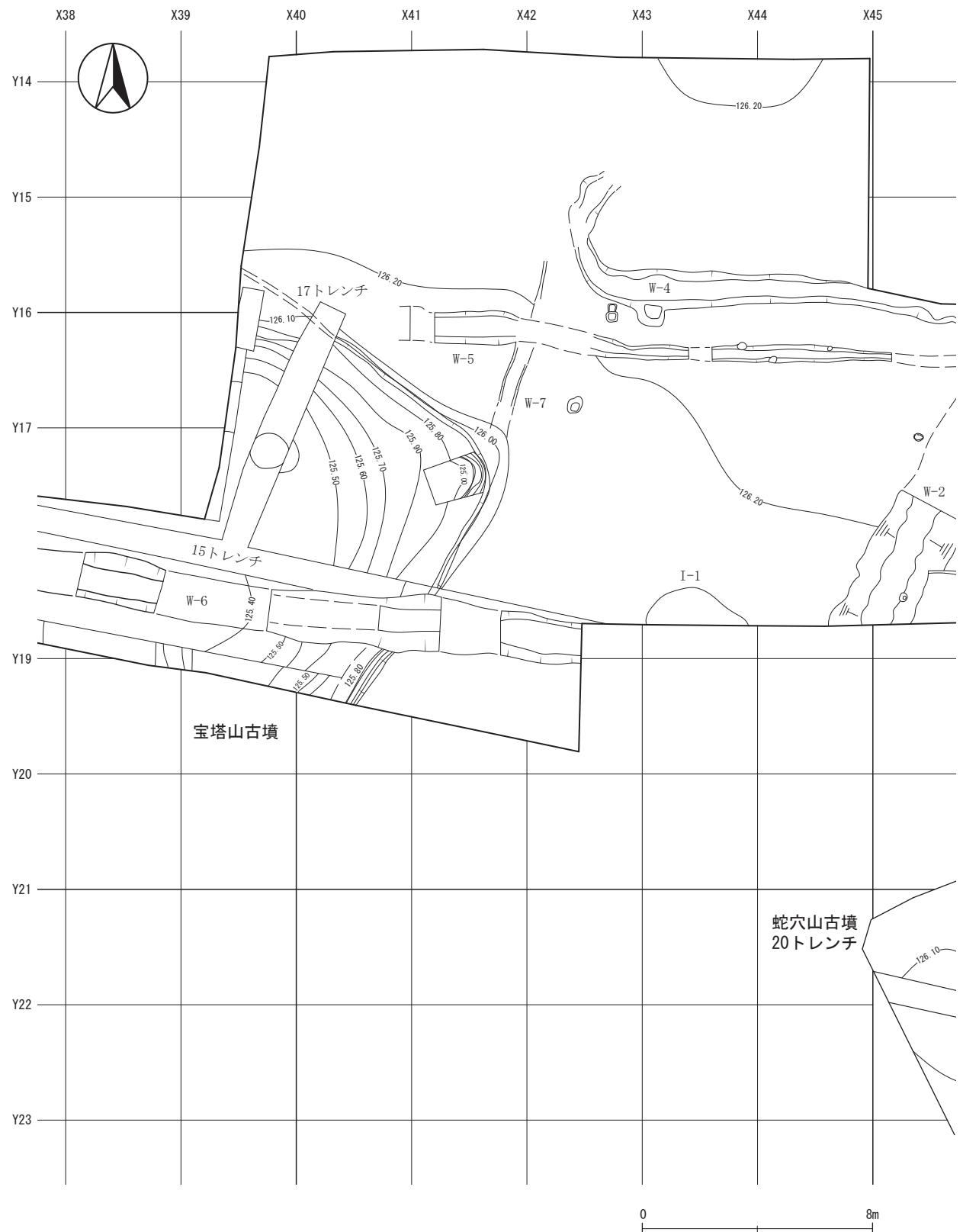
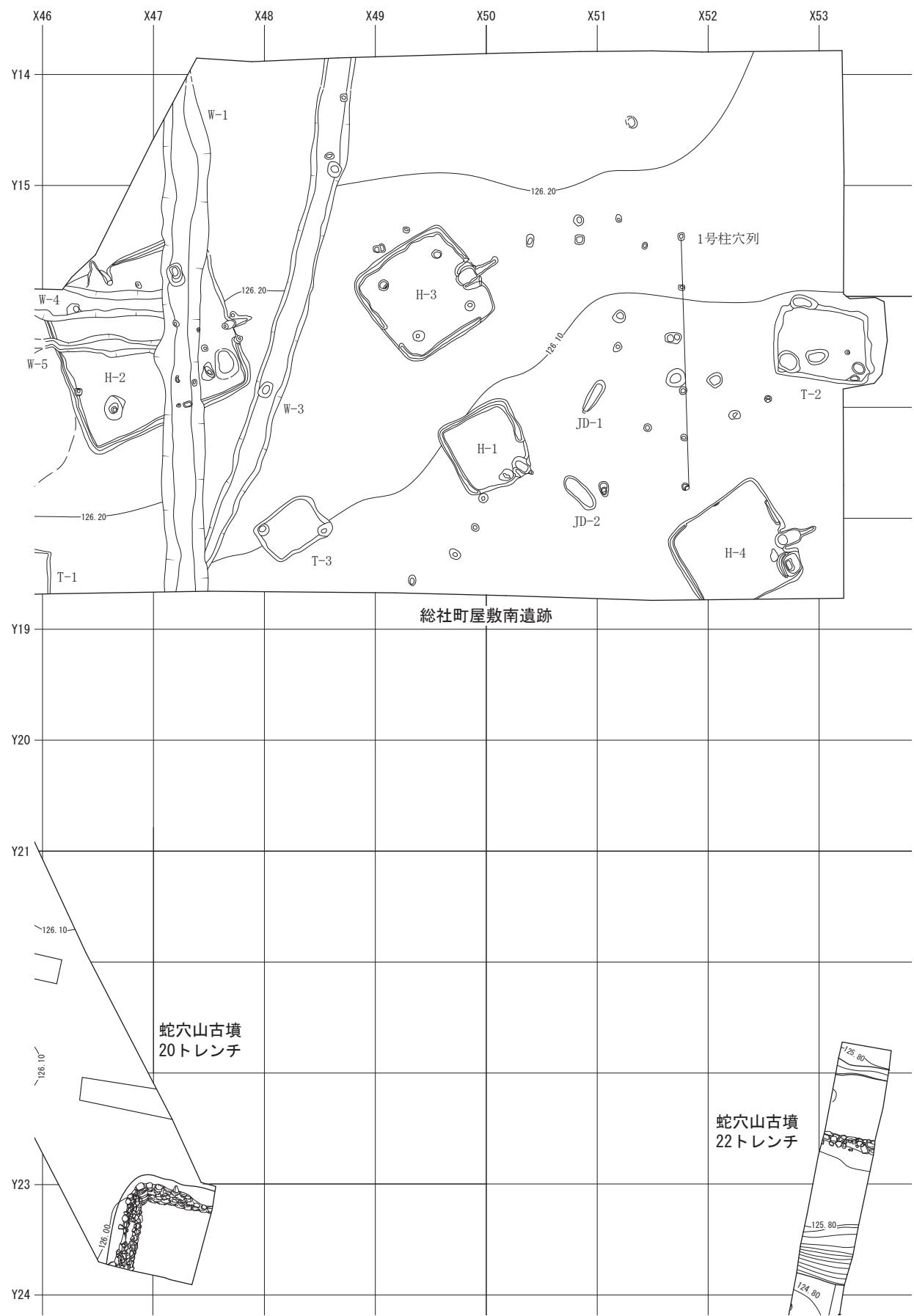
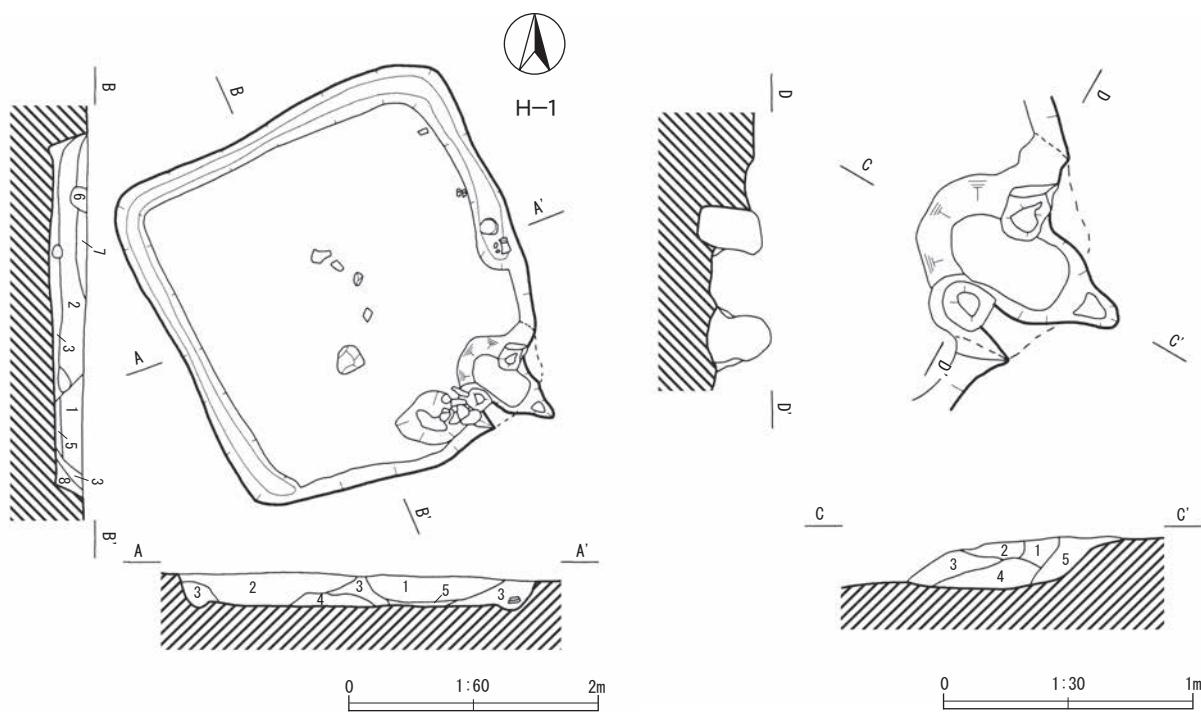


Fig. 18 町屋敷南遺跡全体図（平21）





H-1号住居跡

- 1層 黒褐色土層 As-C・Hr-FP軽石を多く含み、粗い土質で、若干の炭化材が混じる。
 2層 灰褐色土層 As-C・Hr-FP軽石を多く含み、細かい土質で、若干の炭化材とローム粒が混じる。
 3層 にぶい褐色土層 粘性が強く、細かい土質で、褐色土を含む。
 4層 にぶい黄褐色土層 ローム粒を主体とする。
 5層 黒褐色土層 1層に似るが、軽石の含有は少量。
 6層 褐色土層 若干のローム粒を含む。
 7層 灰褐色土層 As-C・Hr-FP軽石を多く含む細かい土質。
 8層 褐色土層 ローム粒・ロームブロックを若干含む。

H-1号住居跡竈

- 1層 褐色土層 ロームの細粒と焼土粒が混じる。
 2層 灰白色土層 竈の構築材。
 3層 灰褐色土層 ローム粒を多く含み、下部に炭化材が混じる。
 4層 灰黄褐色土層 上部に焼土層、下部に灰を多く含む。
 5層 黄褐色土層 底辺に赤褐色粒子を含む。

Fig. 19 H - 1 号住居跡

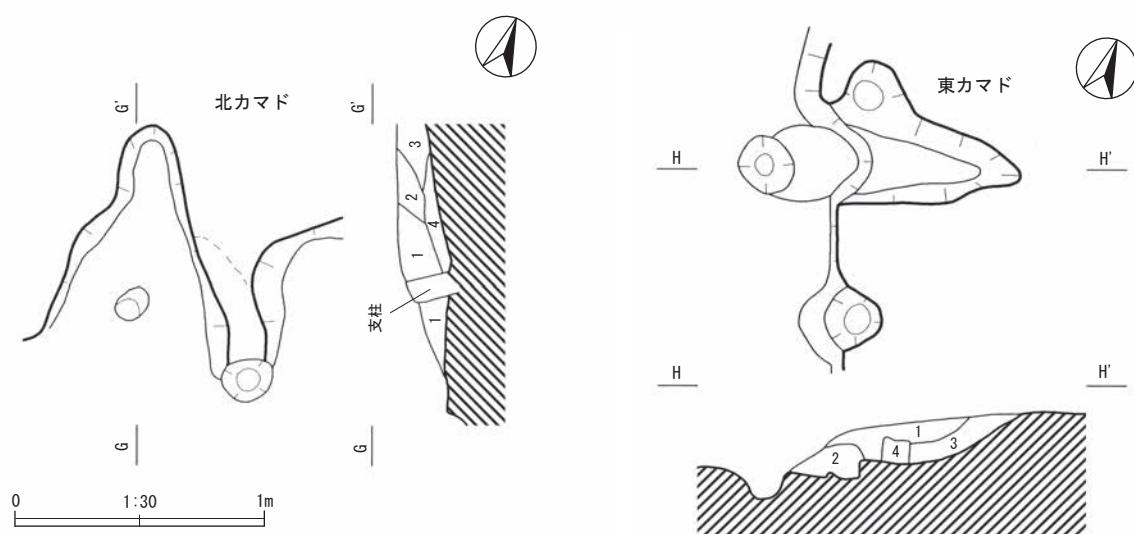
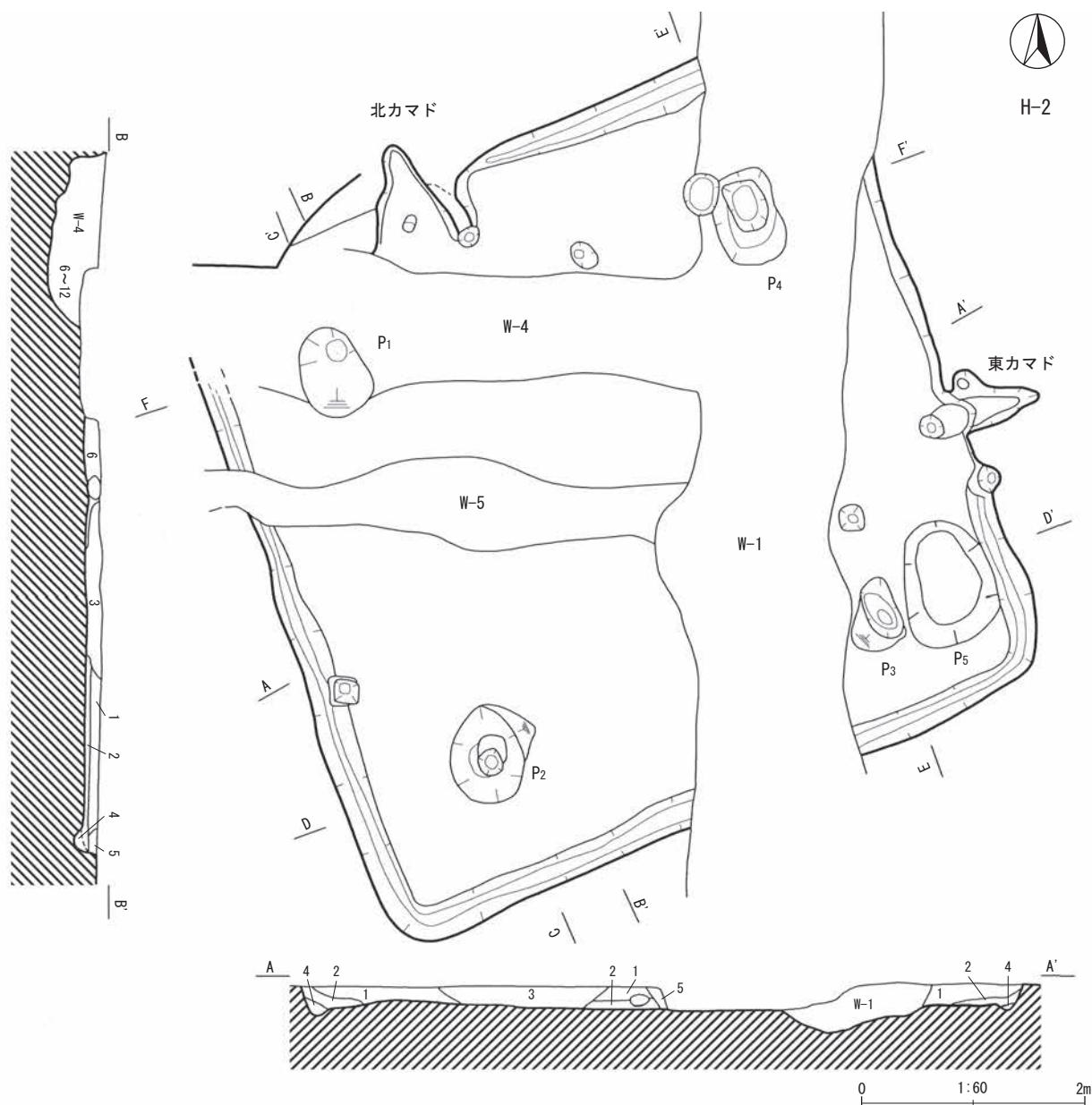
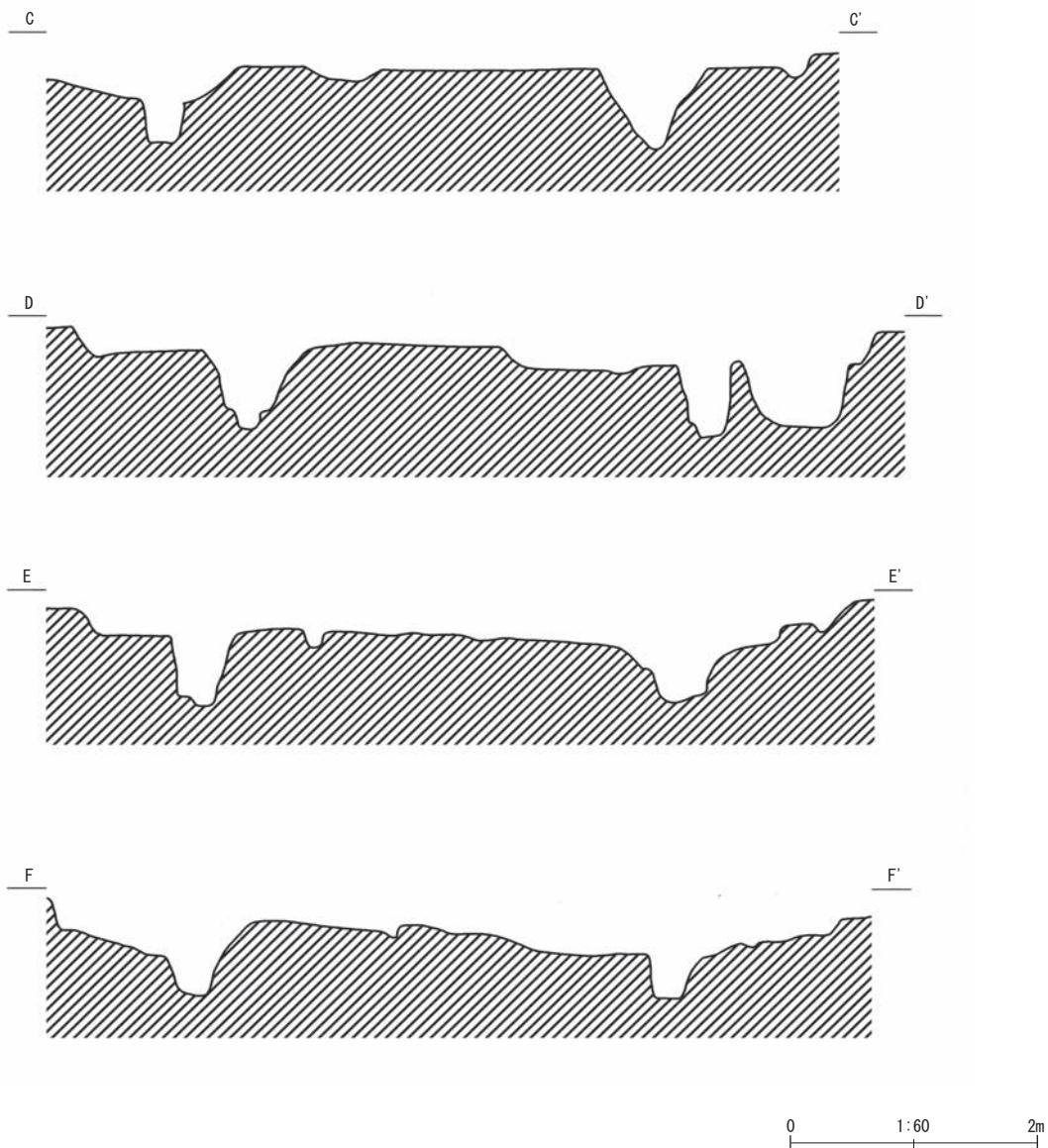


Fig. 20 H - 2 号住居跡



H-2号住居跡

- 1層 にぶい褐色土層 As-C・Hr-FP軽石を含むが、3層より少ない。
- 2層 灰褐色土層 As-C・Hr-FP軽石を含む粘性が強い細かい土質。焼土粒・炭化材・ローム粒を混じえる。
- 3層 褐色土層 As-C・Hr-FP軽石を含むが、2層より少ない。
- 4層 にぶい黄褐色土層 ローム粒主体層。
- 5層 灰褐色土層 ロームブロック主体層。
- 6層 黒褐色土層 As-C・Hr-FP軽石を多く含む。 (W-4)
- 7層 褐色土層 As-C・Hr-FP軽石・ロームブロックを含む。 (W-4)
- 8層 褐色土層 $\phi 2\sim4\text{cm}$ のロームブロックを含む。 (W-4)
- 9層 褐色土層 細かい土質で、ロームブロックを含む。 (W-4)
- 10層 にぶい褐色土層 ロームブロックと微量の炭化材を含む。 (W-4)
- 11層 暗褐色土層 ロームブロックと微量の炭化材を含む。 (W-4)
- 12層 にぶい黄褐色土層 ローム粒主体層。 (W-4)

H-2号住居跡北竈

- 1層 にぶい赤褐色土層 ローム粒・焼土粒子を含む。
- 2層 褐色土層 焼土粒子を含む。
- 3層 灰褐色土層 灰と焼土ブロックを含む。
- 4層 灰色土層 灰層で炭化材を含む。

H-2号住居跡東竈層

- 1層 灰白色土層 粘質土層の竈構築材。
- 2層 褐色土層 Hr-FP軽石を含む。
- 3層 にぶい褐色土層 ロームブロック $\phi 2\text{cm}$ とHr-FP軽石を含む。
- 4層 褐色土層

Fig. 21 H - 2 号住居跡

後に廃棄されたことが理解できる。北竈脇からはそれらしき掘り込みは検出されなかつた。

出土遺物 土師器壊と甕の小片計21点が点在し、菰編石が北竈右袖脇に多く出土。

時期 6世紀第3四半期と考えられる。

H-3号住居跡 (Fig. 21, PL. 11・12)

位置 X48~50, Y15・16にあり、西方にH-2号住居跡、南東方向にH-2号住居跡が隣接する。

主軸方向 N-58°-E

規模 長軸長4.10m、短軸長4.00mのほぼ正方形を呈し、残存壁高は21~26cm。

床面 ほぼ平坦であるが、著しい堅緻面の分布は検出できなかつた。

周溝 貯蔵穴のある南東隅と西壁の一部が途切れる。幅20cm前後、深さ5cm前後。

柱穴 主柱穴の4本が検出され、35~40cm前後の円形を呈し、深さ50~70cmを測る。各々の柱間は2.2m前後である。

竈 東壁中央やや南寄りにあり、主軸はN-58°-Eを呈する。褐灰白色粘土を構築材とし、袖部先端に川原石を設ける。全長1.65m、焚き口の袖石間39cm、煙道長93cmを測る。燃焼部から煙道部は直立に12cm程度立ち上がる。燃焼部の側壁は焼土化が著しく、中央に土師器甕が横たわる。

貯蔵穴 南東隅に設けられ、長軸45cm、短軸39cmの橢円形を呈し、深さ25cmを測る。底面付近に3個体の土師器壊が横・正位で出土。

出土遺物 土師器甕(8~10)と土師器壊(4~7)の計7点を図示。

時期 6世紀第3四半期。

竪穴状遺構

T-1号竪穴状遺構 (Fig. 18)

位置 X45, Y18にあり、西方をW-1号溝によって切られている。

主軸方向 N-95°-E

形状・規模 方形を呈すると考えられ、長軸長[2.95]m、短軸長[1.8]m、残存壁高15cmで垂直に近い掘り込み。

底面 均一な高さを保つ平坦面であり、比較的締まっている。

出土遺物 なし。

時期 近現代と考えられる。

られる。

備考 覆土はロームブロックを多量に含む褐色土で人為的な埋め土と考えられる。

T-2号竪穴状遺構 (Fig. 18)

位置 X52・53, Y16にあり、西方にキの字形の搅乱と1号柱穴列が隣接する。

主軸方向 N-96°-E

形状・規模 東西に長い方形を呈し、東辺の南方がやや突出する。長軸長3.5m、短軸長2.6m、残存壁高23~30cm。

底面 僅かに中央部が窪み、大小の不定形な掘り込みがあるが、本遺構より新しい。

出土遺物 近世丸瓦片、肥前系の染付碗、植木鉢片、焙烙片等がある。

時期 近現代と考えられる。

T-3号竪穴状遺構 (Fig. 18)

位置 X52・53, Y16にあり、西方にW-1・3号溝が隣接する。

主軸方向 N-58°-E

形状・規模 東西方向に長い長方形を呈し、長軸長2.43m、短軸長1.79m、残存壁高25cmを測り、東と西コーナー部の対角線上に柱穴状掘り込みを有するが、本遺構に伴うかは不明。

底面 やや凹凸があるがほぼ平坦。

出土遺物 なし。

時期 近現代と考えられる。

溝状遺構

W-1号溝 (Fig. 18)

位置 X47, Y13~18

主軸方向 ほぼ南北に走行する。

規模 長さ[18.7]m、幅1.5~1.7cm、深さ15~43cm、北方でやや窄む。

形状 掘り込みは逆台形を呈し、北~南傾斜する。

出土遺物 近世平瓦片、肥前系染付碗片、灯明皿片、焙烙片、擂鉢片、砥石等がある。

時期 近世以降。

備考 南端でW-3号溝と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。

W-2号溝 (Fig. 18)

位置 X44~46, Y16~18

主軸方向 N

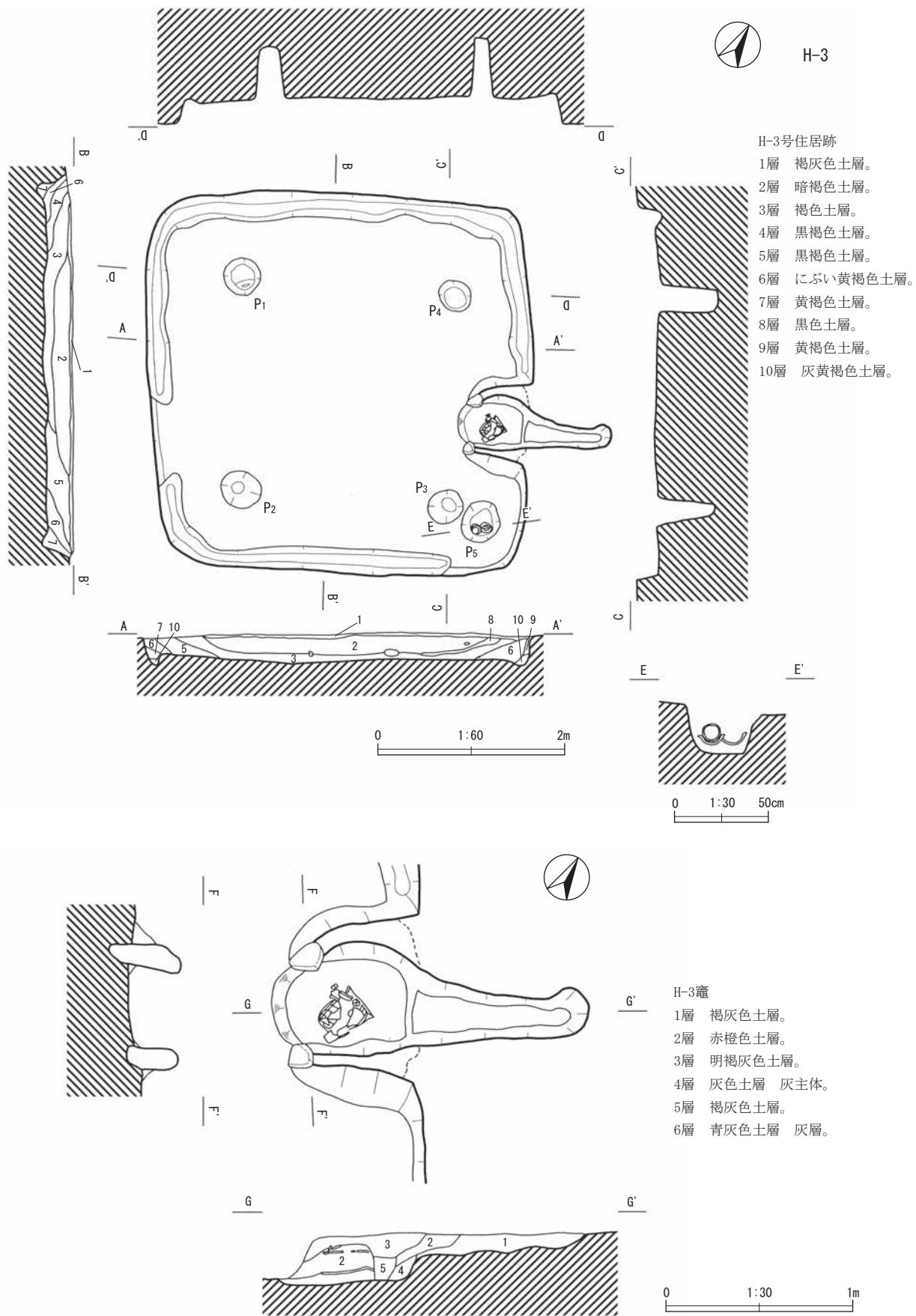


Fig. 22 H - 3 号住居跡

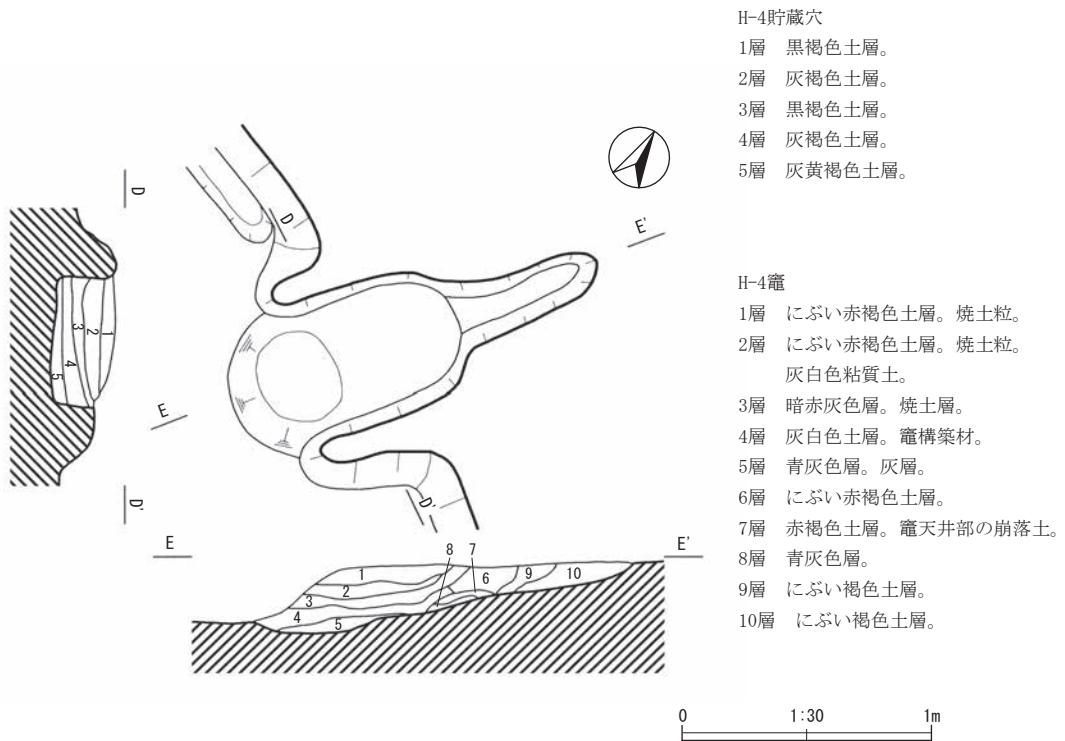
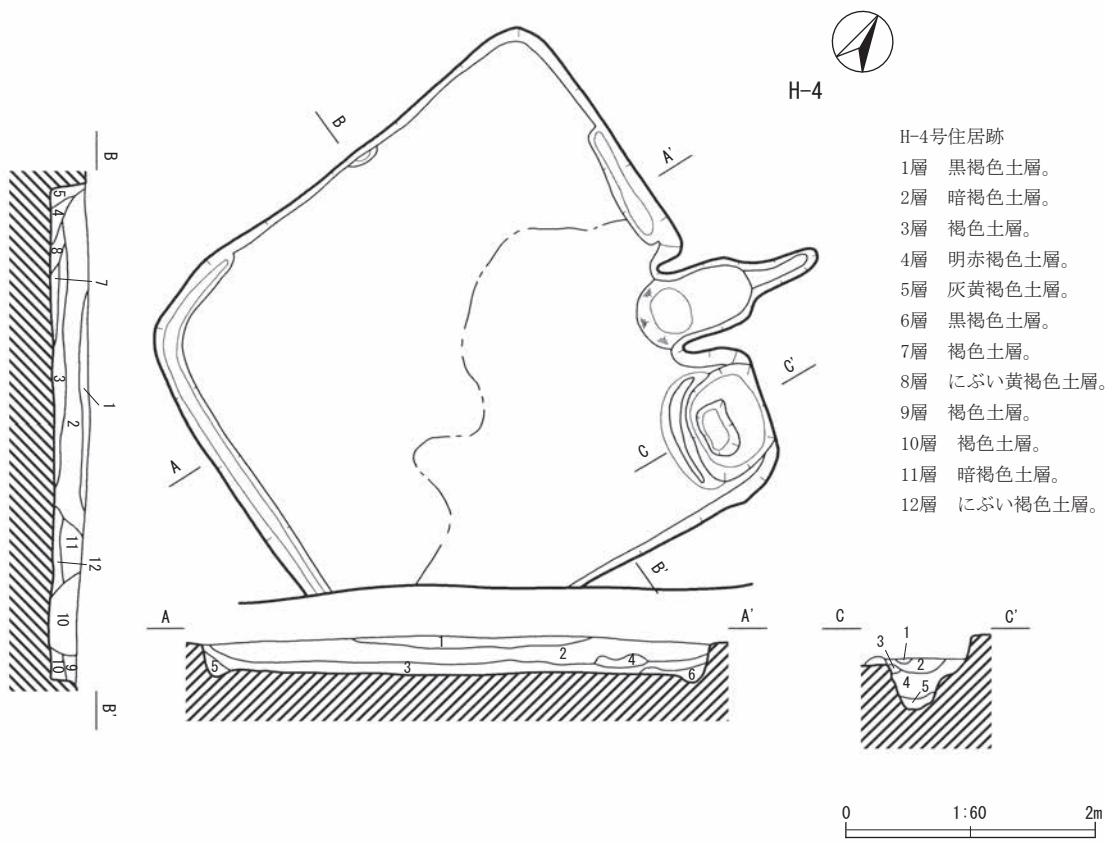


Fig. 23 H - 4 号住居跡

$-27^{\circ} - E$ **規模** 長さ[10]m、幅2.5m前後、深さ20cm前後、北方部分がやや歪む。北方先端部がH-2号住居跡・W-4号溝、南方でT-1号竪穴状遺構と重複する。 **形状** 掘り込みは皿状を呈し、上面には河原石が中央部分に集中して配されている。底面は北～南に傾斜する。 **出土遺物** なし。 **時期** 近世以降。重複するH-2号住居跡・T-1号竪穴状遺構より新しいが、W-4号溝との関係は不明。

W-3号溝 (Fig. 18)

位置 X47・48、Y13～18 **主軸方向** 北に 15° 前後振れ、緩やかな弧状を呈す。 **規模** 長さ[19]m、幅0.6～1.3m、深さ6～23cm、南方でやや窄み、W-1号溝と重複する。 **形状** 掘り込みは浅い逆台形を呈し、北～南傾斜する。底面に柱穴状の掘り込みが穿たれているが、

新旧関係は不明。 **出土遺物** なし。 **時期** 新旧関係は本遺構が古い。

W-4号溝 (Fig. 18)

位置 X42～47、Y14～17 **主軸方向** 東西走行は東方でやや南方にぶれ、X42・Y15グリットで北方に屈曲する。 **規模** 長さ[19]m、幅65～110cm、深さは7～30cmで部分的に深い力所がある。東方でH-2号住居跡を切り、その東方でW-1号溝と重複する。 **形状** 掘り込みは浅い皿形を呈し、東傾斜する。 **出土遺物** 近世平瓦片、肥前系染付碗片、青磁片、擂鉢片等がある。 **時期** 近世以降。

W-5号溝 (Fig. 18)

位置 X40～47、Y15・16 **主軸方向** ほぼ東西に走行し、X42・Y16グリットでやや北上して西方は幅を広げるが西先端部は攪乱により不明。 **規模** 長さ[25.8]m、幅35～105cm、深さは東方で10cm前後であるが、西

方では20～30cm。東方でH-2号住居跡を切り、その東方でW-1号溝と重複する。 **形状** 掘り込みは東方でU字形、西方は逆台形を呈し、東～西に傾斜する。 **出土遺物** 近世平瓦片、肥前系染付皿片、瀬戸・美濃系の製品、古銭（渡来銭 紹聖元寶）等がある。 **時期** 近世以降。

W-6号溝 (Fig. 18)

位置 X35～41、Y17～19にあり、調査した東部分を除いて宝塔山古墳の周堀内に位置する。 **主軸方向** 東西に走行する北辺部分は、N- $98^{\circ} - E$ にとり、X12・Y6グリットポイント付近で直角に折れる。南北走行の西辺はN- $8^{\circ} - E$ を呈する。 **規模** 北辺の長さ[26]m、幅1.27～2.10m、西辺の長さ[2.8]mを検出した。調査区南壁のセクションでは幅2.5m、深さ1.25mを測る。 **形状** 掘り込みは底面に近い下部が箱堀形を呈し、上方が開口する。 **出土遺物** なし。 **時期** 中世の環濠か。

W-7号溝 (Fig. 18)

位置 X41・42、Y15～17 **主軸方向** N- $20^{\circ} - E$ **規模** 長さ[6.0]m、幅60cm前後、深さ5cm程、南北の先端部が消滅か攪乱が及ぶ。 **形状** 掘り込みは浅い皿形を呈し、北～南に傾斜する。 **出土遺物** なし。 **時期** 近世以降。

井戸跡

I-1号井戸 (Fig. 18)

位置 X43、Y18にあり、北側半分を調査。 **主軸方向** **規模** 東西に径3.6mを検出。 **出土遺物** 肥前系陶磁器等が出土。 **時期** 近世以降。

その他

1号柱穴列 (Fig. 18)

位置 X51、Y15～18 **主軸方向** N- 1°

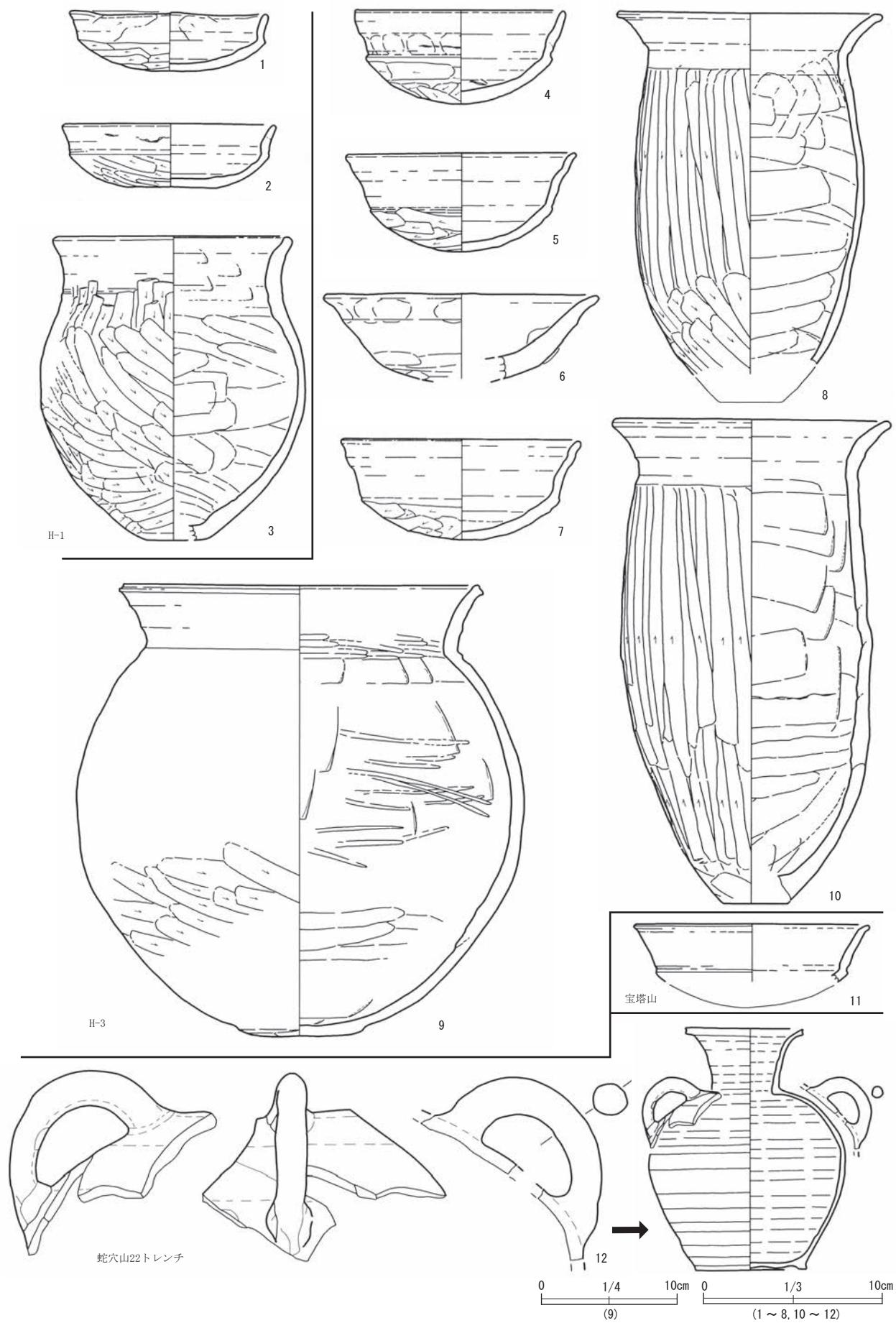


Fig. 24 住居・蛇穴山古墳出土遺物

－W 規模 小柱穴が南北方向に6ヶ所に連続する。柱穴の大きさは20～25前後の方形か円形を呈し、15～22cmの深さで、各々の柱間は1.8m。 出土遺物 なし。 時期 近現代。

第2節 遺 物

遺物については、計測値については、別表の遺物観察表に掲載した。ここでは観察所見のみ記載する。

H-1号住居跡 (Fig. 24 PL. 12)

1は土師器杯形土器。浅い丸底を呈し、口縁部は緩やかに外反する。口縁部変換点に稜を形成。口縁部～内面は横撫。底部は箆削り。2は土師器杯形土器。浅い丸底を呈し、口縁部は緩やかに外反する。口縁部変換点に稜を形成。口縁部～内面は横撫。底部は箆削り。内底面に焼成前の「×」印がある。

3は土師器甕形土器。底部は丸底気味。胴部はやや膨らみ、中位に最大径。口縁部は緩やかに外反。口縁部内外面横撫、外面胴～底部は箆削り、内面斜～横位の撫でによる仕上げ。

H-3号住居跡 (Fig. 24, PL. 12)

4は土師器杯形土器。丸底の底部から口縁部は外傾し、口端部分で僅かに内湾。口縁部変換点に稜を形成。口縁部～内面は横撫。底部箆削り。口縁部外面に指頭圧痕。

5は土師器杯形土器。丸底の底部から口縁部は外傾し、口端部分で僅かに内湾。口縁部変換点に僅かに稜を形成。口縁部～内面は横撫。底部箆削り。

6は土師器杯形土器。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は大きく外傾して開く。口縁部～内面横撫。口縁部外面に指頭圧痕。器面が著しく発泡。

7は土師器杯形土器。丸底の底部から口縁部は外傾し、口端部分で僅かに内湾。口縁部

変換点に僅かに稜を形成。口縁部～内面は横撫。底部箆削り。

8は土師器甕形土器。口縁部は外反。胴部は僅かに膨らみ中位に最大径。口縁部の内外面横撫。胴部外面上～中位は縦位、下位は斜位の箆削り。内面横位の撫。

9は土師器甕形土器。底部僅かに丸み。胴部中位に最大径。口縁部は外反。口端部に浅い沈線。口縁部横撫。胴部上半は磨き、下半は箆削り。内面胴部横位の箆撫。

10は土師器甕形土器。胴部の形状は1に似る。口縁部の内外面横撫。胴部外面は縦位、下端で横位箆削り。内面の上半は横位箆撫、中位は横位、下位は縦位の撫。

宝塔山古墳 (Fig. 24, PL. 12)

11は土師器杯形土器。丸底の底部から口縁部は外傾し、口端部分でさらに外傾する。口縁部変換点に外稜がみられる。口縁部～内面は横撫。

蛇穴山古墳 (Fig. 24, PL. 12)

12は粘土紐を半円状に貼付した把手を持つ須恵器瓶の肩部破片である。把手が肩部の円周方向に対して直行して貼付されていることから、提瓶のような器種とは考えられず、肩部に一ヵ所だけ把手が貼付される把手付瓶と見てよいであろう。灰色で硬質に焼成されており、灰白色に発色した自然釉が掛かっている。胎土には形の一定しない白色粒や石英、片岩様の細粒を含み、緻密さの弱い全体にざっくりとした感じのするものである。

桜岡氏の鑑定によれば9世紀代とされる。したがって、蛇穴山古墳の築造された7世紀末からは最短でも半世紀以上、おそらく1世紀以上の時間を経た後に古墳にもたらされたと考えるべきであろう。

その他 (Fig. 25)

13は阿玉台式土器。ひだ状文を施す胴部破

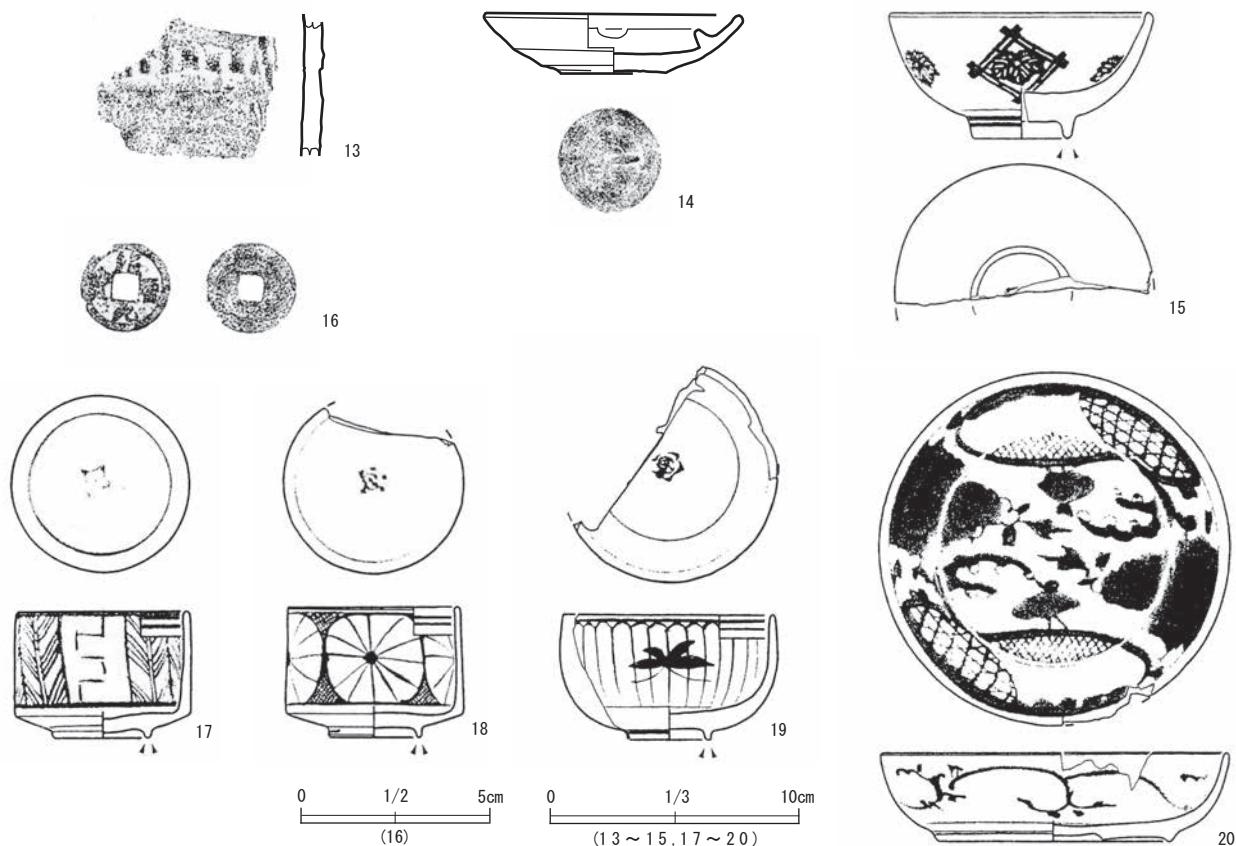


Fig. 25 井戸・溝出土遺物

Tab. 1 総社町屋敷南遺跡出土遺物観察表

No.	遺構名	器種	出土位置	①口径②器高③底径	①胎土②焼成③色調④遺存度	登録番号
1	H-1	土師器坏	床面	①10.6②3.1③-	①細粒②酸化焰③橙④完形	5
2	H-1	土師器坏	床面	①(11.6)②3.4③-	①細粒②酸化焰③橙④2/3	6
3	H-1	土師器甕	床面	①(17.3)②[21.8]③(6.0)	①中粒②酸化焰③にぶい黄橙④1/2	1
4	H-3	土師器坏	貯蔵穴	①11.4②5.0③-	①細粒②酸化焰③橙④完形	P 5-1
5	H-3	土師器坏	貯蔵穴	①12.6②5.2③-	①中粒②酸化焰③明黄褐色④4/5	P 5-3
6	H-3	土師器坏		①(15.0)②[4.6]③-	①中粒②酸化焰③橙④口縁～体部片	3
7	H-3	土師器坏	貯蔵穴	①13.0②4.4③-	①細粒②酸化焰③橙④完形	P 5-2
8	H-3	土師器甕	床面	①19.5②[26.2]③-	①粗粒②酸化焰③明赤褐色④3/4	35
9	H-3	土師器甕	床面	①(26.6)②33.2③9.0	①中粒②酸化焰③橙④2/3	9
10	H-3	土師器甕	床面	①20.4②[35.3]③-	①中粒②酸化焰③明赤褐色④底部欠	9
11	宝塔山古墳	土師器坏	表採	①12.8②(3.2)③-	①中粒②酸化焰③明赤褐色④底部欠	
12	蛇穴山古墳	須恵器瓶	22トレンチ	小破片		
13	表採	縄文深鉢	表採	破片		
14	表採	灯明具	表採	①10.2②2.4③4.1		
15	W-4	染付碗	W-4	①(10.5)②5.0③(4.0)	肥前系	
16	W-4	古錢	W-4	紹聖元寶(北宋錢)		
17	I-1	染付碗	I-2	①6.8②5.0③3.9	肥前系	
18	I-1	染付碗	I-2	①6.8②5.1③3.7	瀬戸・美濃系	
19	I-1	染付碗	I-2	①(8.4)②4.9③3.3		
20	I-1	染付皿	I-2	①13.8②3.5③9.2	肥前系	

片。

14は近世の灯明具。

W－4号溝 (Fig. 25、PL. 12)

15は肥前系の染付碗。畳付無釉。貫入あり。胴部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上る。胴部下半の丸味はやや強い。外面胴部にコンニャク印判による井桁内に桐を有する文様と桐文を交互に配し、下位に1条の圏線。高台に2条の圏線。高台内に「渦福」字銘か。

16は古錢。紹聖元寶。北宋錢。1659年鑄造。

I－1号井戸 (Fig. 25、PL. 12)

17は肥前系の染付碗。筒型碗。畳付無釉。胴部は直線的に立ち上り、口縁部僅かに内湾。外面胴部に矢羽根文。底部下端に1条の圏線。内面口縁下に2条、胴部下端に1条の圏線、見込みにコンニャク印判による文様。

18は瀬戸・美濃系の染付碗。筒型碗。畠付無釉。外面にピンホール。胴部～口縁部にかけてやや内傾し、直線的に立ち上る。外面胴部に菊花状文を呉須で施す。底部下端・高台に各1条の圏線。内面口縁下に2条、胴部下端に1条の圏線、見込みにコンニャク印判による五弁花文。

19は染付碗。畠付無釉。胴部は丸みをもって立ち上り、口縁部は直線的にやや内傾。外面胴部に蓮弁文・蝶文。胴部下端・高台に各1条の圏線。内面口縁下に2条、胴部下端に1条の圏線。見込みにコンニャク印判による五弁花文。

20は肥前系の染付皿。蛇の目凹型高台。胴部から口縁部は丸みをもって立ち上る。外面胴部に唐草文。胴部下端に1条、高台に2条。内面口縁下に1条、胴部下端に2条の圏線。口縁から見込みに花鳥文。

第5章 成果と課題

第1節 蛇穴山古墳・宝塔山古墳について

(1) 蛇穴山古墳

1 はじめに

江戸時代以前に蛇穴山古墳を記載した文献として以下の3点をあげることができる。

- ①安居院唱導教集団 1352～1361（文和・延文）年頃『神道集』
- ②中川内膳正久盛室 1689（元禄2）年『伊香保記』

- ③奈佐勝臯 1786（天明6）年『山吹日記』

①『神道集』は、安居院唱導教集団の著作とされ、南北朝時代中期に成立したとされ、全10巻で50話を収録する。8巻の群馬桃井郷上村内八ヶ権現事について記載がある。「卷八の四十九 邮政八郎大明神の事」の中に「国司代理官の八郎を夜襲して殺し、死体を石の唐櫃に入れて、群馬郡高井郷の鳥食池から東南方にあたる蛇食池の中島にある蛇塚の岩屋という岩の中、深く投げ込んだ」という記載がある。現在の蛇穴山古墳という名称から、「蛇塚の岩屋」は蛇穴山古墳と考えられる可能性があり、当時石室が開口していたものと考えられる。

②『伊香保記』は、中川内膳正久盛室により書かれた江戸時代初期の江戸より伊香保までの紀行文である。記載は「又此寺（総社光嚴寺）中に八郎権現といふ御神のまたほんふ（凡夫）にておはしませしき、あに君達にそねまれてとちこめられさせ給ひしいわ屋ありと人のいへは、見むとて行けるに、年老たる女のあなひしてみせまいらせんとて云々」である。江戸時代初期に光嚴寺の近くに「八郎権現の岩屋（石室）」があったことを記している。

③『山吹日記』は、奈佐勝臯により、江戸時代中期に記された旅日記であり、天明6年5月11日の条に、「植野、高井など過て惣社に

いつ。よきいへゐおほかり。光岩（厳）寺と云める禪りんは山形候の氏寺とて、境内の小山（宝塔山古墳）の上に世々のはかならへり。うしろのかたにめくりて見れば、是も南にむきて石室あり。けふ大窪なるをことにいかめしと思ひ給へしに猶まさりてなん。石のさまたくひなし。此東の万一町あまり隔てまた高き所のうへに観世音の御堂あり。其下に是も南へ向て同じやうなる有。口の方をつくりひかへて弁財天を安置せり。この観世音の御堂のはつれにやすらふ。」とある。この日記によると、墳上に観世音堂があり、入口をつくりかえて弁財天を祀っていたのが蛇穴山古墳とみられる。

また古墳の奥壁に蛇の形をした弁財天の種子と1671（寛文11）年銘が刻まれている。

このように江戸時代までの古い記録によると、蛇穴山古墳は『神道集』によれば、「蛇食池（周濠）の中島にある蛇塚の岩屋（墳丘と石室）」の表現からして、墳丘の外側に満々と水をたたえる周濠が存在したことがうかがわれるが、また『伊香保記』および『山吹日記』などには、周濠に関する記載はない。しかし石室はすでに開口していたことをうかがわせるものである。

蛇穴山古墳は旧総社小学校校庭に位置し、かつては周濠をめぐらせた大型の方墳であったが、周濠は次第に埋められて、北は旧総社小学校の校庭になり、西は旧総社幼稚園の敷地とされ、東には旧総社小学校プールが存在していた。

今回の範囲確認調査によって、墳丘長44m、周濠を含めた全長は82mの広大な範囲を占め、良好な保存状態であることも判明した。さらには予想していなかった中堤の存在と中堤内外に葺石を確認できた。東西南北の四周の壁と天井の5枚岩で構成される石室

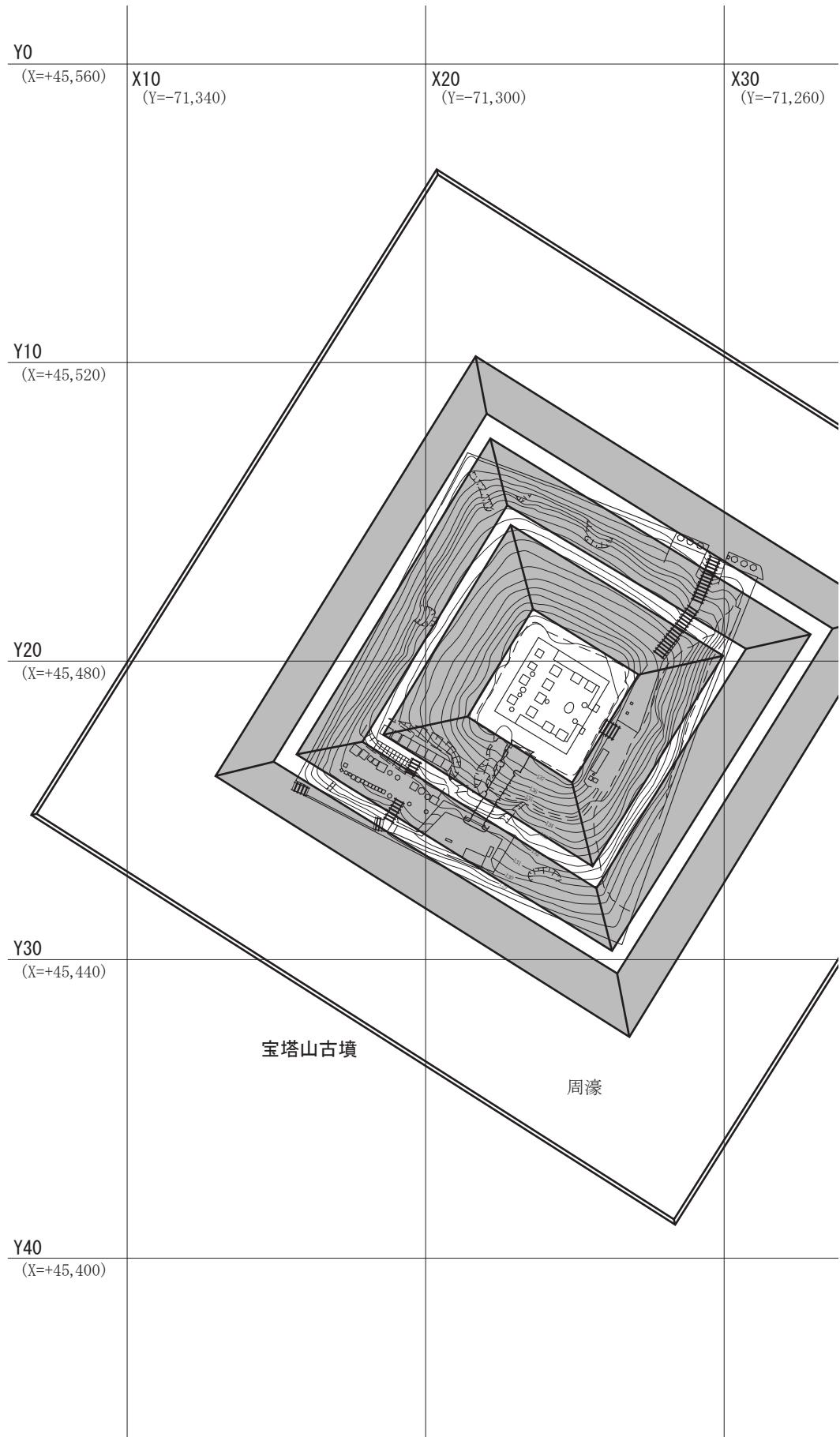
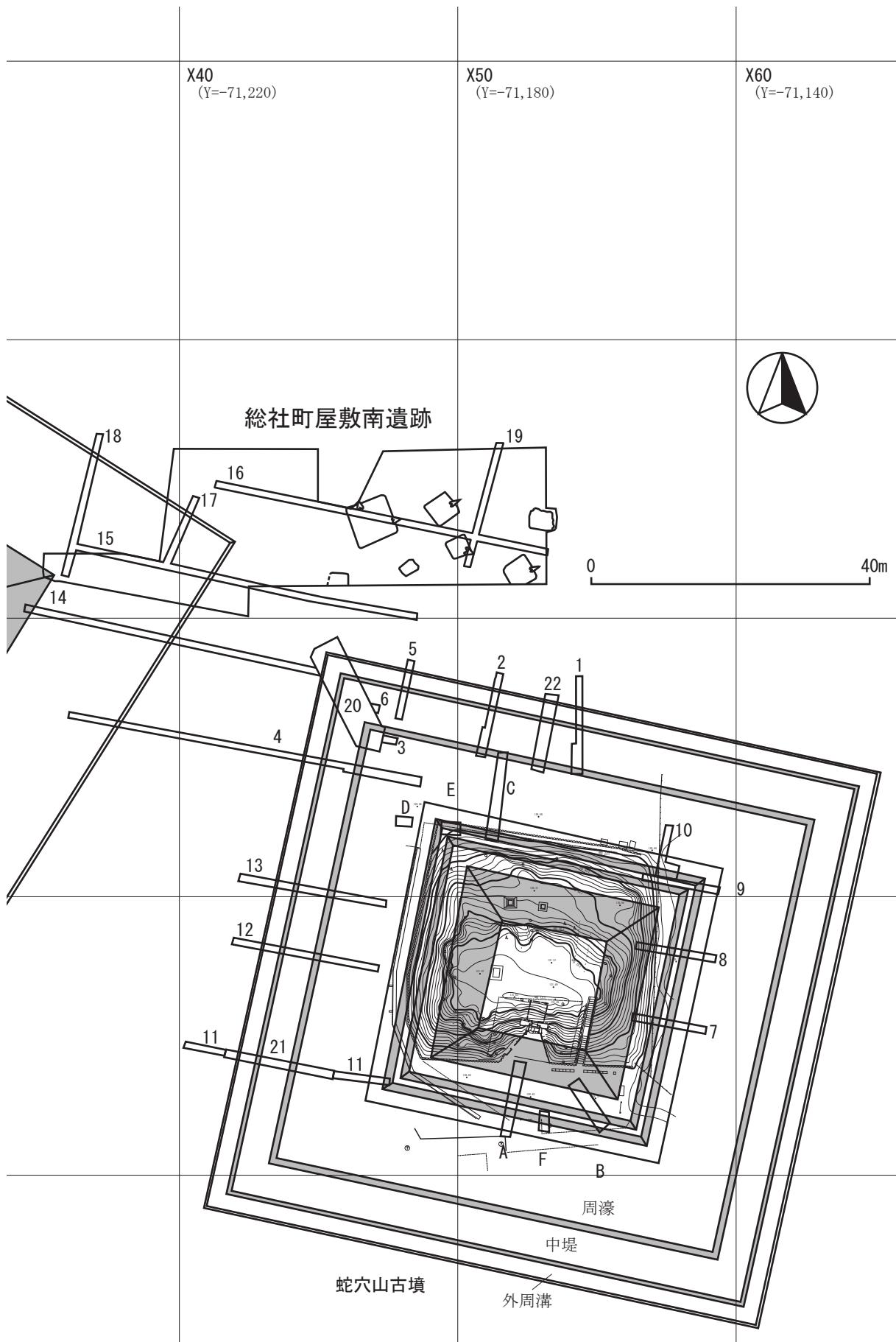


Fig. 26 蛇穴山・宝塔山古墳復元図



は、卓越した石材加工技術により製作され他に類をみないものであり、山王廃寺にある塔心礎石材の加工方法と共通するものである。以上の様相から総社古墳群の終焉を飾るのにふさわしい古墳であることが判明した。

2 範囲確認調査の概要

蛇穴山古墳の調査は、昭和50年にA～Fトレンチ6本のトレンチが墳丘と周濠、石室前庭部に入れられた。この6本のトレンチ調査で従来、円墳であった墳丘が方墳であることが判明した。さらに、B・Fトレンチには墳丘裾部に多段にわたる葺石が見られた。

平成19年度第1次調査では、北西部の周濠に1～6トレンチ6本を入れた結果、中堤が検出された。さらに、中堤の内外には利根川産の円礫を使用した葺石が発見された。

蛇穴山古墳の東に隣接していた総社小学校のプールが撤去となつたため、その跡地を中心に第2次調査が実施された。7～13トレンチ7本と東西の周濠と墳丘裾部を中心に調査を行つた。当初、プール跡地では造成工事の掘削により遺構の保存は期待していなかつたが、調査を進めた結果、想定より遺構の保存状態が良かった。これには、榛名山東南麓(Fig. 4)の北西方向から南東方向に傾斜を有する地形が功を奏したといえる。

① 昭和50年度調査

Aトレンチ…墳丘南側。石室主軸に沿つて石室内部から前庭部に設定したトレンチ。全体的に後世の改変が著しい。前庭部には粗粒安山岩切石を用いた石列(PL. 1-2、1-3)が存在するが、攪乱層である1層中に存在することから、後に造作されたと思われる。葺石はY38ライン付近に第1段目の葺石基部が2～3段存在し、Y38付近に第2段目を想定できるが、1層の攪乱層で破壊を受けたものと思われる。

Bトレンチ…墳丘南東。元報告では、2段分

の葺石を検出したと報告されているが、調査記録写真にはトレンチの最下面に大型の扁平円礫が3個並んで存在することが分かった。原報告では2段の葺石とされたものは、見直した結果、①段差幅が少ない、②下部が乱れて葺石列の呈をなさない点(PL. 2-2)から、昭和50年度調査の1段目と2段目を合わせて第2段目葺石として捉え直した。この結果、第2段目の葺石は15～17段を数え、高さ1.4m、傾斜角度は46度を測る。

今回、新たに第1段目とした葺石はトレンチ底面に存在する30cm大の扁平な円礫である。しかも長軸方向を揃え3個並んだ状態で検出された。原報告では記述がなかったが、第1段目の葺石と考えられる。

ここで、Bトレンチの葺石について気がかりになる点がある。確認段階から葺石に沿うように砂礫層が検出されていることである(写真01)。同じような葺石と小円礫の組み合せが平成19年度の7～9・11トレンチでも見られた。これらの砂礫層は後世になってから流入したものとは考えられない。そうなると葺石に関係した造作とも考えられる点である。Cトレンチ…北側墳丘。墳丘の裾部に第1段目の葺石。周濠は近世の改変が著しい。中堤内側の葺石も破壊を受けており、保存状況は



写真01 Bトレンチの葺石と小円礫(北から)

悪い。

Dトレンチ…西側周濠内。墳丘から周濠に移行する部分であるが、近世の改変を受けており、本来の周濠面は残っていない。

Eトレンチ…墳丘北西隅。第1段目の葺石。葺石の上面は近世の改変を受けており、残りは悪い。

Fトレンチ…墳丘南側。第1段目の葺石を検出する。上面に大型の扁平円礫を長軸方向に配列する。

② 平成19年度第1次調査

1トレンチ…北側中央の中堤部。最初に外周溝の存在を確認した調査区。中堤外側に葺石列。内側葺石列は破壊を受ける。

2トレンチ…北側西部の中堤部。中堤内外の葺石列はすでに破壊を受ける。

3トレンチ…中堤北西コーナー部。内側葺石コーナー部を確認。詳細は平成21年度20トレンチへ引き継がれる。

4トレンチ…北西の中堤部。中堤内側の葺石は良好な状態で検出。周濠のほとんどは後世の掘削を受ける。外周溝は検出されない。

5トレンチ…北側中堤部。外周溝は検出されない。

6トレンチ…北西コーナー中堤。調査は20トレンチに継続される。

③ 平成19年度第2次調査

7トレンチ…東側中央の墳丘裾部。プールがあったにもかかわらず、周濠と墳丘を検出できた。墳丘からは、第1段目と第2段目の葺石を検出。

8トレンチ…7トレンチの北側に設定した墳丘東側の調査区。7トレンチと同様に第1段目と第2段目の葺石の検出。

9・10トレンチ…墳丘東北隅。一列の大型扁平円礫の配列から第1段目葺石と判明。上面に大型の扁平な円礫を配置するのはB、Fトレンチでも見られる。覆土中から多量の小円

礫が出土。

11トレンチ…西側南。墳丘裾部から外周溝までの調査区。墳丘裾部で大小の円礫が存在するため葺石が想定できた。周濠は大きく破壊を受ける。中堤の内外に葺石。外周溝の検出。平成21年度に再度、このトレンチを21トレンチとして精査を行う。

12トレンチ…西側の調査区。中堤外側の葺石第1段目のみ検出。外周溝検出。

13トレンチ…西側中央部の調査区。中堤の内外から葺石列。外周溝検出。

④ 平成21年度調査

20トレンチ…中堤北西コーナーに幅4.5m×長さ17mで設定した調査区。コーナー部には30cm大の扁平円礫を9～10段に揃えて積んでいる。外周溝は校庭造成時に削平を受けて消滅したものと考えられる。このあたり一帯の4～6トレンチはいずれも外周溝が検出できない。また、近接する2トレンチも外周溝は浅く狭い。

21トレンチ…11トレンチの再調査区。11トレンチに同じ。

22トレンチ…北側の周濠部。外周溝と中堤部分。中堤の外側葺石は3段ほど検出。

3 外周溝

外周溝は西側の11・12・13・21トレンチと北側の1・2・5・22トレンチから検出できた。東と南については民有地であるため今回、確認調査を実施できなかったが、各トレンチの状況から全周することが想定される。確認されている外周溝の規模は、上幅は最小2.8m～最大3.3m、平均3.0mであり、深さは0.2～0.6mである。

4 中 堤

中堤は、西側の11・12・13・21トレンチと北側の1・2・5・22トレンチから検出できた。上幅5m前後、下幅6.5m前後、高さは内側

で1.2m、外側で0.5mである。確認した面では盛り土などは確認できず、VII層の総社砂層であった。中堤外面の葺石については後述する。

5 周濠

周濠底面については、ほとんどのトレンチにおいて後世の掘削を受けていたため、本来の底面の検出にいたってはない。わずかに残された情報から、周濠の平均的な幅は11mであり、深さは1.1~1.9mであったと推定される。南北朝時代に書かれた『神道集』の「蛇食池の中島にある蛇塚の岩屋」とあるが、これが事実であればすでに南北朝時代の時点で周濠は改変されていたことになる。いずれにしても周濠底面のほとんどが改変され本来の姿を留めていないことが判明した。

6 墳丘

墳丘裾部の調査では、A・B・C・E・F・7・8・9・11トレンチの9カ所から葺石が検出されている。これらのトレンチの情報を総合的に判断を下すと墳丘裾部には2段の葺石が巡り、おそらく墳丘部にもう1段の葺石が存在することから計3段築成であることが推定される。

墳丘盛土の調査

8トレンチ(Fig. 11)において墳丘盛土面の観察を行った。その結果、

- ① グループ：4a層~4h層までの8層
 - ② グループ：5a層~5i層までの9層
 - ③ グループ：6a層~6f層までの6層
- の計23層が墳丘盛土層である。

墳丘盛土素材は次の4種類に分けられる。
A…As-C混入黒色土、
B…褐色土、
C…総社砂層ブロック、
D…粘土ブロック

である。

3つのグループでの素材の用い方は、①が

4種類を満遍なく使用するのに対して、②・③グループはA・Bの2種類を交互に使用する。層厚は①グループが5~10cmで平均10cm前後である。②グループは3~10cmで平均5cmである。③グループは3~25cmで平均15cmである。②・③グループとも下部に厚さ3cm程度の薄い層があり、固く締められている。石室構築面の高さが127.3mである。5層上面の標高が127.3mであるので、石室面とほぼ同じ高さとなる。②グループが平均5cmと薄く積まれていることは石室構築面を形成するために、薄く叩き締められ石室構築のベース層に仕上げたものと思われる。

7 葦石

蛇穴山古墳では、墳丘裾部に2段、さらに墳丘部に1段の推定3段の葺石、中堤では外面から葺石が検出されている。

① 中堤外面の葺石 (Fig. 27)

中堤外面での葺石は1・11・12・13・22トレンチの5カ所から検出された。北西部の2・4・5トレンチからは葺石も外周溝も確認できなった。おそらく古墳の基盤地形が北西部が高く南東部が低い事に起因するものと思われる。それは5トレンチで外周溝が幅1.5mと痕跡状態で検出されたこともその証である。外周溝が浅いため、葺石の段数も少ない。石の大きさも10~30cmの扁平な円礫交えて使用が認められる。段数は1トレンチが最も高く5~6段積(Fig. 9)となり、ほかのトレンチでは3~5段が確認された。おそらく6段を超える葺石が積まれていたものと思われる。石の積み方は扁平な礫を横方向に用いて、互目積とする。水平方向には同じサイズの石を揃えるよう用いている。石積みには裏込めと呼ばれるような技法は認められなかった。

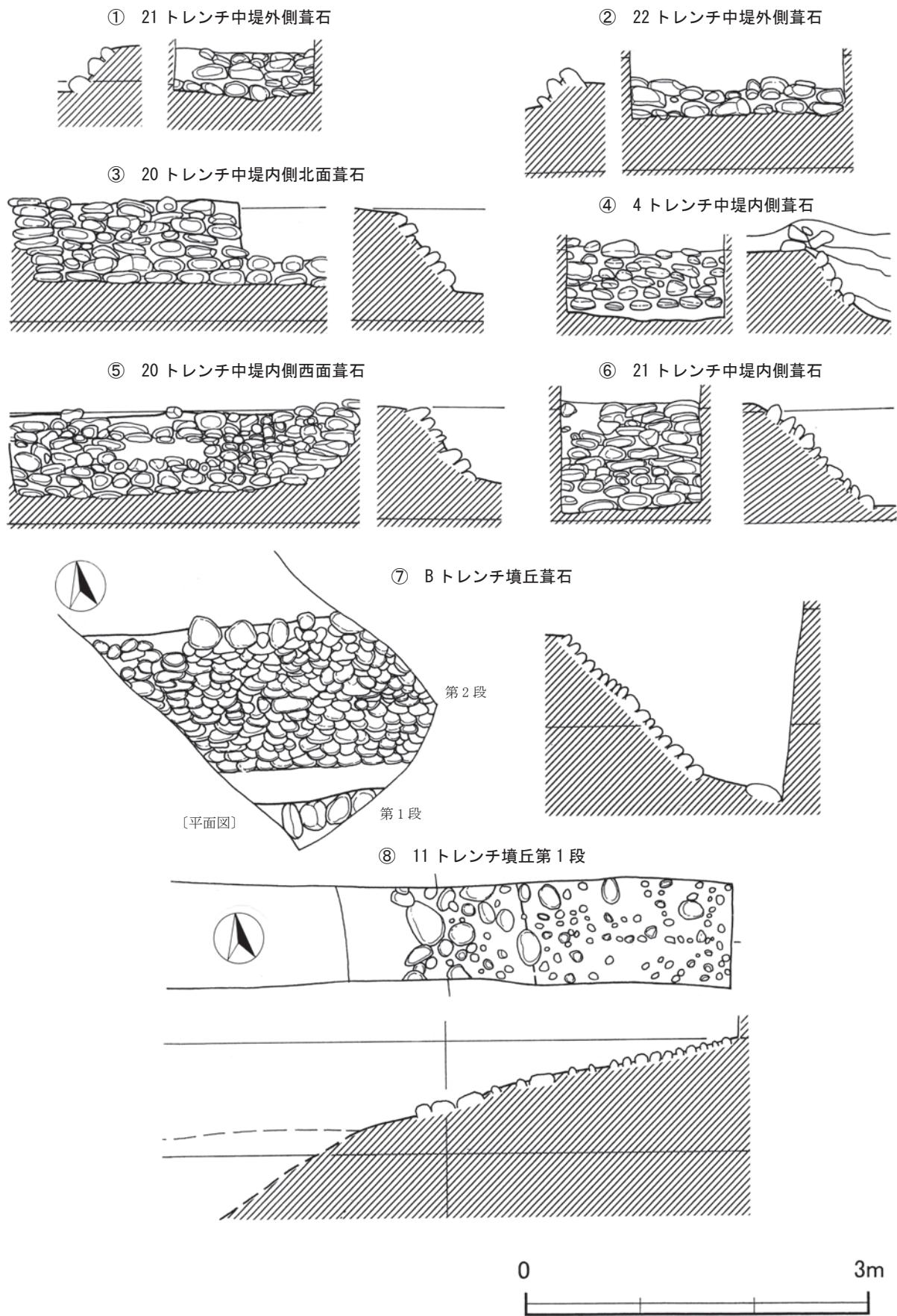
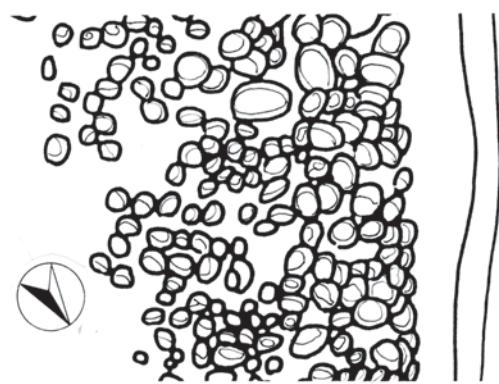
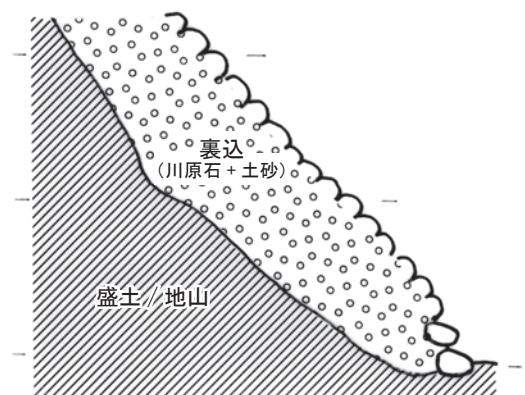


Fig. 27 蛇穴山古墳の葺石（1）

⑨ 三ツ寺 I 遺跡西辺第1張出部石垣

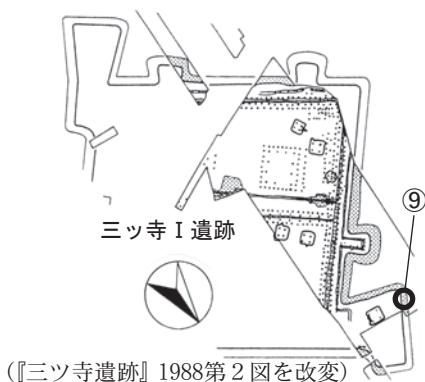


[平面図]

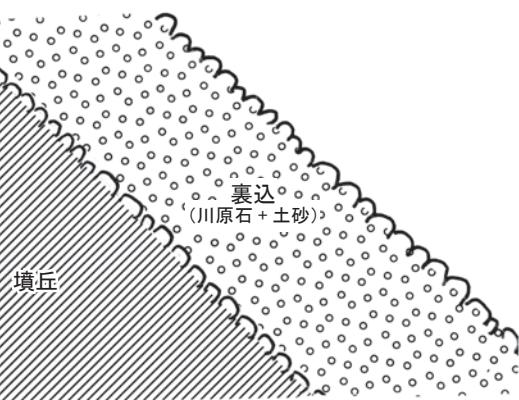
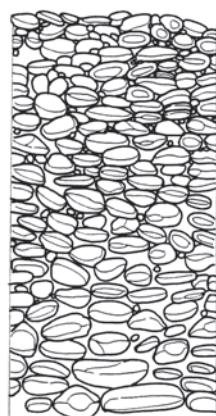


((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・
群馬県教育委員会1988『三ツ寺 I 遺跡』第78図を改変)

⑩ 王山古墳後円部葺石推定図

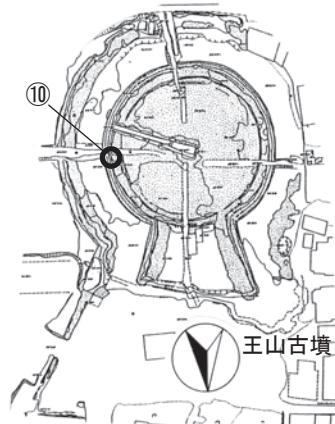


(『三ツ寺遺跡』1988第2図を改変)



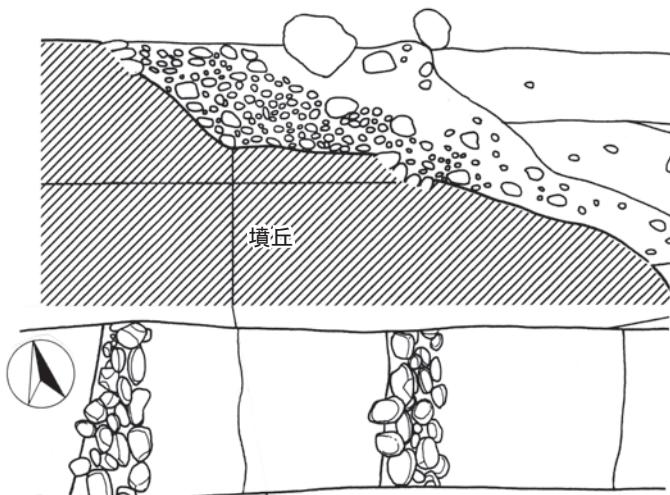
(写真をもとに描き起こした図)

⑪ 蛇穴山古墳9・10トレンチ填丘葺石

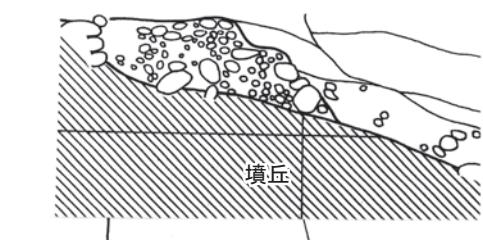


(松島栄治ほか1991を改変)

⑫ 蛇穴山古墳8トレンチ填丘葺石



[平面図]



[平面図]



Fig. 28 蛇穴山古墳の葺石 (2)

② 中堤内側の葺石 (Fig. 27)

中堤内側の葺石は後世になってから周濠を池に改変する際に掘り返され大きく破壊を受けたものと考えられる。それでも西側の4、11～13・20トレンチの5カ所に葺石が残されていたことは幸運であった。特に20トレンチでは、見事に90度に折れ曲がって施工されていることは当時の施工技術の精巧さを物語るものである。また、折れ点には大型の扁平円礫石材を揃えて使用していることも判明した。

内側葺石は外側葺石に比べ比較的選別された石が用いられる。その大きさは、10cm～30cm大の扁平な円礫であるが20cm大を主体に用いられている。

特に11トレンチでは10段近く残っていた。基部には比較的大きめの石を用いる傾向にある。積み方は横方向に扁平な側面を向けて互目積で積み上げる。水平方向には同じサイズの石を積んでいる傾向がある。コーナー部の20トレンチでは葺石の立ち上がり角度は50度～55度と比較的、急傾斜で積まれている。

③ 墳丘の葺石 (Fig. 28)

墳丘での葺石は7～9・11トレンチ、A～C・E・Fトレンチの9カ所で確認できた。いずれも裾部の調査のため墳丘の葺石については未確認である。裾部での葺石は2段構成をとるものと考えたが、Bトレンチや9トレンチで確認された裏込の実態が解明できていないため、確定ではない。葺石の用材は径20～50cm大の扁平円礫を互目積、水平方向を意識しながら積んでいる。

裾部の第1段目の葺石の基部の標高は、7トレンチが124.9m、8トレンチも124.9m、9トレンチが125.5m、11トレンチが125.0m前後である。地山面と盛土面の標高は8トレンチで126.04mであるので、第1段目は盛土成形ではなく地山を削り出して段構成としたものと考えられる。

第2段目の葺石の基部の標高は、7トレン

チが125.7m、8トレンチが125.7mと地山層との境界高126.04mであるため盛土層を被覆している葺石と考えられる。第1段目、第2段目が近接することから比較的に低い段であると思われる。おそらく7・8トレンチのセクションから想定すると10段前後の葺石と想定できる。

なお、石材は粗粒安山岩を主体となすが、砂岩や石英閃緑岩、ひん岩などのほか礫岩、頁岩、蛇紋岩などが混じっていた。この組成傾向はほとんどの葺石を通して認めることができた。数量の多寡や少量含む石材などの組成は多少のばらつきが認められるが、概ね古墳全体でも類似する傾向をもつものと予想される。入手先であるが、一般に粗粒安山岩は榛名山水系の河川で容易に採取できる。しかし、粗粒安山岩の占有率は半数程度であるため、この組成を有する河川として利根川を想定することができる。古墳が築かれる頃の利根川は広瀬川低地帯の前橋台地側を流下していたと考えられ、直線距離で数キロといえ、入手は比較的容易であったと考えられる。

8 葦石の裏込め

墳丘葺石を観察していて気が付いた点を記しておきたい。すでにBトレンチの項で記述しておいたのであるが平成19年度7・8・9・11トレンチからも葺石を覆うように砂礫層が検出された。トレンチ毎に詳しく観て行こう。

Bトレンチ（写真02）では葺石に覆い被さるように厚さ1m前後で砂礫層が堆積していた。この傾向は他のトレンチでも見られる。Fトレンチ（PL. 2-6）でも多量の砂礫層が葺石を覆いつくしている。また、Aトレンチ（PL. 1-5）でも攪乱が著しいが小円礫が多量に堆積している。

墳丘北側に設定した9トレンチでも葺石列を覆うように砂礫層が検出されている（写真03）。この葺石基部はやや大型の扁平円礫を長軸方向に据えて、奥は2～3段の石が



写真02 Bトレンチの葺石を覆う砂礫（西から）



写真03 9トレンチの葺石と砂礫（東から）



写真04 11トレンチ墳丘裾部の葺石と砂礫(西から)

残っていた。大型の扁平な円礫の配置は、BトレンチやFトレンチでも認められる。9トレンチでは基部に使用したものと考えたが、BやFトレンチは上面に使われた状況である。

写真04は西側の11トレンチ墳丘裾の末端部の砂礫層の出土状態である。写真に見られる大型円礫は葺石を形成していた礫が流出したものと思われる。砂礫層は40～50cmの厚さで充填された状態で検出された。

ここで県内外の古墳で、葺石裏込めに砂礫を使用する事例を検索してみた。その結果、多野藤岡、甘楽富岡地域と神流川を越えた児玉地域の古墳に見出すことができた(Fig. 29)。

- 1 富岡5号古墳（6世紀前半）
外山和夫 1972 群馬県立博物館
- 2 中原II遺跡1号古墳（6世紀後半）
小根澤雪絵 2004 吉井町教育委員会
- 3 東シメ木・多胡松原遺跡5号墳（6世紀後半）
矢島浩 2005 吉井町教育委員会
- 4 富岡市しの塚古墳（7世紀前半）
杉山秀宏 1998 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 四軒在家3号墳（7世紀）
田村誠 1996 埼玉県児玉郡神川町教育委員会

1の事例は上段葺石が二重葺石構造で裏込めに砂礫層を充填している。東西断面の東側では外面葺石10段積み、高さ90cm、裏込めの厚さ20～30cmを測る。南北断面の北側では高さ170cm、裏込めの厚さは20～30cmである。外山によれば下段葺石も同様な構造であったことが推測されている。なお、基壇平坦面には中型円礫が敷かれ、その下部にも砂礫が用いられていた。

2は所謂「付け基壇」と呼ばれるものである。基壇平坦面に幅1m、高さ1m程度の所謂付け基壇を設置している。内側葺石と外側葺石の裏込めには砂礫層を充填する。また基壇平坦面に大型の円礫を敷き詰めるのは、富

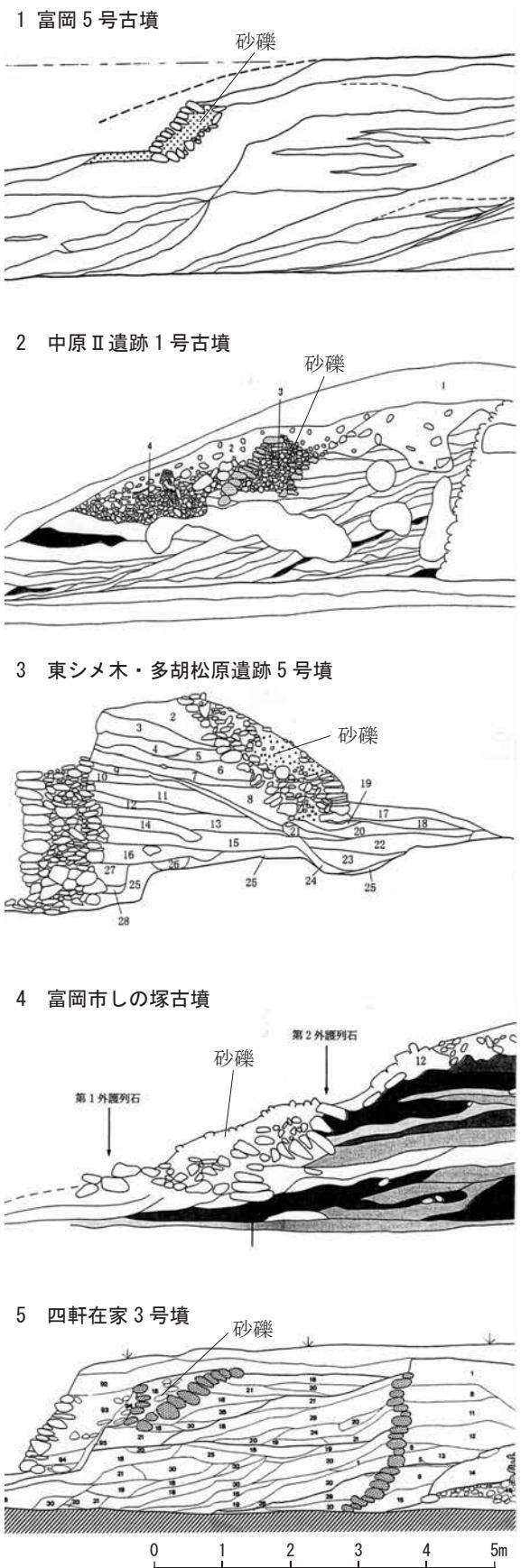


Fig. 29 砂礫使用の葺石裏込め

岡5号墳と同様な施工事例である。

3は控積み裏込被覆を覆うように高さ2.4mの砂礫による裏込が存在する。内側は裏込被覆面であるため、内側葺石とは異なるが、形状は内側葺石と類似するため同様な構成を取る。基壇面での裏込被覆と葺石の厚さは1.0mである。

4は墳丘内第1列石を有する葺石を多用する古墳である。墳丘第1外護列石と墳丘第2外護列石の間に砂礫による裏込めが入る。

5の四軒在家3号墳は富岡5号古墳と似た葺石構造を持つものである。

このように葺石に関連する砂礫層は「付け基壇」や「二重にめぐる葺石」と深く関連を持つものといえ裏込めの材料として用いられる。したがって蛇穴山古墳の墳丘に認められた砂礫層は葺石の裏込めとして用いられた可能性が極めて高いといえる。

ところで、昭和49年に調査された総社古墳群王山古墳は多量の川原石を使用した古墳として広く知られている。調査された王山古墳は、現在、前橋市大渡町に王山古墳公園として古墳は保存され、調査で検出された葺石は公開施設で露出展示され、常時見学可能である。写真05の葺石を参考にしながら、葺石の立面図を描き起した図がFig. 28-⑩である。20~30cm大の選別された川原石を使った互目積の葺石で構成されている。

王山古墳の葺石の構造は、松島1991で指摘されたように「二重もしくはそれ以上の葺石列が認められる」ことである。写真05の奥には内側の葺石列が存在するものと思われる。また、写真06の前方部から後円部を見た写真に写された葺石の断面には、裏込めには円礫と土砂が用いられていることが理解できる。

王山古墳は築瀬二子塚古墳や前二子古墳と並ぶ6世紀初頭の初期横穴式石室であるため、7世紀後半の蛇穴山古墳とは150年以上の隔たりがあるものの葺石の用い方に王山古墳での構築技術が脈々と総社古墳群内で受け



写真05 王山古墳上段後円部の二重葺石（東から）



写真06 王山古墳上段前方部の葺石と裏込め（北から）



写真07 三ツ寺 I 遺跡の裏込めを持つ石垣（南から）
((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・群馬県教育委員会
1988『三ツ寺 I 遺跡』より)

継がれてきた可能性も否定できない。

ここで、古墳とは異なるが、5世紀後半の居館遺構である三ツ寺 I 遺跡にも葺石（石垣と呼称）の裏込めが存在する。

三ツ寺 I 遺跡では、一辺55mの館の全周と北濠堤状遺構には葺石が築かれている。葺石は各部とも同じ構築方法をとり、高さもほぼ3mを測る。

葺石は濠底面から約20cm高いところを基礎面として積み上げている。裏込めは厚さ約80cmでシルト質土と川原石（円礫）を詰めている（Fig. 28-⑨）。

以上のように工法として裏込めを使用することや互目積の葺石を有することから王山古墳と三ツ寺 I 遺跡は共通性が看取されるが、三ツ寺 I 遺跡と関係が深いとみられる保渡田古墳群の八幡塚古墳では、石を積むのではなく貼っているのである。

三ツ寺 I 遺跡と王山古墳は、地域的にも隣接し Hr-FA 降下前後と年代的にも近接するため、三ツ寺 I 遺跡で培われた積石技術が王山古墳に導入された可能性は否定できない。さきの葺石裏込めに砂礫を用いる古墳は、いずれも三ツ寺 I 遺跡や王山古墳に後続するものである。詳しい検討を行っていないが、三ツ寺 I 遺跡や王山古墳を契機として、こういった裏込め技法が拡がっていった可能性も考えられる。

また 1 ~ 5 に例示した地域の古墳の特徴と



写真08 田口冠木遺跡 1号墳の石室控え積（北西から）

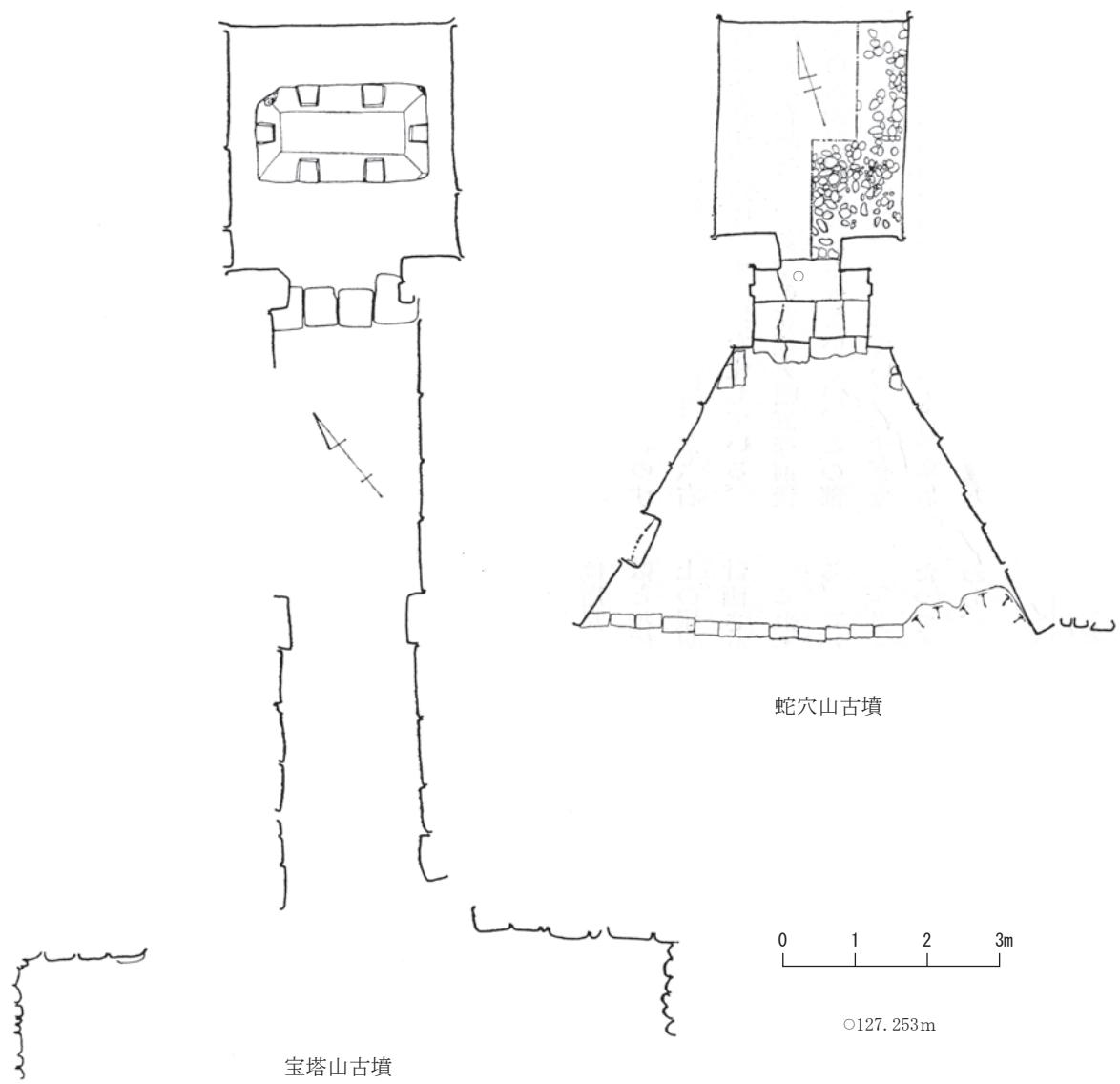


写真09 調査中の蛇穴山古墳の前庭部

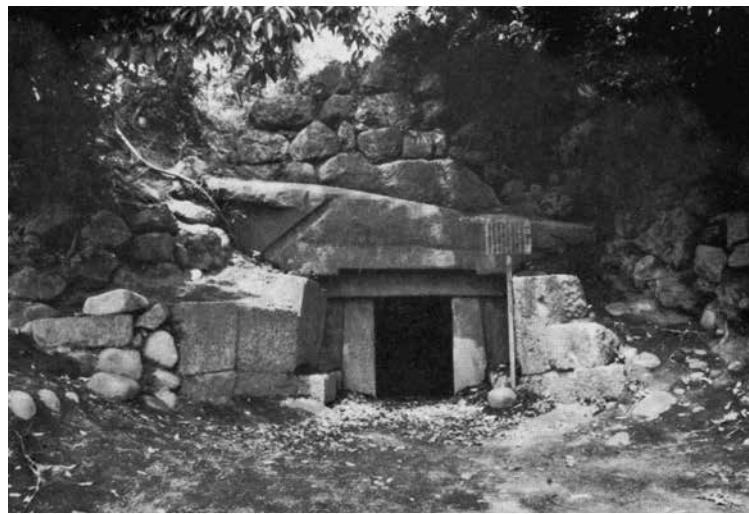


写真10 『総社史跡 1966』に掲載の蛇穴山古墳

Fig. 30 蛇穴山・宝塔山古墳の石室

いえる積石技法として「石室控え積」があげられる。「石室控え積」を有する石室造りには丁寧な基礎工事が伴う。豊富な川原石の供給がなければ成し得ないのであるが、鎌川や神流川のみならず利根川一帯にも「石室控え積」の技法が広く及んでいるのである。本地域でも田口町所在の6世紀前半の田口冠木遺跡1号墳では「石室控え積」と「付け基壇」を有する直径18.5mの円墳が調査されている。王山古墳については解体調査を行っていないが、「石室控え積」で造成された古墳の可能性が高い。

このように「二重葺石」や「石室控え積」といった墳丘構築は、榛名山東南麓の本地域でも多野藤岡、甘楽富岡、児玉地域との技術的交流があったことと考えられ、7世紀後半に建造された山王廃寺の創建で古墳文化から仏教文化的一大中核地として大きく発展していく。山上碑文（681(天武天皇10)年）や『上野国交替実録帳』（1030(長元3)年）に記された放光寺と山名や佐野地域との関連は、佐野屯倉や山上碑、法隆寺食封などに顯れ、より濃密関係で結ばれることになった。すでに、その下地が総社古墳群設立時から用意されていたことと想像に難くない。

9 石 室

1786(天明6)年に奈佐勝臈によって書かれた『山吹日記』の一文に蛇穴山古墳の記載がある。それは「此東の萬一町あまり隔てまた高き所のうへに觀世音の御堂あり。其下に是も南へ向て同じやうなる有。口の方をつくろひかへて弁財天を安置せり。この觀世音の御堂のはつれにやすらふ。」とある。この日記によれば、墳上に觀世音堂、石室の入口を改変して弁財天を祀っていたことがわかる。さらに周りを池にするため周濠部分にも手をいれて掘削を行った様子が今回の調査で判明した。石室前面部は『総社史跡1966』にみるよう何度も改変を受けた様子が写真から認めら

れる。そういう事情を含め、ここで蛇穴山古墳と宝塔山古墳の石室図面(Fig. 29)を比較していくつか気づいた点を列記しておきたい。

- ① 宝塔山古墳の奥室と蛇穴山古墳の玄室を比べた場合、大きさや形状が共通する。
- ② 玄門の床面に敷かれた粗粒安山岩製の板石の形状や大きさ、使用方法も共通する。
- ③ 蛇穴山古墳石室板石は前庭部に接する部分を打撃によって打ち欠いた痕跡がある。後世の加工と見て取れる。
- ④ 蛇穴山古墳玄門に接する東西の1段目壁石には奥に嵌込用の段が付けられている。これに2段目の壁石がきちんと嵌まっている。
- ⑤ 「ハ」の状に開く前庭部壁石は石室の造作に比べると材質や加工精度に見劣りがある。
- ⑥ 前庭部の粗粒安山岩製の切石列は明らかに後世、並べ直したものである。
- ⑦ 墳丘形状は周濠や中堤の形状から正方形となることが想定できる。仮に正方形の墳丘に現状の羨道を持たない石室プランを合わせることは石室前面が短くなってしまうため、墳丘プランに現状石室を組み込んでいくことはかなりの困難を伴うことと思われる。

ここでは、問題提起をさせていただき、今後、墳丘と石室の調査によって、造成当初のものであるか、後世改変を受けたものであるか解明の必要があり、現地での確認調査や文献等の調査により、結論を出せねばと考えている。

10 おわりに

今回の調査結果を踏まえると、蛇穴山古墳の外部は周濠、中堤、外周溝で構成される。これら外部施設は、北、東、西面で検出されていることから、全周していたことが考えられる。西側の外周溝、中堤ラインをもとに石

室主軸で折り返して算出した墳丘長が44mであり、周濠での全長が82mである。墳丘高は従来からの5mと変化はない。方位は、N-13°-Eに振れる。

今後も、墳丘形状の追究を目的とする継続調査を望みたい。公民館建設に伴う調査であつたため、公民館が設置される北西部分の確認調査が主体となつた調査であった。北西コーナーと対角線となる反対側の南東コーナーや北東コーナーの調査は形状、規模をより正確にするうえで必須である。機会を狙つて範囲確認を望むところである。

(2) 宝塔山古墳

1 はじめに

墳丘長66mの宝塔山古墳は、墳丘長56mの愛宕山古墳、44mの蛇穴山古墳を遥かに凌ぐ規模を誇る。周濠を含めた大きさでは、102mという数値は東国の終末期を飾るにふさわしい大古墳といえる。本墳も早くから開口され、石棺内やその他の副葬品は不明となっている。

ちなみに、平成24年6月に会津若松市のワシントンホテルで開催された『米山雲外先生を偲ぶ刀剣鑑賞会』では、切刃造刀の刃長57cm、全長71cmの両面研磨された宝塔山古墳出土という大刀が展示されていた。

古くは、江戸時代の寛政年間に記された山吹日記にも見えており、大正9年には福島武雄氏による石室実測図が作成されている。昭和に入って墳丘の測量が行われ、昭和31年1月にも内部構造の実測が実施されている。しかし、羨道入り口が埋没していたため昭和43年になって羨道部の発掘調査が行われ、昭和44年に石室前面部と前庭部の復元整備がおこなわれた。その概要については奈良文化財研究所刊行の整備事例集に紹介されている。

平成2年に国立歴史民俗博物館による墳丘と石室と石棺の測量・実測調査が実施された。

2 範囲確認調査

平成19年度

4トレンチ…東側中央の周濠の立ち上がりを確認。周濠内には、1108(天仁元)年浅間火山から噴出したAs-B層が底面近くに厚く堆積する。

14トレンチ…北東部の調査区。周濠の立ち上がりを確認。周濠内には、1108(天仁元)年浅間火山から噴出したAs-B層が底面近くに厚く堆積する。墳丘近くまで調査区は及んでるが、墳丘近くの大部分が破壊を受けており、情報は得られなかった。

15トレンチ…北東部周濠の調査区。周濠の立ち上がりを確認。周濠内には、As-B層が厚く堆積する。

17トレンチ…北東部の調査区。北側周濠の立ち上がりを確認。周濠内には、As-B層が厚く堆積する。

18トレンチ…北東部の調査区。北側周濠の立ち上がりを確認。周濠内には、As-B層が厚く堆積する。なお、墳丘に近づくにつれ堆積層が墳丘に向かって立ち上がる状態が観察できた。

平成21年度

宝塔山古墳23区…この調査区では北東隅を10m×10mの範囲で周濠の立ち上がり部分を検出し形状を観察した。さらに、コーナー部に2m×1mのテストピットを設定し、底面まで調査を行った。

3 周濠

周濠外側の立ち上がりを6ヶ所で確認できた。東側に3ヶ所、北方向に3ヶ所である。これによって北東隅は確定できるものとなつた。さらに18トレンチの墳丘近くの土層が墳丘に向かって緩く立ち上がる事が観察できたことから墳丘が近いと判断できた。その状況から鑑みて周濠幅を18mと想定した。なお、いずれのトレンチにおいても周濠の深さは0.5~0.7mであり、底面近くに1108(天仁元)年浅間火山から噴出されたAs-B層の純層が

堆積する。

4 墳丘

墳丘復元については、白石1990を全面的に援用して墳丘図を作成している。白石1990によれば従来2段築成とされていた墳丘について詳細な墳丘観察から3段築成として捉え直している。

以上の結果から宝塔山古墳の墳丘長は66mとなり、周濠を含めた規模は102mを測る。墳丘の高さは従来通り12mである。方位は、N-32°-Eに振れる。蛇穴山古墳で認められた周濠外部の中堤や外周溝の存在は認められなかった。

なお、今後、機会をとらえ北東コーナーの墳丘裾部と対角をなす南西コーナーの周濠部の確認調査と墳丘裾部を確定させる確認調査を望むところである。

5 おわりに

今回の調査によって宝塔山古墳と蛇穴山古墳はかなり接近して築造されたことが判明した。その距離は20mである。この距離は古墳造成にあたり、安全な作業スペースを確保する上からも限界の距離といえる。ここまで近接して、古墳を築造できるということは2古

墳の被葬者の深いつながりがあったことと想像に難くない。

宝塔山古墳が築造される時代は、古墳文化から仏教文化やがて律令時代へ変革しようとする時期、上毛野地域一帯を掌握する大豪族としての地位が確立された時期である。その象徴として、漆喰塗りの精緻かつ技巧を凝らした石室や墳丘を飾る仕掛けが造出されたものと思われる。いわば国を掌握する威儀の装置として、宝塔山古墳・蛇穴山古墳と大型方墳2基が並列して造墓されたのではないか。

主軸方向の違いは時の社会的規範を反映したものといえる。すなわち宝塔山古墳が東に32°振れるのに対して、蛇穴山古墳が13°東の振れである。これは、山王廃寺や上野国府などの大型建物群の軸方向が7世紀中葉を境に真北への指向性が強まってくることと軌を一にする状況である。近接する地点に墳丘を築造するが、北への指向性という社会的規範は遵守した結果であったといえよう。

なお、今回の一連の調査で宝塔山古墳については7世紀中葉ないし第3四半期、蛇穴山古墳について7世紀の第4四半期といった従来の編年基軸を修正すべき出土遺物の検出は認められなかった事も付記しておきたい。

参考文献

- 尾崎喜左雄 1954 「横穴式石室編年への一考察－主として石材の取扱方について－」『史学会報』5輯 群大史学会
総社町 1956 「史蹟及び文化財」『総社町誌』
尾崎喜左雄 1966 『横穴式古墳の研究』吉川弘文館
前橋市総社地区史跡愛存会 1966 『総社史跡』
前橋市教育委員会 1968 『国指定史跡 宝塔山古墳石室調査概報』
尾崎喜左雄 1971 『蛇穴山古墳』『前橋市史第1巻』
尾崎喜左雄 1971 『宝塔山古墳』『前橋市史第1巻』
群馬県立博物館 1972 『富岡5号墳』群馬県立博物館研究報告 第7集
前橋市教育委員会 1976 『史跡蛇穴山古墳調査概報』前橋市教育委員会
尾崎喜左雄 1977 『横穴式石室の基壇と所謂前庭』『上野国の古墳と文化』尾崎喜左雄著作集 第3巻
財団法人観光資源保護財団 1977 『群馬総社古墳群 東国古代文化の中心』財団法人 観光資源保護財団
松本浩一 1981 『蛇穴山古墳』『群馬県史資料編3 原始古代3古墳』群馬県
松本浩一 1981 『正円寺古墳』『群馬県史資料編3 原始古代3古墳』群馬県
石川正之介 1981 『宝塔山古墳』『群馬県史資料編3 原始古代3古墳』群馬県
尾崎喜左雄 1981 『築瀬二子塚古墳』『群馬県史資料編3 原始古代3古墳』群馬県
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988 『上野国分寺・尼寺中間地域』第3分冊
右島和夫 1985 『前橋市総社古墳群の形成過程とその画期』『群馬県史研究』22 群馬県史編さん委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・群馬県教育委員会 1988 『三ツ寺I遺跡』

- 右島和夫 1988 「保渡田3古墳について」『三ツ寺I遺跡』群馬県教育委員会
- 右島和夫 1990 「古墳から見た五・六世紀の上野地域」『古代文化』47-2
- 白石太一郎 1990 『関東地方における終末期古墳の研究』国立歴史民俗博物館考古研究部
- 松島栄治・中村富夫・右島和夫 1991 「群馬県前橋市王山古墳の調査」『第57回総会研究発表要旨』日本考古学協会
- 右島和夫 1992 「古墳から見た6、7世紀の上野地域」『国立歴史民俗博物館研究報告』44 国立歴史民俗博物館
- 大澤伸啓 1993 「葺石について」『栃木県考古学会誌』第15集 栃木県考古学会
- 右島和夫 1994 『東国古墳時代の研究』学生社
- 神川町教育委員会 1996 『青柳古墳群 四軒在家支群』埼玉県神川町教育委員会
- 神川町教育委員会 1997 『青柳古墳群 城戸野・海老ヶ久保・十二ヶ谷戸・二ノ宮支群』埼玉県神川町教育委員会
- 加部二生 2001 「群馬県地域における古墳築造過程の一考察—所謂「付け基壇」構造に有する古墳についてー」『考古聚英』梅澤重昭先生退官記念論文集
- 青木敬 2003 「第6章 葦石構築法とその変化」『古墳築造の研究—墳丘からみた古墳の地域性ー』六一書房
- 右島和夫・羽生田純之・曹永鉉・吉井秀夫 2003 『古墳構築の復元的研究』雄山閣
- 吉井町教育委員会 2004 『長根遺跡群VIII中原II遺跡』
- 吉井町教育委員会 2005 『東シメ木・多胡松原遺跡発掘調査報告書』
- 前橋市教育委員会 2005 『大室古墳群—史跡前二子古墳・中二子古墳・後二子古墳ならびに小古墳保存整備事業報告書ー』
- 前橋市教育委員会 2005 『17田口冠木遺跡(16B11)』『文化財調査報告書』第35集
- 独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 2005 『奈良山発掘調査報告I—石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査ー』奈良文化財研究所
- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2005 『武蔵府中熊野神社古墳調査概報』学生社
- 前橋市教育委員会 2008 『蛇穴山古墳第1次試掘調査の概要』『年報』第38集
- 前橋市教育委員会 2008 『蛇穴山古墳・蛇穴山古墳第2次試掘調査の概要』『年報』第38集
- 青木敬 2008 「群馬県下における後・終末期古墳の墳丘構築法—山名伊勢塚古墳と周辺の事例を中心としてー」『山名伊勢塚古墳』高崎市教育委員会
- 杉山秀宏 2008 「横穴式石室古墳の構築と埋葬の復元—富岡市しの塚古墳例よりー」『群馬県立歴史博物館紀要』第29号
- 前原豊 2009 『東国大豪族の威勢・大室古墳群』新泉社
- 奈良市教育委員会 2009 『帶解黄金塚古墳』奈良市教育委員会
- 青木敬 2009 「古墳の築造企画と構築技術」『季刊考古学』106 雄山閣
- 前橋市教育委員会 2010 『総社町屋敷南遺跡』年報第39集
- 右島和夫 2010 「利根川中流域における6世紀後半の前方後円墳」『阿弥陀古墳』伊勢崎市教育委員会

Tab. 2 蛇穴山古墳と宝塔山古墳の調査経過

No.	蛇 穴 山 古 墓	宝 塔 山 古 墓
1		昭和43(1968) 年3月4日～3月12日 石室と前庭部の検出。 石棺の八角形穴の蓋石出土。
2	昭和50(1975) 年8月1日～8月16日 A～Fトレチの調査。 石室と前庭部実測・方墳と判明。	
3		平成2(1989) 年2月22日～3月13日 国立歴史民俗博物館による調査。 墳丘測量と石室実測。
4	平成19(2007) 年10月29日～10月31日 1～6トレチの調査。周濠北西部の調査。 中堤の発見。中堤内外に葺石。	平成19(2007) 年10月29日～10月31日 4トレチの調査。周濠北東部の調査。
5	平成20(2008) 年2月6日～2月16日 7～13トレチで東西の周濠調査。 プール跡地の調査。	平成20(2008) 年2月6日～2月16日 14・15・17・18トレチで北東周濠の確認。
6	平成21(2009) 年6月8日～7月28日 総社町屋敷南I遺跡。 20～22トレチの調査。	平成21(2009) 年6月8日～7月28日 総社町屋敷南I遺跡。 北東拡張区(23区)の調査。

第2節 蛇穴山古墳外周溝出土の須恵器について

はじめに

Fig. 31-1 は、粘土紐を半円状に貼付した把手を持つ須恵器瓶の肩部破片である。把手が肩部の円周方向に対して直行して貼付されていることから、提瓶のような器種とは考えられず、肩部に一方所だけ把手が貼付される把手付瓶と見てよいであろう。灰色で硬質に焼成されており、灰白色に発色した自然釉が掛かっている。胎土には形の一定しない白色粒や石英、片岩様の細粒を含み、緻密さの弱い全体にざっくりとした感じのするものである。

1 群馬県内の出土例

こうした把手付瓶の出土例はあまり多いとは言えず、群馬県内の例としては、前橋市（旧粕川村）の宇通遺跡の昭和62年度調査礎石建物A（文献1）、藤岡市の下日野金井窯跡f1地点灰原（文献2）、前橋市の荒砥洗橋遺跡74号住居（文献3）出土遺物中に、4例を見出すことができた。

宇通遺跡出土の把手付瓶（2）は、頸部から高台部までの形状が分る資料で、把手は肩部でも頸部寄りに貼付されている。資料を直接に観察することはできなかったが、写真で見る限りやや軟質な焼成で器面には剥落が認められる。礎石建物Aの基壇中央部及び雨落ち溝からの出土と報告されている他の資料から想定される年代は、10世紀後半から11世紀代と幅があるが、焼成の状況からみてもこの時間幅の中に収まるものとみて矛盾しないと思われる。

下日野金井窯跡群f1地点灰原では、2点の把手付瓶（3・4）が出土している。3は把手部を欠失しているが、肩に1力所だけに貼付されていることが確実で、頸部より上に焼き歪みによる亀裂が入っているが、器形全

体が捉えられる資料である。色調は暗灰色を呈し、緻密な胎土で硬質に焼成され、結晶片岩や石英粒の含有量は比較的少ない。4は頸部より上位と胴部下半を欠失しているが、3と同器形と考えられる資料である。この2点が出土したf1地点灰原は、SY-12・13号窯の南側から検出されたもので、両窯跡の焼き損じが混じっていることは容易に想定される。報告されている製品は、総じて9世紀後半と見て良いものが主体であることから、当該資料もほぼ同時期とすることができよう。

荒砥洗橋遺跡74号住居の把手付瓶（5）は、胴部の張りが比較的弱くやや長胴ぎみの器形で、頸部から上が欠失しているが長頸で有段の口縁部が付くものと考えられる。胴部内外面にロクロ整形痕を残し、胴部下半には回転ヘラ削りはされておらず、底部外縁に低めの高台が貼付されている。焼成はあまく灰白色に焼成されている。資料そのものに時期を特定する根拠はないが、住居内で共伴する椀などの年代観から9世紀後半と考えられる。

2 県外の消費遺跡と生産遺跡の出土例

県外の出土例を詳細に当たることはできなかつたが、消費遺跡と生産遺跡での出土例をいくつか見出すことができた。

① 消費遺跡

消費遺跡では、宮城県の矢本横穴墓群50号墓（文献4）から1点（6）出土していることが確認できた。この把手付瓶は、羨道玄門寄りの壁際に在地産の土師器杯、湖西産須恵器平瓶などと共に出土したものである。短頸壺に似た器形の胴部に細身の口縁が付き、肩に1力所把手が付けられている。胎土や自然釉の状況から愛知県猿投窯産の製品が搬入されたもので、NN-32号窯段階に位置づけられているものであることから、8世紀中頃から後半の時期とみられる。

平城京左京一条三坊（文献5）SD650Bから出土した把手付瓶（7）は、口縁部が欠失

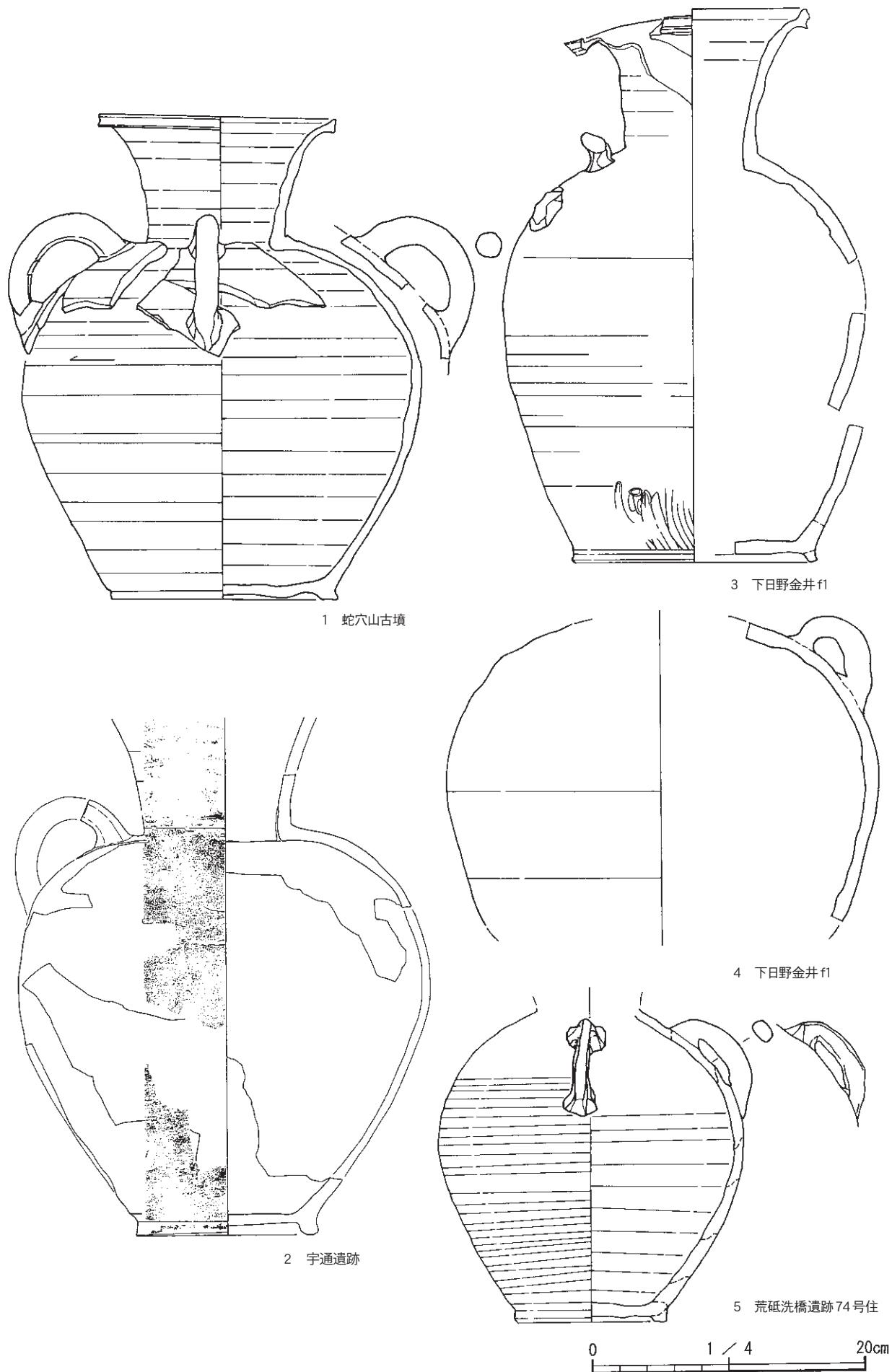


Fig. 31 須恵器把手付瓶集成図（1）

しているが肩にやや張りのある長頸瓶であり、猿投産と見られる資料である。SD650BからはK-90号窯式段階の灰釉陶器なども共伴しており、9世紀中頃から後半に位置づけられるものと考えられる。

また、平城宮内裏北外郭の調査（文献6）で、SE715から出土した土器群に、1点の把手付瓶（8）が含まれていた。この瓶は頸部が欠失しているが、球形の胴部に細身の頸が付く器形と考えられ、猿投産とされている資料である。SE715は、平城上皇が死去した頃に埋没した井戸と考えられており、上皇の没年である824（天長元）年を定点としてそれ以前の年代が想定できよう。

② 生産遺跡

生産遺跡での出土例では、愛知県の猿投山西南麓古窯跡群の黒笛40・44・89号窯と二川窯跡群の苗畠1・5・6号窯、大沢A-2号窯跡灰原の他に、明蓮1・4号窯跡、七曲1号窯跡、吉兼1号窯跡、姥子窯跡、岐阜県の北丘25号窯跡、東京都の南多摩窯跡群のG6号窯跡灰原、G25E灰原、G36A・B・C号窯跡灰原、G47D灰原の出土資料中に類例を見出すことができた。

黒笛40号窯跡（文献7）では把手部が3点（9～11）、黒笛89号窯跡（文献7）では把手の付いた胴部破片が1点（12）出土している。いずれも破片資料であるため全体像は判然としないが、肩の張りの弱い器形であろうと思われる。黒笛40号窯跡の資料は、NN-32号窯式とO-10号窯式の中間的様相とされていることから、8世紀後半でもやや下った年代が想定できる。

黒笛89号窯跡では須恵器の他に灰釉陶器や緑釉陶器の素地生産もしていたらしく、K-90号窯式に位置づけられることから9世紀中頃から後半の時期が想定されている。黒笛44号窯跡（文献8）では、把手の破片が2点（13・14）出土しているが、把手付瓶の把手と見てよいであろう。

黒笛44号窯跡は、NN-32号窯式段階からI G-78号窯式段階まで継続する長期操業窯で、O-10号窯式段階に主体的生産があつたとされることから、出土資料の多くは8世紀末から9世紀初頭頃を想定することができる。

二川窯跡群の苗畠1号窯跡（文献9）では、全体形の分かる資料が2点（15・16）と胴部上半の資料2点（17・18）の4点が出土している。肩に丸みのある器形で、有段の口縁部を有する長頸瓶である。

他にも苗畠5号窯跡（文献10）で5点（19～23）、苗畠6号窯跡（文献10）で1点（24）、大沢A-2号窯跡灰原（文献9）で1点（25）、類似する器形の把手付瓶が出土している。苗畠1号窯跡は、K-90号窯式～O-53号窯式に位置づけられているが、出土資料の多くはK-90号窯式の時間幅に納まるとしていることから、9世紀中頃から後半と考えられる。苗畠5号窯跡は、O-53号窯式の中頃～後半とされており、O-53号窯式の時期がほぼ10世紀前半とされていることから、10世紀前半でも中頃寄りの時期が想定され、苗畠6号窯跡と大沢A-2号窯跡はO-53号窯式～H-72号窯式前半とされていることから、10世紀中頃と考えられる。

明蓮1号窯跡（文献11）では把手の破片が1点（26）、4号窯跡（文献11）で把手の破片2点（27・28）と、把手の貼付された胴部破片が1点（29）出土している。明蓮窯跡は、猿投窯跡群の黒笛地区東南端に位置する窯跡で、1号窯跡がO-10号窯式段階と考えられていることから、8世紀末～9世紀初頭の時期が想定できる。また、4号窯跡は1号窯跡と同様にO-10号窯式に相当するがやや古く位置づけられていることから8世紀末と考えられる。

七曲1号窯跡（文献10）および吉兼1号窯跡（文献12）でも把手の破片がそれぞれ1点（30・31）出土している。これらの窯跡では、K-14窯式段階の灰釉陶器と須恵器が併焼さ

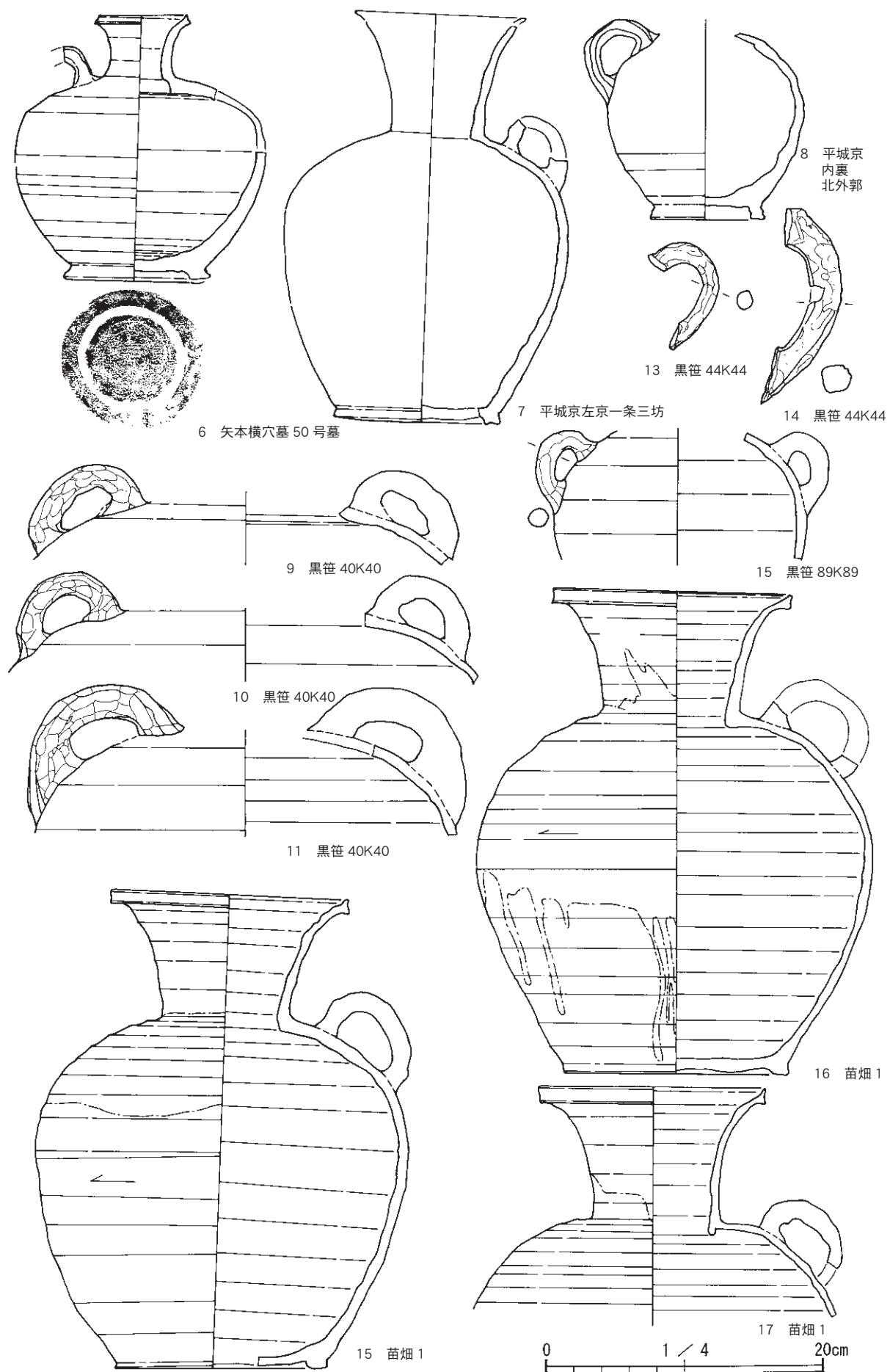


Fig. 32 須恵器把手付瓶集成図 (2)

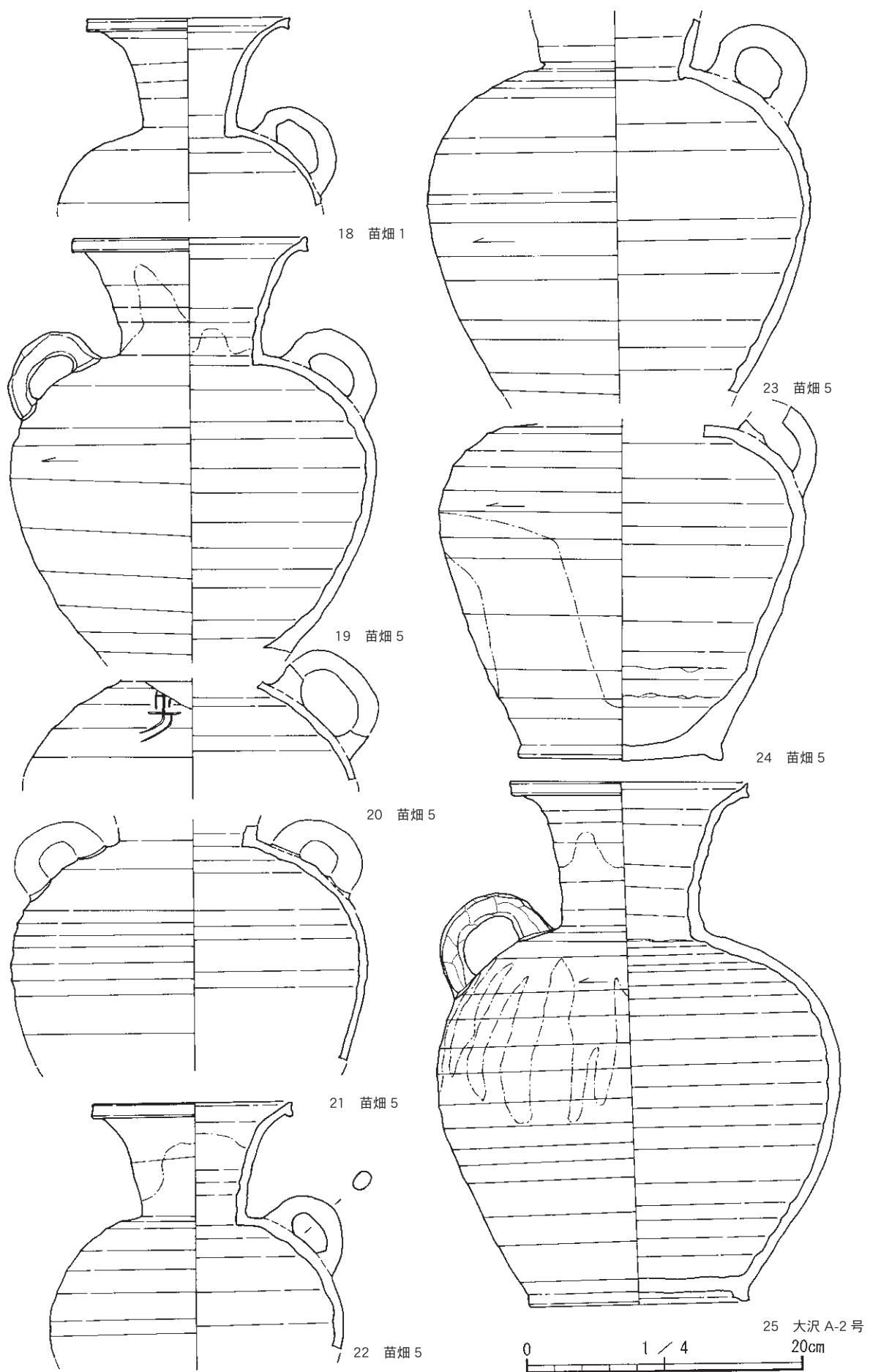


Fig. 33 須恵器把手付瓶集成図 (3)

れていることから、9世紀前半の時期が想定できよう。

姥子窯跡（文献13）では、胴部の張りが弱く、肩部に強い屈曲のある器形の灰釉陶器の把手付瓶が1点（32）出土している。この窯跡の製品は、椀・皿の特徴からO-53号窯式後半に位置づけられており、10世紀中頃とみることができる。

岐阜県の北丘25号窯跡（文献14）では、把手部破片3点（図化されているのは33・34の2点）が出土しており、緑褐色の釉が頸部外面下半から胴部に掛けられた灰釉陶器の瓶と、胎土・釉調が類似することから同一個体としている。しかし、瓶と直接的な接合部分があるわけではないことから、把手付瓶3個体分の把手と見たほうが良いのではないだろうか。この窯跡は、光ヶ丘1号窯式段階とされており、把手付瓶は9世紀後半の資料とみて良いであろう。

南多摩窯跡群ではG25E灰原（文献15）で2点（35・36）、G6号窯跡灰原（文献16）およびG36A・B・C号窯跡灰原（文献15）で各1点（37・38）、G47D灰原（文献17）で1点（39）の把手付瓶の出土例を確認した。いずれも器形全体を窺うことができる資料であり、南多摩窯跡群では瓶Bと分類されているものである。底部径がやや小さい傾向はあるものの、苗畠1号窯跡の出土例に近い器形である。G6号窯跡・G36号窯跡は、南多摩編年におけるG5号窯式の範疇で捉えられており、これらの灰原出土資料についても10世紀前半に位置づけられる。また、G25号窯跡は、10世紀を前後する時期の標識窯であり、灰原出土資料も同時期と見られる。また、G47D灰原出土の把手付瓶についてもG6号窯跡灰原出土の把手付瓶と器形に大きな違いが捉えられないことから、ほぼ10世紀前半に位置づけられるものと考えられる。

この他にも京都府の長岡京SD36501（40）や愛知県の梅坪遺跡SB325（41）、平城京右

京三条三坊SE129（42）（文献18）でも比較的古い段階の把手付瓶が出土しているようであるが、詳細に検討することはできなかった。

3 把手付瓶について

以上のように、把手付瓶の出土例は、丹念に当たれば事例が増えていくことは明らかであるが、重要なのは把手の付かない長頸瓶などと比較して出土例が極めて少ないとある。これは、本来生産量が少ない器種であったことを端的に示していると考えられる。窯跡出土事例から長頸瓶の中の把手付の割合を見ると、二川窯跡群の苗畠1号窯跡では37点報告されている長頸瓶のうちの4点、大沢A-2号窯跡では灰原出土も含めて61点ほど報告されている長頸瓶のうちの1点が、把手付きという結果である。この数字が生産の比率を正しく反映したものとは言えないが、生産量が少なかったことは容易に想像できよう。

一方、生産量が少ないにもかかわらず、今回確認できたものだけで見ても、8世紀後半から10世紀中頃までの比較的長期に亘って生産された器種であることがわかる。しかし、把手付瓶が独立した器種として長期に存続したと見るよりは、長頸瓶の亜種として需要に応じて少量の製品に把手が付加されたと見たほうがより実態を捉えているのではないだろうか。このことは、窯跡出土資料において同時焼成された長頸瓶と把手付瓶で器形や大きさが共通していることからも明らかである。把手貼付の意味について説得性のある説明を用意できていないが、把手に瓶を持ち上げるに十分な強度があったか疑わしく、機能的に必要なものであれば同器形の長頸瓶に把手が付かないことを説明できない。したがって、装飾性を求めたと見るのが理解しやすいのであるが、用途の違いや使用する場面の違いなども視野に入れて、消費地における出土事例を丹念に当たって検討する必要があろう。

把手付瓶の生産については、比較的古い段

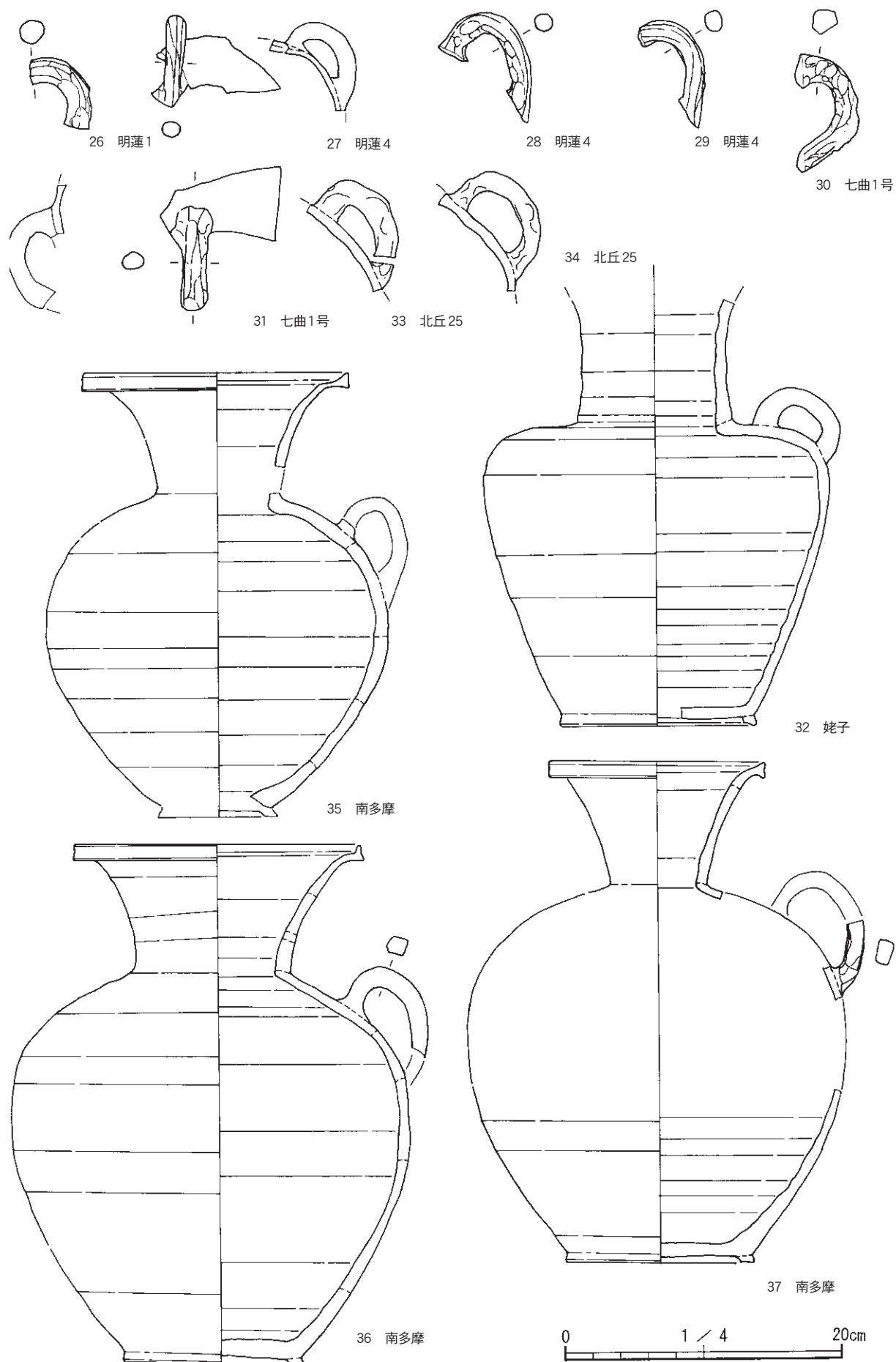
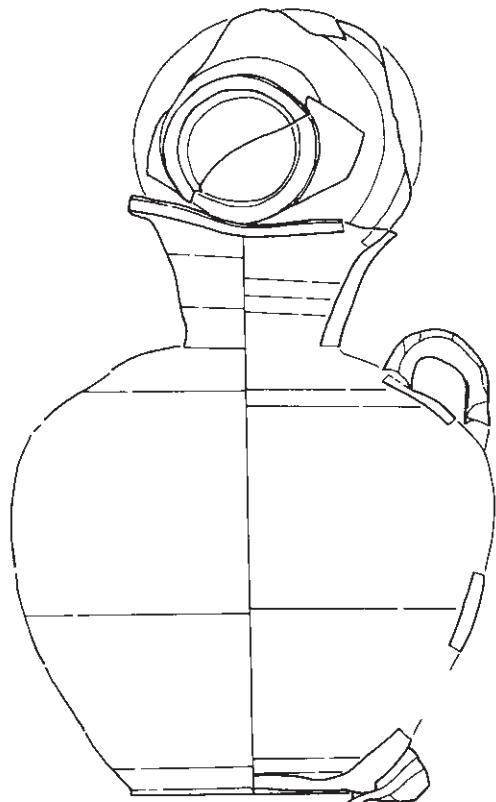
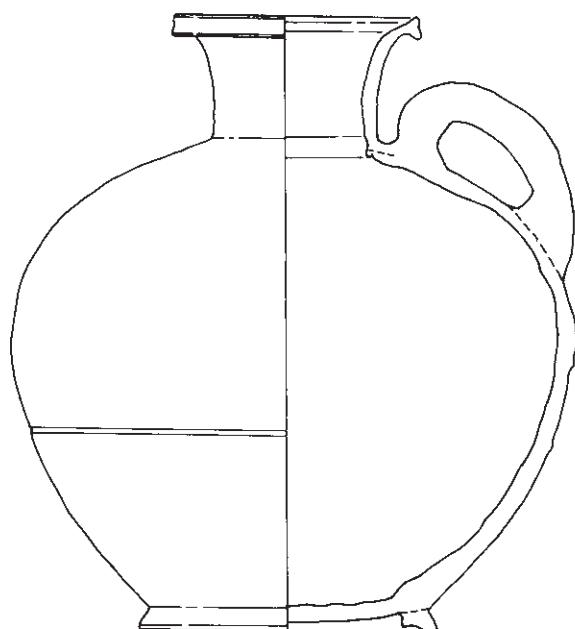


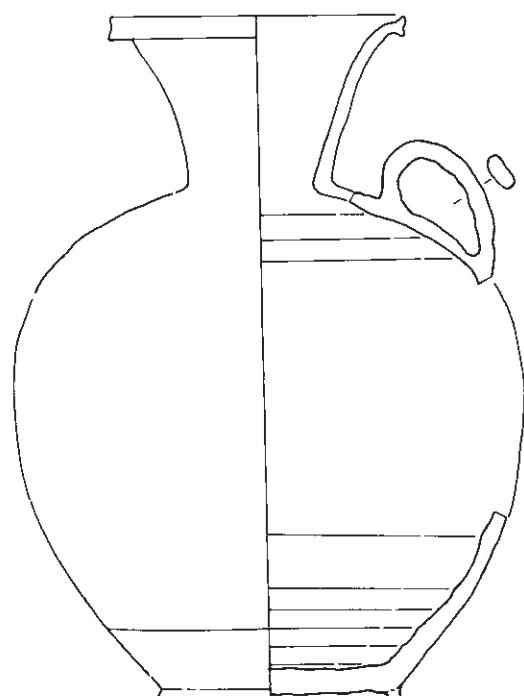
Fig. 34 須恵器把手付瓶集成図 (4)



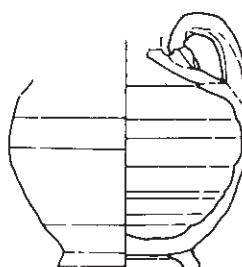
38 南多摩



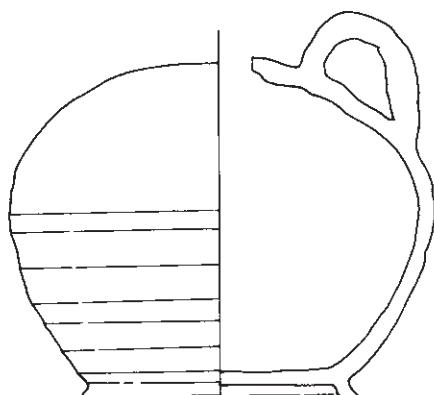
40 長岡京



39 南多摩



41 梅津



42 平城京右京三条三坊

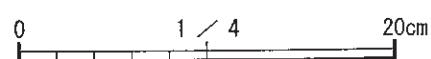
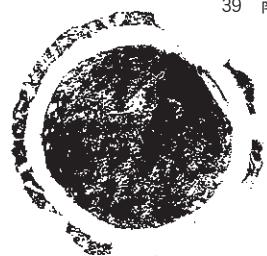


Fig. 35 須恵器把手付瓶集成図 (5)

階の資料と考えられる矢本横穴墓や平城京出土の資料は、愛知県の猿投窯の製品と見られており、生産遺跡の例でも黒 笹40号窯跡など複数の窯跡で8世紀後半から9世紀後半の生産が確認されている。また、同様に愛知県の二川窯跡群においても9世紀後半～10世紀中頃までの継続的な生産が確認でき、また、岐阜県の北丘25号窯でも9世紀後半段階の生産が確認できる。他地域の窯跡を網羅的に調べた上で結論ではないが、東海地方の諸窯が先駆的に採用し、主体的な生産を行ったのではないだろうか。

一方、群馬県においては8世紀代の窯跡での生産は確認できないが、9世紀後半の窯では焼成されていたことが確認された。また、埼玉県の末野遺跡東側灰原跡（文献19）出土資料の中にも、把手付瓶の破片と思われる資料が1点あり、東京都の南多摩窯跡群でも10世紀前半段階には複数窯跡での生産が確認されることから、遅くとも9世紀後半以降には各地の窯においても一定量の生産が行われたものと考えられる。これまで取り上げてきた把手付瓶は、時期的な器形の変異はあるものの、基本的に高台付の長頸瓶の肩部に丸棒状の粘土を半円状に曲げた把手を1力所貼付し、その把手に面取りをしないことなど共通していることから、各地域において独自に成立した器種とは考えにくい。前述のように基本的に東海地域で成立した把手付瓶が群馬県

などでも採用されたものと考えられるが、灰釉陶器の1器種として影響を受けた可能性が高いのではなだろうか。

4 おわりに

当遺跡の把手付瓶は、胎土や自然釉の雰囲気から猿投産とは考えられないため、県内で生産の確認できた下日野金井窯跡 f 1 灰原の資料と比較をしてみた。しかし、下日野金井窯跡 f 1 灰原の製品とは胎土・焼成とともに明らかに異なっており、少なくとも下日野金井窯跡で生産されたものとは考えにくい。また、末野窯跡の製品とされている資料との比較でも、胎土・焼成とともに違っているように感じた。

時期については、出土資料が破片で共伴する資料もないため判断しがたいが、1の想定図に妥当性があるならば、モデルとした苗畠1号窯の時期である9世紀後半頃の可能性がある。仮に矢本横穴墓群50号墓の資料により近い器形を想定したとしても、8世紀中頃より古くなるとは考えられず、まして、矢本横穴墓の資料よりは肩の張りが弱いと思えるので、より時期的に下らせて9世紀代の資料とした方が良いのではないだろうか。したがって、蛇穴山古墳の築造された7世紀末からは最短でも半世紀以上、おそらく1世紀以上の時間を経た後に古墳にもたらされたと考えるべきであろう。

【引用文献】

- 1 『宇通遺跡』 1991 粕川村教育委員会
- 2 『G 1 藤岡市下日野金井窯跡群、G 4 金山下遺跡・金山下古墳群、G 3 平井詰城』 2005 藤岡市教育委員会
- 3 『荒砥洗橋遺跡荒砥宮西遺跡』 1989 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 4 『矢本横穴墓群 I』 2008 東松島市教育委員会
- 5 『平城宮発掘調査報告VI』 1974 奈良国立文化財研究所
- 6 『平城宮発掘調査報告VII』 1976 奈良国立文化財研究所
- 7 『黒 笹40・89号古窯跡黒 笹G 2号古窯跡立楠古窯跡』 1994 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 8 『黒 笹44号窯・北畑遺跡発掘調査報告書』 1995 三好町教育委員会
- 9 『二川古窯址群（II）』 2002 豊橋市教育委員会
- 10 『二川古窯址群（I）』 2000 豊橋市教育委員会
- 11 『明蓮1～4号窯跡 七曲1号窯跡』 2007 豊田市教育委員会
- 12 『吉兼1号古窯跡・兼近1号古窯跡』 2005 豊田市教育委員会
- 13 『姥子古窯跡発掘調査報告書』 1994 豊明市教育委員会

- 14 『北丘25号窯・26号窯発掘調査報告書』 1984 多治見市教育委員会
- 15 『南多摩窯跡群』 1992 東京造形大学宇津貴校地内埋蔵文化財発掘調査団
- 16 『南多摩窯跡群 I』 1997 八王子市南部地区遺跡調査会
- 17 『南多摩窯跡群IV』 2001 八王子市南部地区遺跡調査会
- 18 『須恵器生産の出現から消滅』 2001 東海土器研究会
- 19 『末野遺跡 II』 1999 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

【参考文献】

- 1 『都城の土器集成 II』 1992 古代の土器研究会
- 2 『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（I）』 1980 愛知県教育委員会
- 3 『愛知県古窯跡群分布調査報告（町）』 1983 愛知県教育委員会

第3節 総社町屋敷南遺跡の 古墳時代後期の集落について はじめに

総社町屋敷南遺では6世紀第3四半期の住居跡が検出された。

本遺跡は総社古墳群中にあり、宝塔山古墳や蛇穴山古墳に隣接することから、本稿では、総社町屋敷南遺跡の調査成果を起点として、総社地区における古墳時代後期の集落の様相について簡単にまとめたい。

1 総社町屋敷南遺跡の住居跡について

総社町屋敷南遺跡で検出された住居跡については、H-2号住居跡が、一辺が約6mで他の住居跡よりも規模が大きく、東壁から北壁へとカマドの作り直しを行っている以外は、すべての一辺が3mから4mの規模で東壁および南東隅にカマドを設けている。出土品についても各住居で量にばらつきはあるものの土師器壺や甕のほか菰編石が出土しているのみで特殊な遺物は出土していない。これらのことから、H-2号住居跡は規模が大きいという特徴をもつが、これらの住居は特殊な住居とは考えにくい。

2 総社町屋敷南遺跡周辺の地理的環境

総社町屋敷南遺跡の立地については本報告書の第1章第2節に詳しいが、概ね前橋台地から榛名山麓地形へと移行する付近にある。遺跡周辺には大小多くの河川が流れるが、遺跡の東を現利根川が南流するほか、牛池川、八幡川、牛王頭川などの利根川の支流が北西から南東に向かって流れる。総社町屋敷南遺跡は、北を牛王頭川、南を八幡川に挟まれた山麓地形上に位置し、総社古墳群はもとより、総社地区の大部分はこの二つの川に挟まれた範囲内に位置する。なお、山王廃寺の存在する山王地区については、同じ総社地区に属するものの、八幡川の南側となることから、そうした点では総社古

墳群とは立地が異なる。

3 総社町屋敷南遺跡周辺の古墳時代後期の 集落について

総社地区は総社古墳群のほか、山王廃寺、総社城跡など前橋市内でも埋蔵文化財が豊富な地域であるが、隣接する元総社地区や清里地区と比較して発掘調査事例は少ない。こうした状況下ではあるが、牛王頭川と八幡川の間では総社町屋敷南遺跡のほか、高井桃ノ木遺跡、総社向畠遺跡、大屋敷遺跡、村東遺跡、総社村東02遺跡で6世紀代の住居跡が検出されている。

高井桃ノ木遺跡は牛王頭川と八幡川との中間点付近に位置し、総社古墳群最西の総社二子山古墳からは北西へ約800m離れている。発掘調査では6世紀から10世紀にかけての住居跡が検出されたが、そのうち6世紀後半の住居跡は9軒検出され、密集して分布していることから、古墳時代後期に集落が形成されていたと考えられる。

総社向畠遺跡No.1は牛王頭川右岸に位置し、総社二子山古墳からは北へ約600m離れた地点に位置する。発掘調査では6世紀前半の住居跡が1軒検出されている。

大屋敷遺跡は八幡川左岸で川に面して立地し、総社古墳群との位置関係では宝塔山古墳より南西へ約400m離れている。6度に亘る発掘調査により4世紀から10世紀にかけて300軒を超える住居跡が検出された。そのうち6世紀後半に係る住居が33軒検出され、牛王頭川と八幡川の間では検出された住居数が一番多い。なお、大屋敷遺跡の西には村東遺跡と総社村東02遺跡が存在しているが、村東遺跡では6世紀後半の住居が少なくとも1軒、総社村東02遺跡では6世紀中頃の住居跡が1軒それぞれ検出されている。両遺跡の位置から、大屋敷遺跡と同一の集落を形成していたと推定される。

大屋敷遺跡については、検出された住居の軒数が多いだけでなく住居跡から特徴的な遺



1. 総社町屋敷南遺跡 2. 高井桃ノ木遺跡 3. 総社向畠遺跡No.2 4. 大屋敷遺跡 5. 総社村東 02 遺跡
 6. 村東遺跡 7. 遠見山古墳 8. 王山古墳 9. 総社二子山古墳 10. 愛宕山古墳 11. 宝塔山古墳
 12. 蛇穴山古墳 13. 山王廃寺

Fig.36 総社町屋敷南遺跡周辺の古墳時代後期の集落

物が出土している点でも特筆される。まず、高崎市三ツ寺Ⅰ遺跡から出土した大型の土師器高壺「三ツ寺型高壺」の破片が6世紀初頭の住居跡から出土したほか、須恵器高壺形器台の破片が6世紀前半の住居跡から、高崎市綿貫觀音山古墳出土品にその類似品が求められる須恵器台付長頸壺が6世紀半ばから後半にかけての住居跡から、それぞれ出土している。その他に、最終工程段階と考えられる頁岩製石製模造品が多量に出土した6世紀前半の住居跡も存在する。大屋敷遺跡では溝や柵列などの区画施設が検出されなかつたが、豪族居館や大型古墳から出土するような特殊な遺物が出土することから豪族居館の存在も想定できる。

以上、午王頭川と八幡川の間に形成された6世紀代の住居が検出された遺跡の状況を概観した。これらの遺跡のうち、大屋敷遺跡は総社古墳群の近傍に位置し、住居跡の軒数や出土品から6世紀代を通して重要な集落であったことが推定される。それ以外では高井桃ノ木遺跡付近で6世紀代の集落が認められるのみで、午王頭川と八幡川の間は、古墳時代後期の住居の分布は希薄であると考えられる。こうした傾向の中で、総社町屋敷南遺跡で住居跡が4軒検出されたのは特異である。これら古墳時代後期の遺跡のうち、総社町屋敷南遺跡から距離的に近い遺跡としては、直線で約400mの位置に存在する大屋敷遺跡が挙げられる。二つの遺跡の間における住居の分布状況は不明であるが、大屋敷遺跡における6世紀後半の住居は八幡川左岸の小台地中央部に寄るように分布する傾向が見られる。その状況から考えると、総社町屋敷南遺跡の集落と大屋敷遺跡の集落とは、多少隔絶して分布していると考えるほうが自然かもしれない。

4 総社古墳群の形成と集落

総社地区における古墳時代の集落についてその分布状況を概観してみたが、最後に集落

の分布と総社古墳群を構成する各古墳の位置を重ねてみたい。

総社古墳群を構成する主要古墳は現在6基確認できるが、各古墳の築造年代を順に追っていくと、5世紀後半の遠見山古墳を最古級とし、6世紀初頭の王山古墳、6世紀後半の総社二子山古墳、7世紀前半の愛宕山古墳、7世紀中葉の宝塔山古墳、7世紀後半から終末にかけての蛇穴山古墳が最後に築造された古墳と考えられる。

総社町屋敷南遺跡の集落は6世紀第3四半期と考えられることから、総社古墳群では王山古墳の築造後、総社二子山古墳の築造年代に当たる。総社古墳群は、総社二子山古墳築造後、愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳と、午王頭川と八幡川の中間を下流へと向かうように古墳は築造されていく。総社町屋敷南遺跡と宝塔山古墳、蛇穴山古墳は隣接した位置関係にあるが、両古墳が築造された7世紀代には住居は廃絶していると考えられることから、集落域ではなくなったと理解できるであろう。

5 まとめ

約1,500m²の発掘調査で住居跡が4軒という数は決して多いわけではないが、総社地区における古墳時代の集落の様相を考えたとき、看過できない軒数と考えられる。今後、発掘調査が増加し成果を蓄積されれば、さらに具体的に様相を探ることができるだろう。

【引用参考文献】

- 1 『大屋敷遺跡Ⅰ』 1993 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 2 『大屋敷遺跡Ⅱ』 1994 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 3 『大屋敷遺跡Ⅲ』 1995 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 4 『大屋敷遺跡Ⅶ』 2000 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 5 『総社村東02遺跡』 2009 前橋市教育委員会
- 6 『高井桃ノ木遺跡』 1999 大友町西通遺跡調査会
- 7 『高井桃ノ木Ⅱ遺跡』 2003 元景寺南線遺跡調査会
- 8 『高井桃ノ木Ⅲ遺跡・総集編』 2006
群馬県土木事務所・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 9 『東国の雄 総社古墳群』 パンフレット
2016 前橋市教育委員会
- 10 『村東遺跡』 1988 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

第4節 東国における総社古墳群 造営の歴史的意義

はじめに－総社古墳群の研究史概観－

総社古墳群を群としてのまとまりで捉え、分析をしたのは尾崎喜左雄氏が最初である。その成果は、『横穴式古墳の研究』や『前橋市史』第1巻古代中世編によって知ることができる（尾崎 1966・1971）。尾崎氏が具体的に検討の俎上に挙げた古墳は、横穴式石室が開口していた総社二子山・愛宕山・宝塔山・蛇穴山古墳であった。氏は、これら横穴式石室の構造的特徴及び石室構成石材の加工度の推移から古墳群の形成過程を総社二子山前方部石室→愛宕山古墳→総社二子山後円部石室→宝塔山→蛇穴山と復元した。その場合、古墳群に近接する白鳳期の造営と考えられた山王廃寺との平行関係に着目した点は大いに注目されるところであった。

その後、王山古墳や蛇穴山古墳が前橋市教育委員会によって発掘調査される機会があり、前者は6世紀初頭を前後する時期の横穴式石室を有する前方後円墳であること、また円墳と考えられていた蛇穴山古墳が方墳であることが明らかになった（前橋市教育委員会 1976、松島・中村・右島 1991）。

筆者は、これらの諸成果を受け、古墳群を構成する諸古墳の考古学的基礎的検討を及ぼすことから古墳群理解の再検討を試みた。取り分け個々墳に付与された年代観と墳丘・石室の系譜的関係の解明に意を注いだ。その結果、従来円墳と考えられてきた愛宕山古墳については、方墳であることが確認でき、また総社二子山古墳については、墳丘・石室等、綿貫觀音山古墳との親縁性が強いことが明らかにできた。これにより、当古墳群では、最終段階の前方後円墳（総社二子山古墳）に引き続き、3代にわたり方墳が築造されたことが明らかになった。なお、その後愛宕山古墳については、前橋市教育委員会が範囲確認の

発掘調査を実施し、方墳であることを確実にした（戸所ほか 1996）。この6世紀後半から7世紀にかけての総社古墳群の変遷過程（総社二子山→愛宕山→宝塔山→蛇穴山）について、個々の古墳の諸特徴を基に検討していくと、畿内地域における有力古墳の流れに密接に関係していることが確認でき、7世紀の当地域の歴史過程に当時のヤマト王権が深く関係していることが明らかになってきた。このことは、方墳・巨石構造石室・家形石棺・硬質石材加工・漆喰等が駆使された背景理解にもつながった（右島 1985・88・92・93）。

一方、宝塔山・蛇穴山古墳の築造時期とほぼ併行して進行した可能性が極めて強い山王廃寺の考古学的解明は重要である。前橋市教育委員会では、1974（昭和49）年から継続的に範囲確認と廃寺跡の全体像把握のために基礎的調査を実施してきており、現在も継続中である。その結果、当古墳群の終末期との具体的な関係性を検討できるところとなってきた（前橋市教育委員会 1976～80・82・98・2000・07・09・10）。

宝塔山・蛇穴山古墳に対する今回の発掘調査では、特に今まで実態が明確でなかった周壕構造とその規模が明らかになった。特に蛇穴山古墳の場合は、規模こそ前代の宝塔山古墳から大幅に小型化しているものの、周壕構造については、明らかに一段と念入りで整美なものになっている点は重要である。

以下では、明らかになってきた宝塔山・蛇穴山古墳の諸特徴を中心に整理し、その歴史的意義について考えて見たいと思う。

1 総社古墳群の変遷過程から見た宝塔山・蛇穴山古墳

(1) 総社古墳群概観

総社古墳群を構成する主要古墳の変遷過程については、構成する個々墳の内容も固まってきたので、次の理解に落ち着きつつある。

遠見山古墳（前方後円墳、5世紀後半）→王山古墳（同、6世紀初頭）→総社二子山古墳（同、6世紀後半）→愛宕山古墳（方墳、7世紀前半）→宝塔山古墳（同、7世紀中葉ないし第3四半期）→蛇穴山古墳（同、7世紀第4四半期）この中では、王山古墳と二子山古墳との間隔が空きすぎのくらいがあるので、実態がわからないままに消滅してしまった王河原山古墳（前方後円墳、墳丘長約60m）を入れるのも一案と考えるが、確証はない。こ

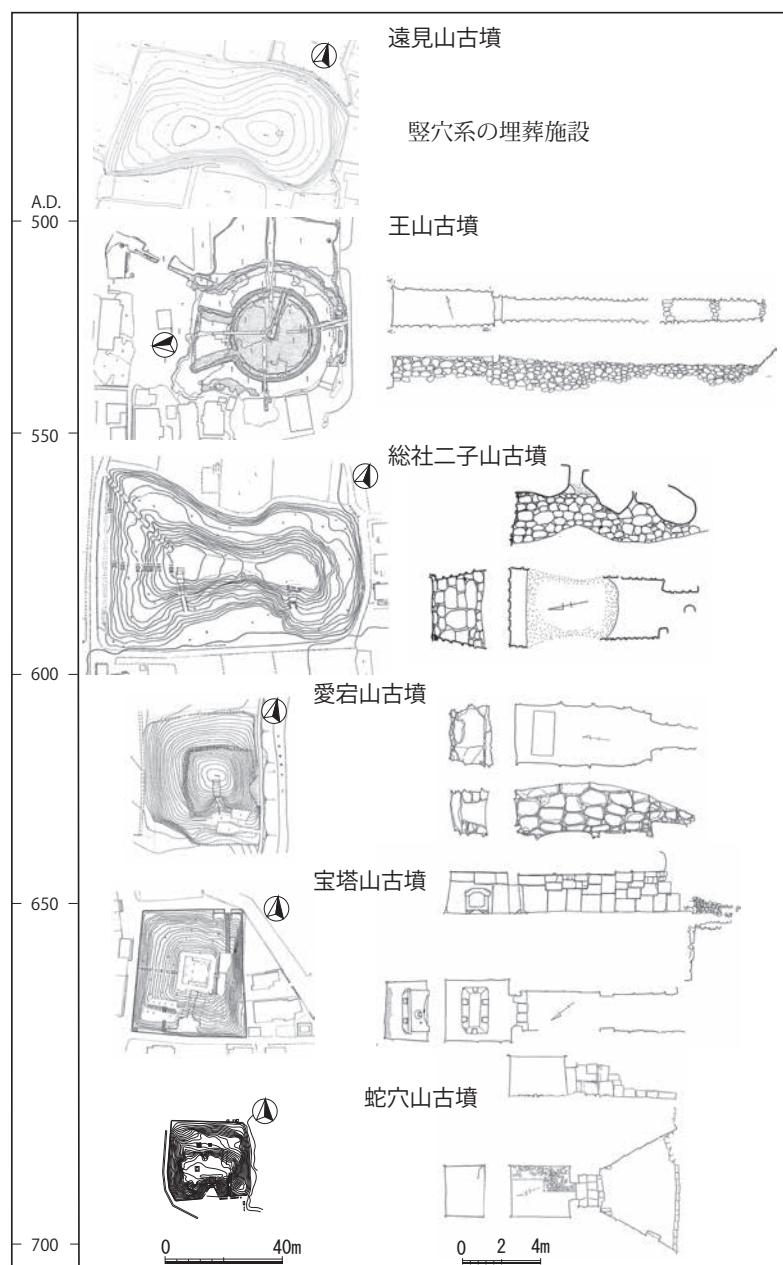


Fig. 37 総社古墳群の変遷

れを除けば、比較的スムーズな世代間の推移をたどっていることが確認できよう。

昭和10年の群馬県下一斉の古墳分布調査の成果『上毛古墳綜覧』（群馬県 1938）によるならば、古墳群が所在した当時の群馬郡総社町では、全部で15基（総社地区11基、植野地区4基）が数え上げられている。平地部の中核的エリアの割には、数が少ないことが特徴的である。前方後円墳4、方墳1、円墳10基である。円墳とされている愛宕山古墳、蛇穴山古墳が方墳なので、円墳は8基となる。これらの現状での規模を見てみると、円墳の中にも20～30mの比較的大型のものが5基存在するので、概して大型の古墳から構成されていることがわかり、上位階層に関わるものを中心とするものであったことが想定されよう。

(2) 時代の転換点を物語る構成古墳の諸特徴

遠見山古墳 平成4・6年度の範囲確認調査の中で、2重にめぐる可能性のある周壕の内壕の底面寄りでHr-FAの一次堆積層を確認できたこと、また採集資料に人物埴輪片が存在したことから、5世紀後半に属し、竪穴式系の埋葬施設であることが確実になった（前橋市教委 1992・95）。今のところ、本墳より古く位置づけられる古墳はないので、これを古墳群形成の端緒と位置づけることができる。

王山古墳 本古墳群の中では、全掘された唯一例である。上毛野地域では、5世紀末ないし6世紀初頭の榛名山大噴火（Hr-FA）後、中・西部地域で一斉に横穴式石室を有する有力前方後



Fig. 38 総社二子山・観音山古墳に類する角閃石安山岩石室の分布(右島・深澤敦仁作成)

円墳が登場する。安中市築瀬二子塚古墳、富岡市一ノ宮4号古墳、前橋市王山古墳、同正円寺古墳、同前二子古墳であり、高崎市観音塚古墳の東側に近接する八幡二子塚古墳も可能性が強い。当該期の最大級に属するすべての前方後円墳に採用されているわけであり、総社古墳群もその中に加わっていたことになる。

総社二子山古墳 本墳については、墳丘・石室とも綿貫観音山古墳との近縁性が極めて強い点が注目される。本墳は江戸期には開口してしまったらしく、副葬品は皆無だが、ここより出土したと伝えられる近世の大刀絵図を見ると、観音山古墳の頭椎大刀と瓜二つであり、両者の密接な関係性を一層強くするところである。

前方後円墳が消滅して終末期へと展開していく直前の段階には、総社二子山古墳と綿貫観音山古墳の勢力が連携し、当地域の歴史展開をリードしていたと考えることができる。このことは、7世紀の愛宕山古墳以降への特徴的な展開過程の前提条件として注意しておく必要がある。

7世紀の総社古墳群（愛宕山・宝塔山・蛇穴

山古墳）

現在までのところ、上毛野地域で最も新しく位置づけられる前方後円墳は、総社二子山・綿貫観音山古墳より一段階新しい6世紀末ないし7世紀初頭の高崎市八幡観音塚古墳であるが、これに続く7世紀第2四半期（ニュアンス的には第1四半期に近い。許されるなら推古朝

したい）に愛宕山古墳は成立する。上毛野地域では、前方後円墳消滅後に登場する唯一の有力方墳である点が重要である。最終段階の前方後円墳は、当地域の諸地域に分散して存在したわけであるから、この推移の過程に地域の支配構造の再編成の動きがあったことは間違いない。

愛宕山古墳で特記される要素として、大型方墳・巨石巨室構造横穴式石室・割抜式家形石棺をあげることができる。

宝塔山古墳は、一辺66m、高さ12m以上の3段築成の大型方墳である。従来、2段築成と考えてきたが、国立歴史民俗博物館の測量調査により3段構造であることが明らかになった（白石ほか 1990）。おそらく、その大半が利根川から搬入された川原石を駆使して築造されていることが十分想定される。

宝塔山古墳で特筆される新たな流れは、硬質石材を完成度の高い技術による切石加工により特異な横穴式石室と漆喰による白壁仕上げにある。割抜式家形石棺は愛宕山古墳からの継続であり、切石加工と漆喰使用は蛇穴山古墳に継続する。

蛇穴山古墳は、最後の古墳であり、墳丘・

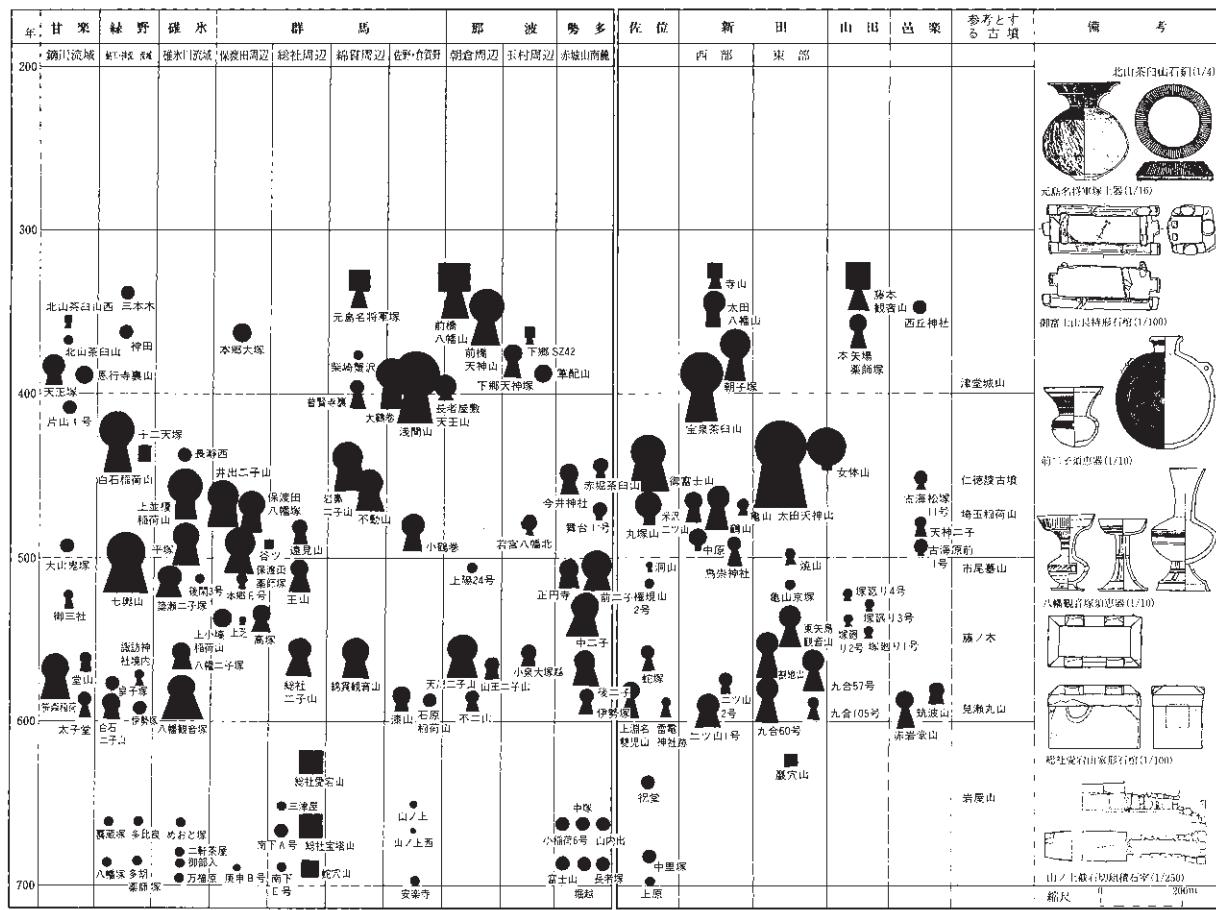


Fig. 39 群馬県古墳編年図（右島・徳江・南雲1995「上野」『全国古墳編年集成』より）

石室の規模の縮小化の流れは、畿内の有力古墳の趨勢と軌を一にするものである。なお、両石室には一尺が30cm近似の唐尺が使用されている点が、それ以外の唐尺使用古墳の存在形態と併せて注目されるところである。

2 宝塔山・蛇穴山古墳成立の歴史的意義

(1) 宝塔山古墳の画期性と成立時期

墳丘に見られる画期性 既述のように、宝塔山古墳には、当地域の古墳築造の技術的伝統の上には乗らない新たな流れを随所に認めることができる。意識的に新機軸を打ち出そうとしていたと言っても過言でない。

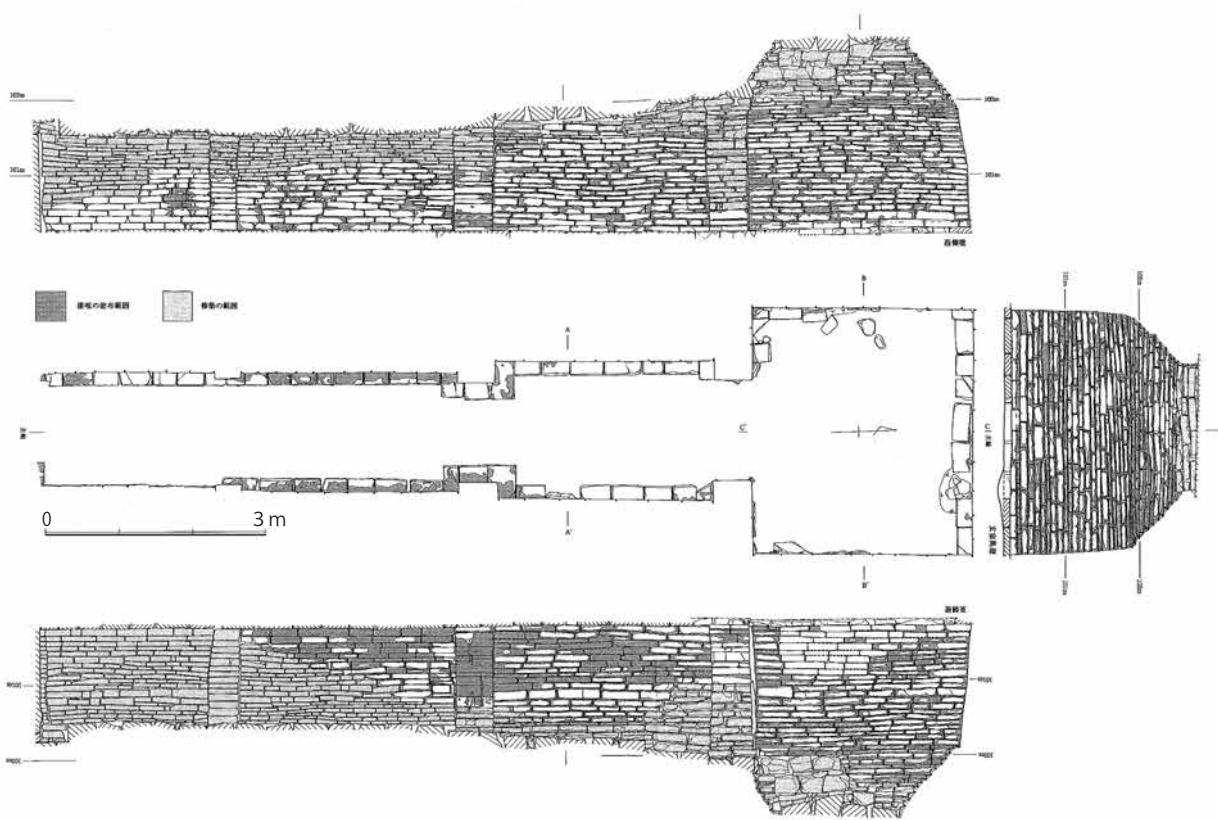
その第一は、目を見張るほどの平面規模・高さを誇る墳丘を実現している点にある。特に高さは注目されるところである。現在の地表面から約3mの高さに第一段の平坦面（基壇面）があり、これを石室の床面としている

る。巨石の切石を使用して全長12m以上の巨大石室を実現し、未だに石室の上下方向のブレは全く認められないのは、版築状の盛土構造と川原石による基礎構造が施設されているとして間違いないところである。以上のように、当墳の場合、基壇面の高さと重量のある巨大石室の存在を踏まえると、視覚的に見えてくる墳丘以上に周到な構造を実現しているところである。加えて第2・3段には少なくとも9m以上の高さを確保しているわけであり、そこに注ぎ込まれた土木技術は、それ以前の古墳築造技術の伝統からはかけ離れたものであったと考えざるを得ない。

宝塔山古墳と黄金塚古墳 宝塔山古墳と奈良市帶解の黄金塚古墳（黄金塚陵墓参考地）の石室がよく似ていることについては、早くに尾崎喜左雄氏や森浩一氏が簡単に言及していた（尾崎 1952、森 1965）ところである



黄金塚古墳墳丘と周堤（安井 2010文献より）



黄金塚古墳石室実測図（清喜 2008文献より）

Fig. 40 黄金塚古墳の墳丘と石室

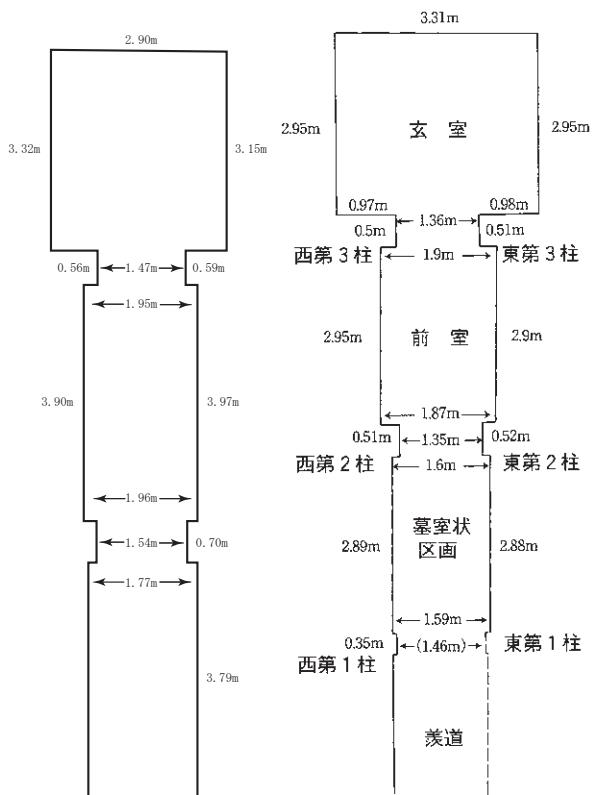


Fig. 41 宝塔山古墳石室(左)と
黄金塚古墳石室(右)の比較 (右島作成)

が、具体的な比較検討、系譜的関係の追究にまでは至っていない。それは、宮内庁所管という関係もあって、資料が公表される機会がなかったことも原因している。ところで、最近宮内庁書陵部の陵墓調査室では石室の詳細な調査と実測図の公開の機会があり（清喜 2006・08）、また、奈良市教育委員会では、陵墓調査室の調査に呼応するように墳丘周囲の周壕・周堤の発掘調査を実施し（安井 2008・10）、一気に宝塔山古墳との具体的比較検討が可能になってきた。詳細は別稿にゆずるとして、両石室の平面形態・規模を比較すると、同一の設計原理に基づいて築造されていることが確認できるところである。また、奈良市教育委員会の調査により、黄金塚の墳丘は、本体は一辺30mの通有の規模であったが、その周囲をめぐる壕内には、整美な石敷が駆使されており、さらにその外側を豪壮な中堤がめぐり、これまで含めると東西120m、南北65mを誇るものであった。

ところで、黄金塚古墳石室は、大和盆地東南部に産出する「榛原石」（流紋岩質溶結凝灰岩）の板状の加工石材を使用した「磚積石室」と呼称されている特徴的な石室であり、黄金塚を除けば、石材の産出地に近い一帯に集中的に分布しているのを特徴としている（菅谷文則 1985、磚槧墳研究会 1994）。この集中域から一人離れて存在する黄金塚古墳は、副室構造の石室形態である点でもやや異質である。ただし、構築手法等は、全く共通していることから、集中域の磚積石室に関わる築造技術者の手になったとして間違いないところである。壁面全体を漆喰により白壁に仕上げている特徴も磚積石室と共通する顕著な特徴である。この特徴も宝塔山古墳に通ずるところであり、重要である。

宝塔山・黄金塚古墳に見られるような副室構造は、同時期の畿内地域にあっては全く認められないものである。磚積石室の集中域から一人大きく離れていることとも併せ、黄金塚古墳が有していた特殊な築造背景を考慮する必要があると考えたい。その場合、黄金塚古墳と宝塔山古墳の間に、共通した石室を保持しようとした積極的背景を考えてみたいと思う。今後、黄金塚古墳の所在する奈良市帶解の地の歴史性の追究が必要である。

黄金塚古墳を含めた磚積石室の築造時期については、出土土器の検討から7世紀中葉を中心とした限られた時期の所産と考えられている（林部均 1994）。宝塔山古墳の築造時期についても、ここで示された時期を定点として考えていく必要があると考えている。

宝塔山・蛇穴山古墳古墳の硬質石材加工と漆喰 宝塔山・蛇穴山古墳石室の顕著な特徴として、輝石安山岩という比較的硬質な石材を巧みに加工して使用している点が注意されるところである。その熟達度は、宝塔山古墳の剖析式家形石棺や石室天井石、蛇穴山古墳の石室構成石材を見れば明らかである。これら硬質石材の卓越した加工技術を古墳群の至近で



写真11 宝塔山古墳の石室



写真12 宝塔山古墳の家形石棺の格狭間



写真13 蛇穴山古墳の石室

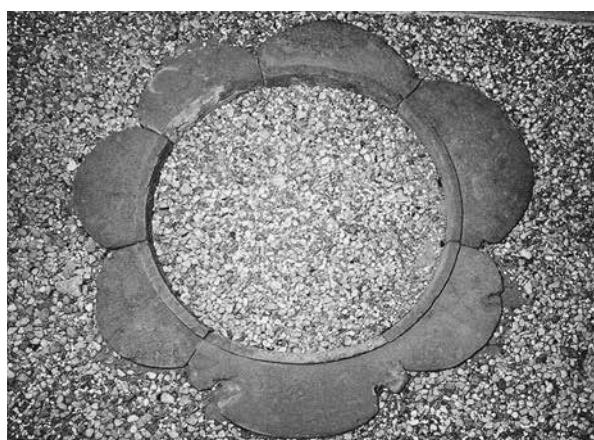


写真14 山王廃寺の根巻石

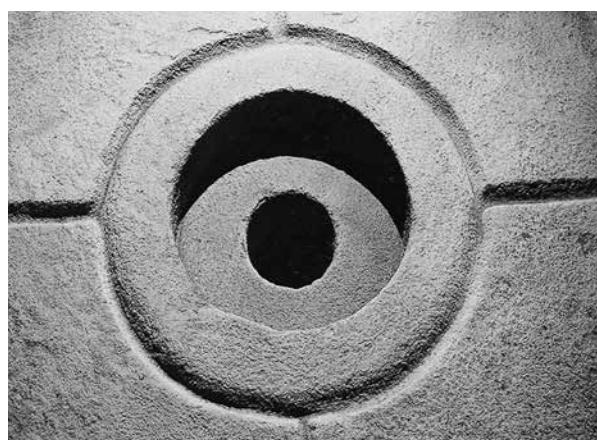


写真15 山王廃寺の塔心礎

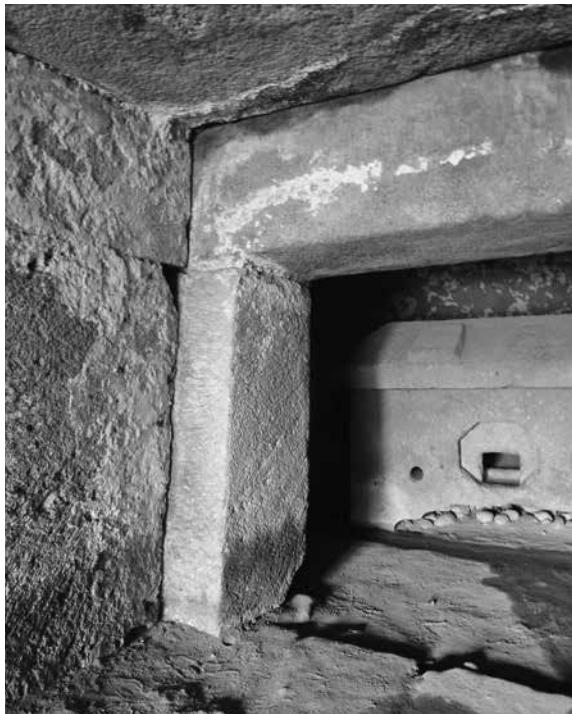


写真16 宝塔山古墳の漆喰



写真17 南下古墳群 A 号墳の漆喰



写真18 山王廃寺の塔調査

展開した山王廃寺の造営事業における塔心礎、根巻石、石製鷲尾、礎石等の石材加工技術との関係性の中で位置づけようとしたことは尾崎喜左雄氏の分析は卓見であった(尾崎 1966)。

ところで、上毛野地域内では、宝塔山・蛇穴山古墳とほぼ同時期に、中・西部地域を中心に25基の切石積石室（「截石切組積石室」と呼称している）が所在している。その場合、宝塔山・蛇穴山古墳石室の卓越した加工技術に匹敵する内容を備えたものは、北側に近接する吉岡町南下古墳群A・E号墳を除けば、ほとんど認められない。山王廃寺の造営事業と一体的な関係の中に石工工人が存在したことを考えざるを得ない。

漆喰の問題もしかりである。東京文化財研究所の朽津信明氏により、上毛野地域における漆喰の可能性が議論される機会があった。宝塔山古墳、蛇穴山古墳、南下A号古墳、同B号古墳、前橋市荒砥地区の小稻荷6号墳について、実際の資料について非破壊の科学分析を実施したところ、宝塔山・蛇穴山・南下A号墳のみが、いわゆる正式の漆喰であり、他はこれとは異なることを明らかにした（朽津 2006）。この事実は重要である。正式の漆喰が使用されているのは、卓越した硬質石材加工技術を駆使した上記3古墳に限られ、しか�数ある切石積石室の中で、数少ない唐尺使用の石室である点も注意されるところである。

宝塔山・蛇穴山古墳と山王廃寺 前橋市教育委員会による山王廃寺の基礎的調査は、佳境に入ってきており、七堂伽藍を供えた東国きっての本格的寺院であったことが明らかになってきた。現在のところ、宝塔山・蛇穴山古墳が7世紀中葉から後半にかけての時期に造墓活動が進み、山王廃寺は7世紀第3四半期を中心とした時期に造営事業が開始されている。この開始の時期は、古墳と同じ7世紀中葉までさかのぼる可能性の検討も期待される。いずれにしても、上毛野地域きつての古墳と寺院の大造営事業がほぼ期を一に



写真19 佐位郡家跡の調査(伊勢崎市教育委員会提供)

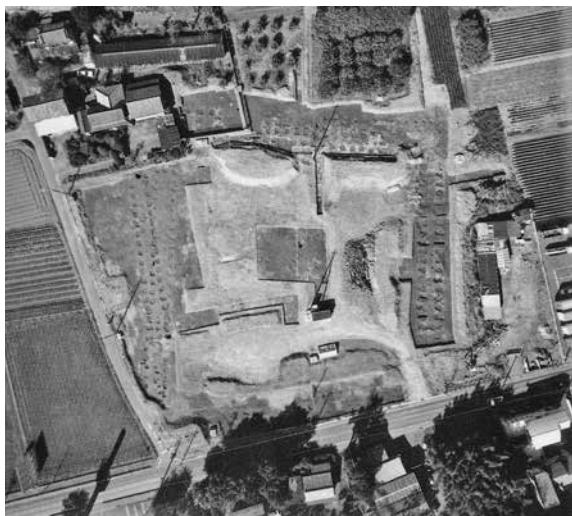


写真20 新田郡家跡の調査(太田市教育委員会提供)



写真21 大道西・東遺跡の道路状遺構
(群馬県教育委員会提供)

して、目と鼻の先の至近で進行したことになる。両者の詳細な比較検討は、今後の大きな課題である。

おわりに

宝塔山古墳、蛇穴山古墳が築造された7世紀中葉から後半にかけての時期は、いわゆる広義の大化改新が進行していく時期に当たっている。最近の群馬県における発掘調査では、佐位郡家（評家）跡とされる伊勢崎市三軒屋遺跡、新田郡家（評家）とされる太田市天良七堂遺跡の調査が進行しており、その全貌が明らかになりつつある（伊勢崎市教育委員会 2007、太田市教育委員会 2008）。これらの施設の造営が開始されたのも、宝塔山・蛇穴山古墳の時期に近い。

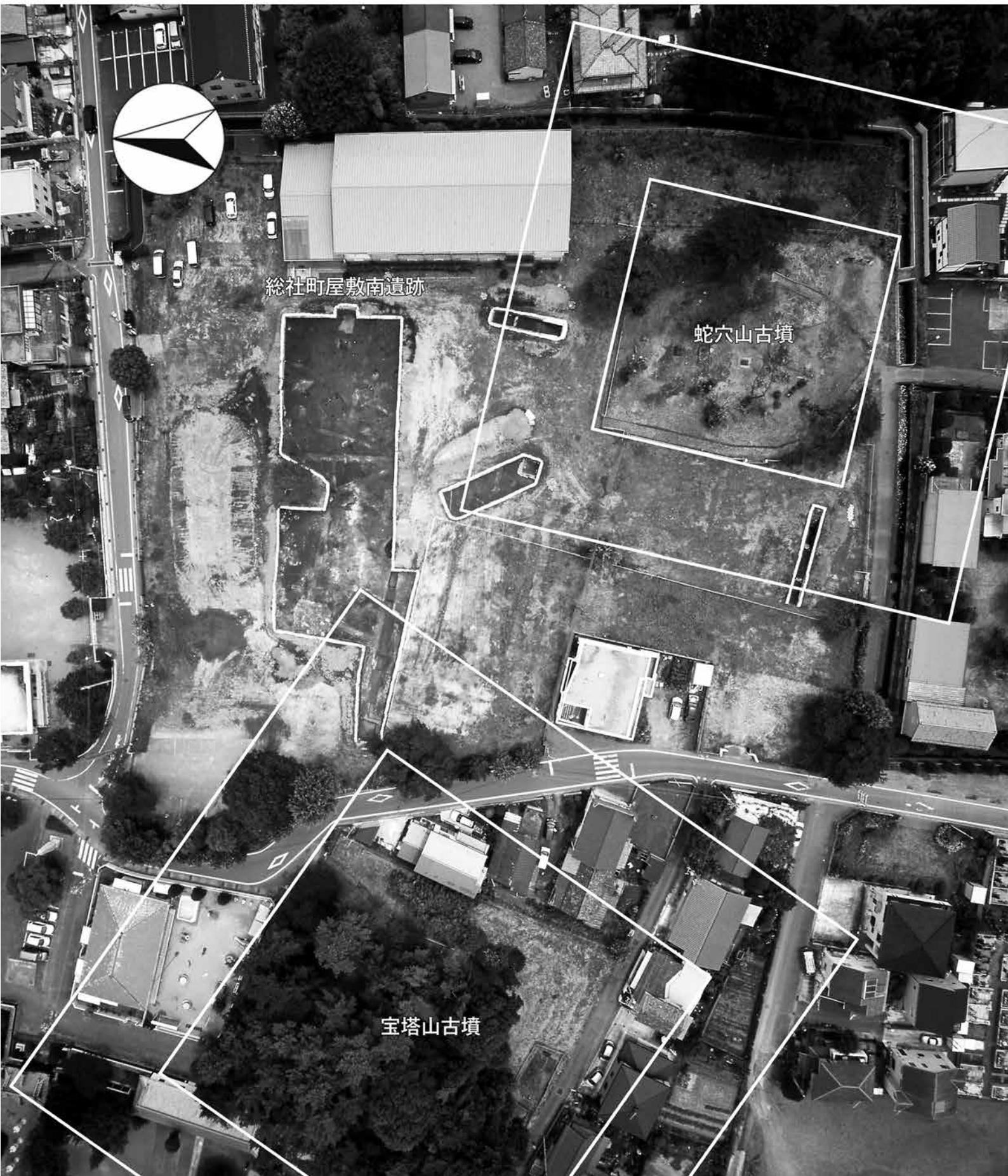
一方、群馬県から栃木県を経て茨城県へと向かう北関東自動車道の建設に先だって行われている発掘調査では、太田市北部の通過予定地に関わる大道西・東遺跡の広域の調査で、約1km以上にわたる東西走向の道路状遺構が姿を現し、後には「東山道駿路」となっていく道路状遺構と考えて間違いない。道路幅が約12mで両側溝を有するもので、これについては、道路遺構と住居跡等の重複関係から、7世紀第3四半期から8世紀前半にかけての時期の所産であることがわかっている（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010）。

宝塔山古墳・蛇穴山古墳が築造された時期の上毛野地域さらには東国は、大きな新しい歴史のうねりの中にあったことがわかる。その激動の真っ只中に総社古墳群の勢力はいたことになる。両墳とも極めてモニュメンタルな内容を含み、畿内中枢との密接な関係の中で推移したことを古墳の内容がよく物語っている。

引用・参考文献

- 伊勢崎市教育委員会 2007『三軒屋遺跡Ⅰ』
- 太田市教育委員会 2008『天良七堂遺跡』
- 尾崎喜左雄 1966『横穴式古墳の研究』吉川弘文館
- 尾崎喜左雄 1971「豪族の支配と古墳の築造」『前橋市史』第1巻 前橋市
- 朽津信明 2006「群馬県前橋市周辺の漆喰使用古墳について」『考古学と自然科学』53号 日本文化財科学会
- 群馬県 1938『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第5輯
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010『大道西遺跡』・『大道東遺跡』
- 白石太一郎ほか 1990『関東地方における終末期古墳の研究』国立歴史民俗博物館
- 菅谷文則 1985「榛原石考」『未永先生米寿記念献呈論文集』
- 清喜裕二 2006「黄金塚陵墓参考地石室前面部の事前調査」『書陵部紀要』57号 宮内庁書陵部
- 清喜裕二 2008「黄金塚陵墓参考地墳丘及び石室内現況調査報告」『書陵部紀要』59号 宮内庁書陵部
- 磚槨墳研究会 1994『舞谷古墳群の研究』権原考古学研究所
- 奈良市教育委員会 2009『帶解黄金塚古墳』
- 戸所慎策ほか 1996『愛宕山遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 林部均 1994「土器からみた磚積石室の年代」『舞谷古墳群の研究』権原考古学研究所
- 前橋市教育委員会 1975『文化財調査報告書 山王廃寺第1次調査』
- 前橋市教育委員会 1976『群馬総社古墳群 東国古代文化の中心』観光資源保護財団
- 前橋市教育委員会 1976・77・78・79・80『山王廃寺調査概報』第2次～第4次
- 前橋市教育委員会 1979・80・82『山王廃寺跡発掘調査報告書』第5・6・7次
- 前橋市教育委員会 1992『平成3年度市内遺跡発掘調査報告書』
- 前橋市教育委員会 1995『平成6年度市内遺跡発掘調査報告書』
- 前橋市教育委員会 2000『山王廃寺等V遺跡発掘調査報告書』
- 前橋市教育委員会 2007「遠見山古墳出土の埴輪について」年報 第37集
- 前橋市教育委員会 2007・09・10『山王廃寺範囲内容確認調査報告書』I・II・III
- 松島榮治・中村富夫・右島和夫 1991「前橋市山王古墳の調査」『平成3年日本考古学協会総会研究発表要旨』
- 右島和夫 1985「前橋市総社古墳群の形成過程とその画期」『群馬県史研究』22号
- 右島和夫 1988「総社愛宕山古墳の墳丘・石室測量調査」『群馬県史研究』28号
- 右島和夫 1993「角閃石安山岩削石積石室の成立とその背景」『古文化談叢』30集下 九州古文化研究会
- 右島和夫 1992「古墳から見た6、7世紀の上野地域」『国立歴史民俗博物館研究報告』44集
- 安井宣也 2008「黄金塚古墳」『奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会年報』平成19年度
- 安井宣也 2010「帶解黄金塚第2次調査」『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成20年度 奈良市教育委員会

写真図版





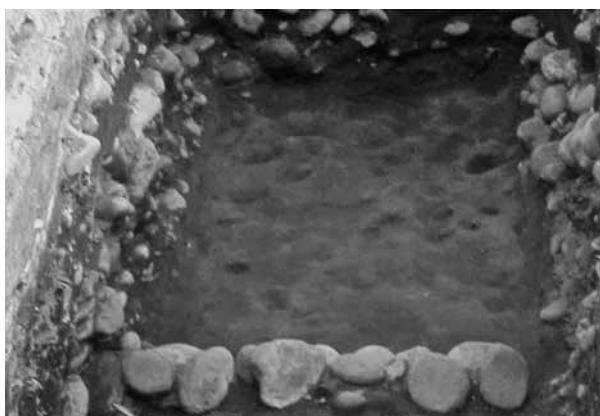
1. 蛇穴山古墳玄室入口の板石（南から）



2. 蛇穴山古墳Aトレンチ（東から）



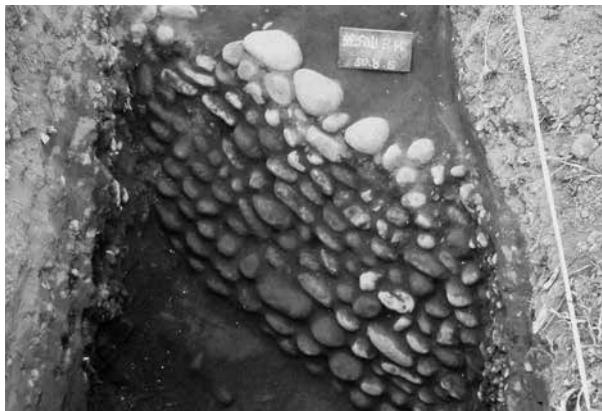
3. 蛇穴山古墳Aトレンチ前庭仕切り石（南から）



4. 蛇穴山古墳Aトレンチの葺石（北から）



5. 蛇穴山古墳Aトレンチの葺石（南から）



1. 蛇穴山古墳Bトレンチの葺石（南東から）



2. 蛇穴山古墳Bトレンチの葺石（南東から）



3. 蛇穴山古墳Cトレンチの葺石（北東から）



4. 蛇穴山古墳Dトレンチ（南から）



5. 蛇穴山古墳Eトレンチの葺石（西から）



6. 蛇穴山古墳Fトレンチの葺石（南から）



1. 蛇穴山古墳 1 トレンチ全景（北から）



2. 蛇穴山古墳 1 トレンチ中堤の葺石（北から）



3. 蛇穴山古墳 1 トレンチ中堤の葺石（西から）



4. 蛇穴山古墳 2 トレンチ全景（北から）



5. 蛇穴山古墳 2 トレンチの外周溝（西から）



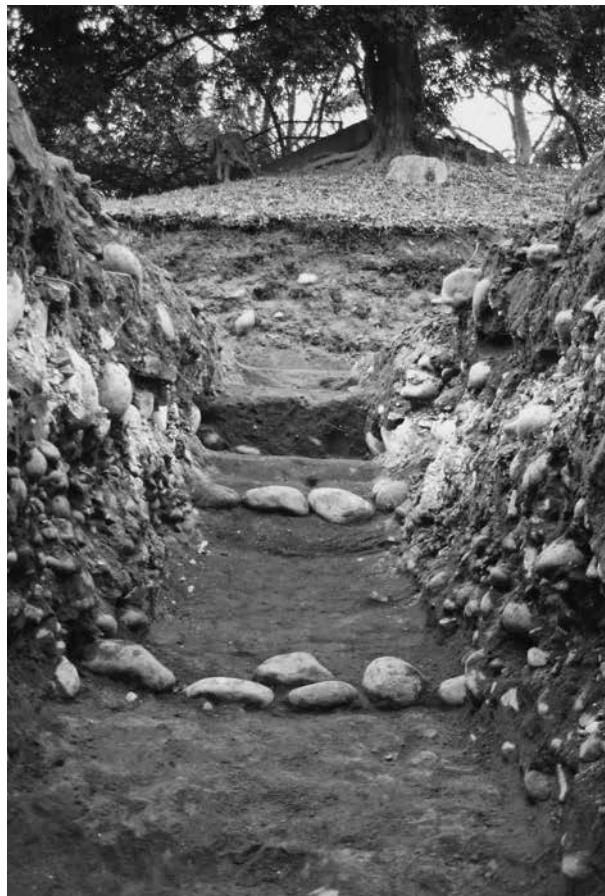
6. 蛇穴山古墳 3 トレンチ全景（北から）



7. 蛇穴山古墳奥より 4・3・6 トレンチ（北から）



1. 蛇穴山古墳 3・4 トレンチ (南から)



2. 蛇穴山古墳 7 トレンチ (東から)



3. 蛇穴山古墳 4 トレンチ中堤の葺石 (東から)



1. 蛇穴山古墳 8 トレンチ全景（東から）



2. 蛇穴山古墳 8 トレンチ上段の葺石（東から）



3. 蛇穴山古墳 8 トレンチ下段の葺石（東から）



4. 蛇穴山古墳 9・10 トレンチ（北から）



5. 蛇穴山古墳 9 トレンチ（東から）



6. 蛇穴山古墳 11 トレンチ中堤の葺石（東から）



7. 蛇穴山古墳 11 トレンチ中堤の葺石（西から）



1. 蛇穴山古墳 11 トレンチ墳丘裾部（西から）



2. 蛇穴山古墳 11 トレンチ全景（東から）



3. 蛇穴山古墳 12 トレンチ全景（西から）



4. 蛇穴山古墳 12 トレンチ中堤外側の葺石
(西から)



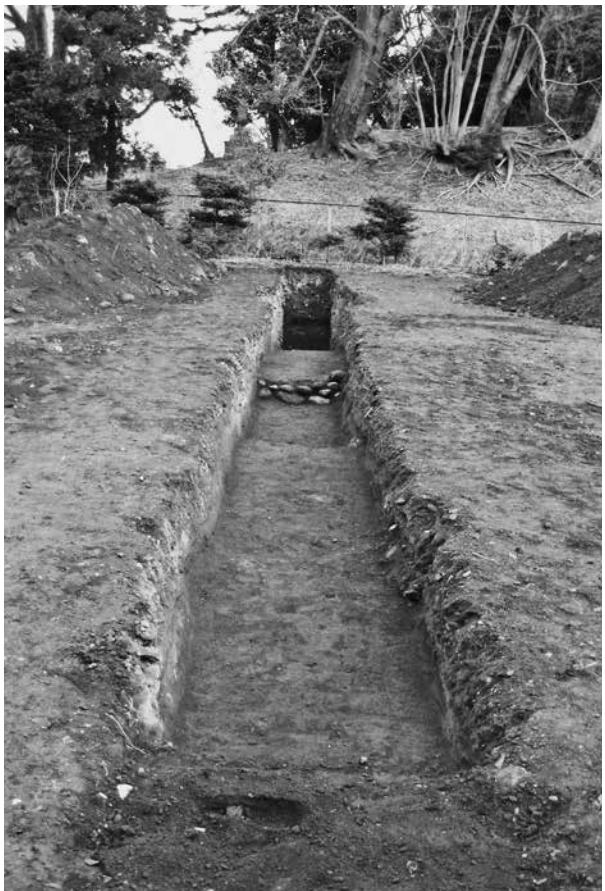
5. 蛇穴山古墳 13 トレンチ中堤内側の葺石
(東から)



1. 蛇穴山古墳 13 トレンチ中堤内側の葺石
(東から)



2. 蛇穴山古墳 13 トレンチ中堤外側の葺石
(西から)



3. 蛇穴山古墳 13 トレンチ全景 (西から)



4. 宝塔山古墳 14 トレンチ (北東から)



5. 総社町屋敷南遺跡 16 トレンチ (西から)



6. 宝塔山古墳 17 トレンチ全景 (南から)



7. 宝塔山古墳 18 トレンチ全景 (南から)



1. 蛇穴山古墳 20 トレンチ中堤外側の葺石（東から）



2. 蛇穴山古墳 20 トレンチ中堤内側の葺石
(東から)



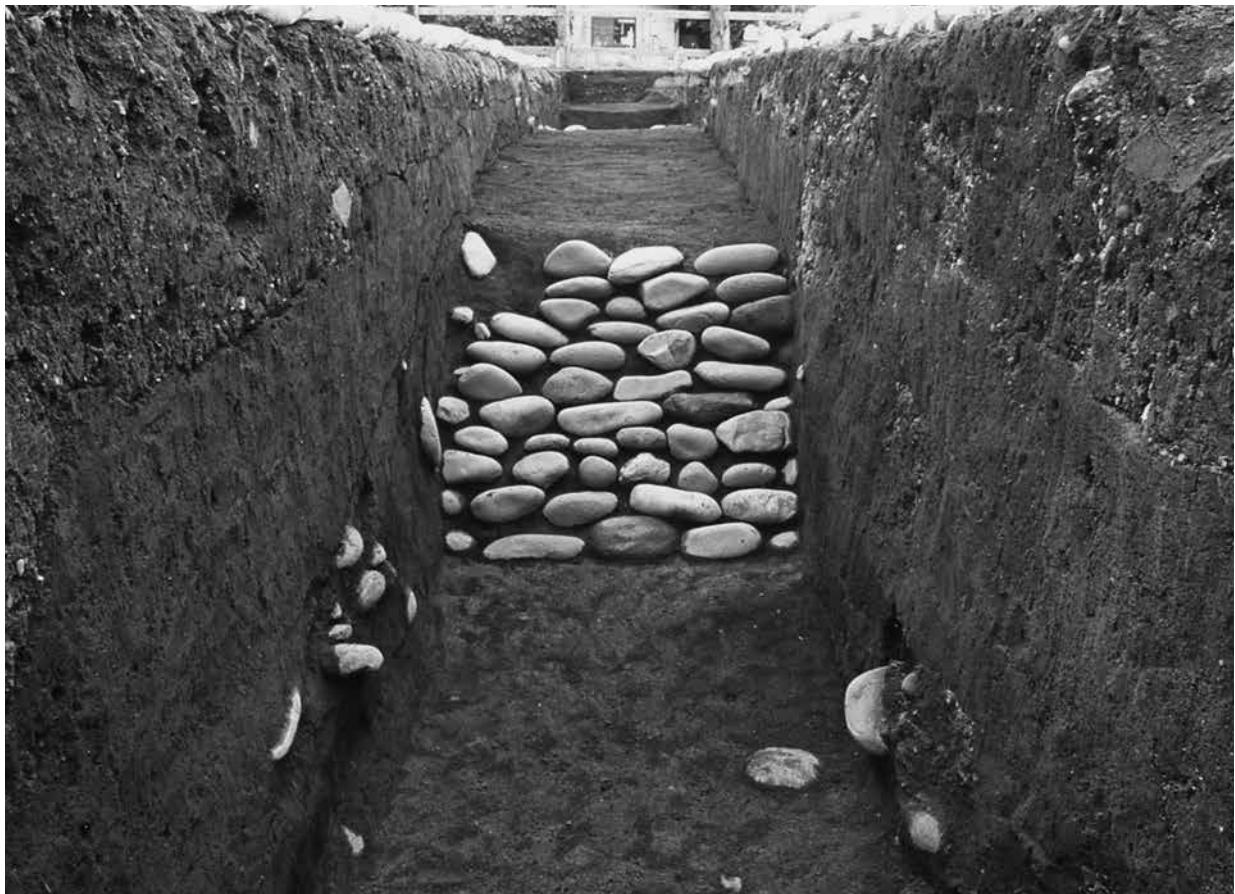
3. 蛇穴山古墳 20 トレンチ全景（北東から）



4. 蛇穴山古墳 20 トレンチ中堤内側の葺石
(北から)



5. 蛇穴山古墳 20 トレンチ全景（西から）



1. 蛇穴山古墳 21 トレンチ中堤内側の葺石（東から）



2. 蛇穴山古墳 21 トレンチ中堤外側の葺石
(西から)



3. 蛇穴山古墳 22 トレンチ中堤外側の葺石
(北から)



4. 蛇穴山古墳 21 トレンチ中堤外側の葺石
(西から)



5. 蛇穴山古墳 22 トレンチ出土の須恵器把手付瓶



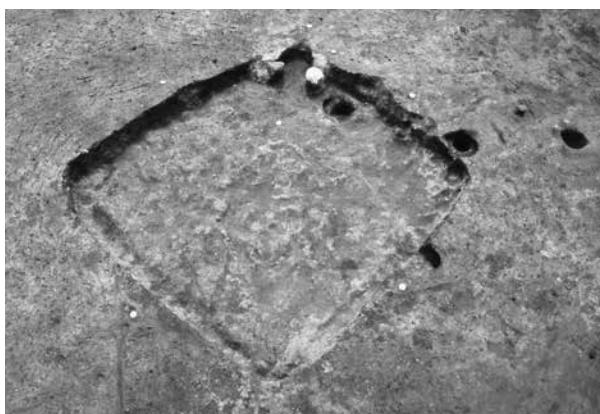
1. 宝塔山古墳の周濠（北東から）



2. 宝塔山古墳周濠北東のコーナー（北東から）



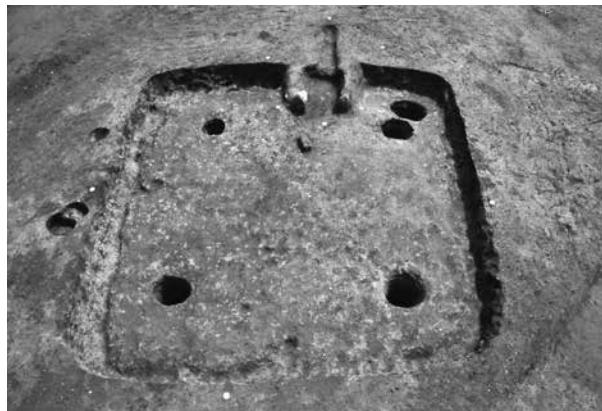
3. 宝塔山古墳周濠の南北セクション（南東から）



4. 総社町屋敷南遺跡 H-1 号住居全景（西から）



5. 同 H-2 号住居全景（東から）



1. 総社町屋敷南遺跡 H-3 号住居全景（南西から）



2. 同 H-3 号住居土器出土状態（北から）



3. 同 H-4 号住居全景（西から）

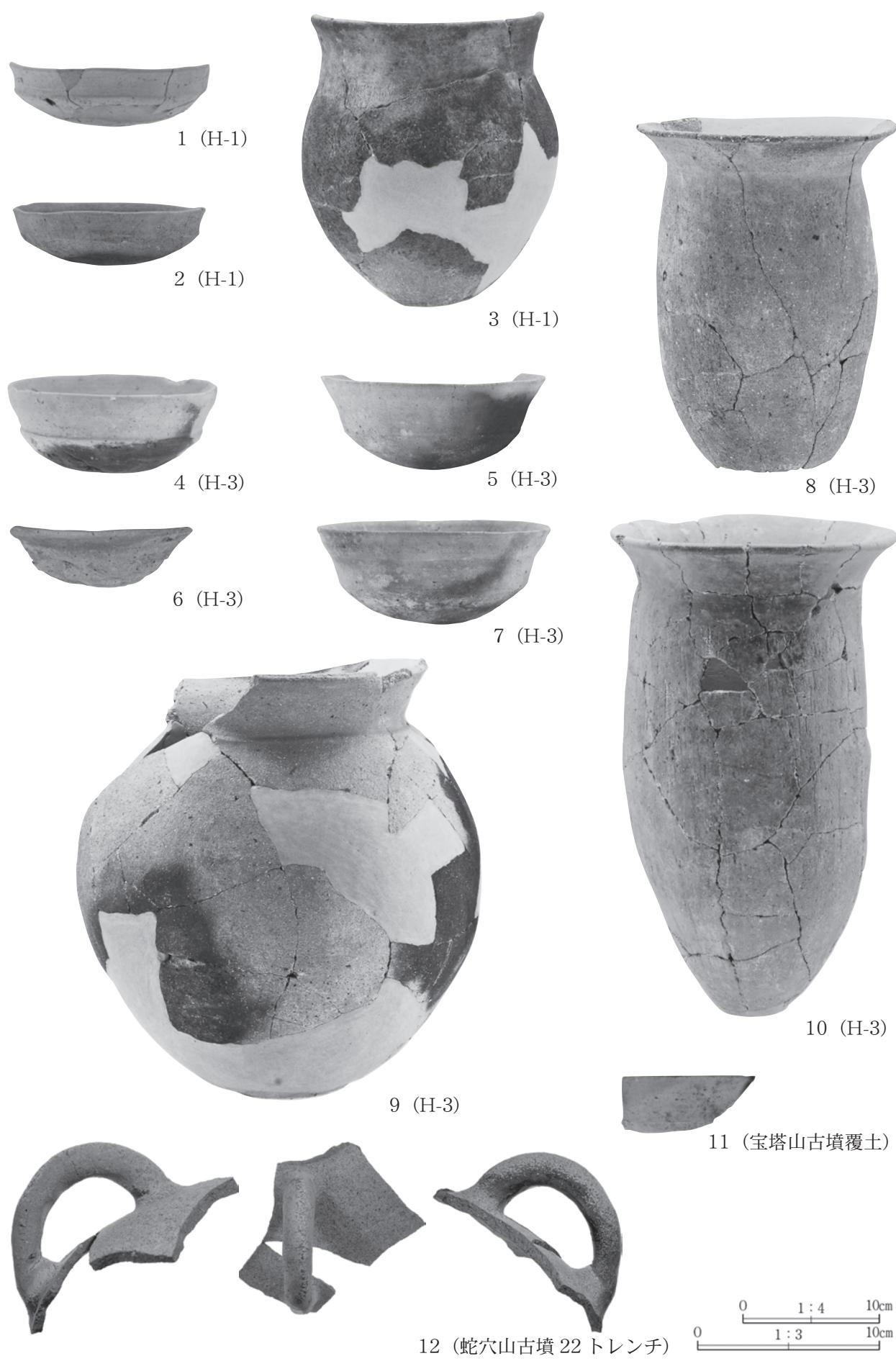


4. 同 T-2 号竪穴状遺構全景（南から）



5. 同 W-6 号溝全景（東から）

P L . 12





16 (W-4号溝)



15 (W-4号溝)



17 (I-2号井戸)



18 (I-2号井戸)



19 (I-2号井戸)



20 (I-2号井戸)

0 1 : 2 5 cm

発掘調査報告書抄録

フリガナ	ジャケツザンコフン・ホウトウザンコフン、ソウジャーマチヤシキミナミイセキ							
書名	蛇穴山古墳・宝塔山古墳、総社町屋敷南遺跡							
副書名	総社公民館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	-							
シリーズ名	-							
シリーズ番号	-							
編著者名	前原 豊・福田貴之・小川卓也・右島和夫・阿久澤智和・桜岡正信							
編著機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団							
編著機関所在地	〒371-0018 前橋市三俣町二丁目10-2							
発行年月日	2010年3月31日							
所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
蛇穴山古墳・宝塔山古墳・総社町屋敷南遺跡	群馬県前橋市総社町1586-1ほか	10201	21A139	36°24'25"	140°37'37"	20090608～20090723	1,583m ²	公民館造成
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
総社町屋敷南遺跡	集落・包蔵地	縄文時代 古墳時代	竪穴2基 竪穴住居4軒 竪穴状遺構・溝・土坑など	縄文土器、石器 土師器・須恵器		榛名山東南麓の狩猟地。 古墳築造に先行する6世紀後半の集落の検出。		
蛇穴山古墳	古墳	古墳時代	墳丘・中堤・周濠・葺石			墳丘規模44m。周濠規模82m。中堤の内外に葺石を検出。		
宝塔山古墳	古墳	古墳時代	墳丘・周濠			墳丘規模66m。周濠を含めた規模96m。		

蛇穴山古墳・宝塔山古墳、総社町屋敷南遺跡

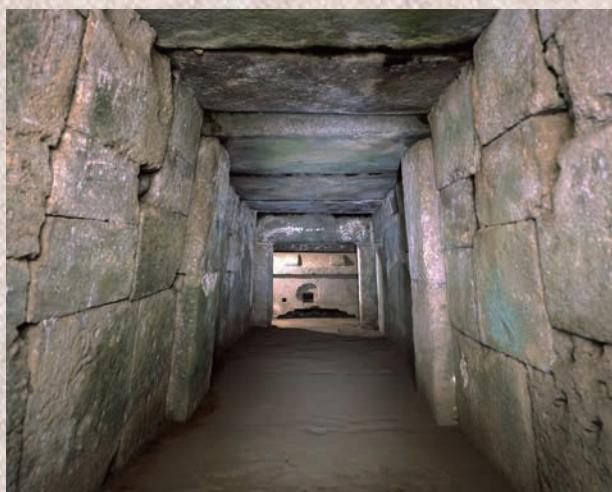
総社公民館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22(2010)年3月15日 印刷

平成22(2010)年3月31日 発行

編集 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
発行 〒371-0018 群馬県前橋市三俣町二丁目10-2
前橋市教育委員会文化財保護課内
電話 027-231-9531

印刷 朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町67



宝塔山古墳の家形石棺